明治卅七年十二月十九日
第三種郵便物認可

十月

明治四十一年十月一日發行
（毎月一回一日）

女子文壇



第四年第十四號

東京女子文壇社發行

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

醤油醸造界の一大革新

最良醤油



天下一品

マツニホン

最上醤油

フジニホン

最上醤油

ヒシニホン

㊮資本金 壹千萬圓

醸造元

日本醤油醸造株式會社

東京深川區小名木川通　電話浪花「長」三七七三番 一五九五番

特色

製造清潔
品質佳良
黴を生せず
價格低廉

特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式醸造方法及機械的裝置により精良無比　醤油を醸造販賣す

特約販賣所

東京日本橋區北新堀町

合資會社 **日本醤油東京販賣所**

電話浪花「長」一四六番

其他東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

女子文壇第四年　十月一日發行

毎號　皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ





第十四號目次

女子文壇第四年　十月一日發行

每號　皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ



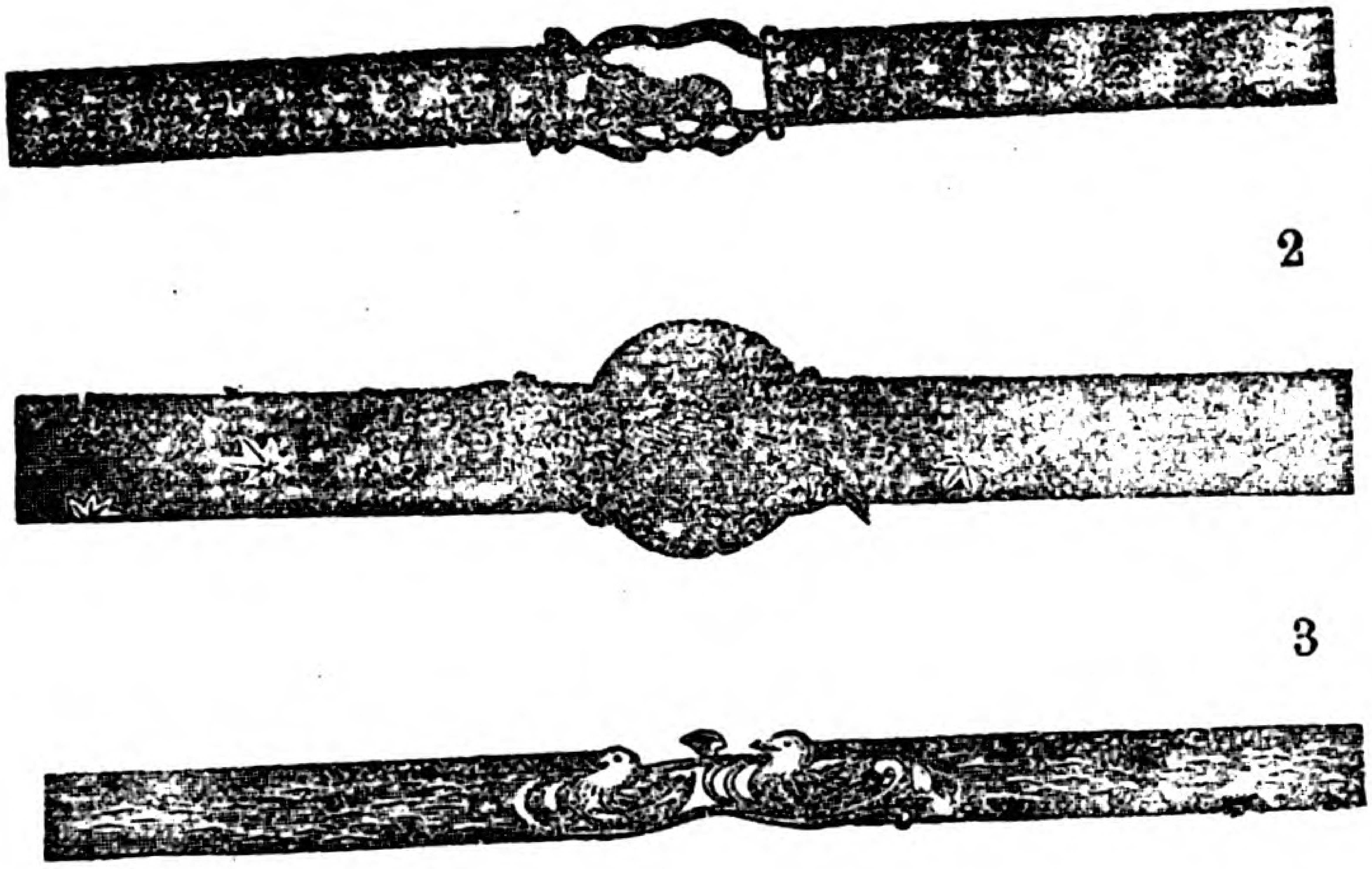
(甲の二)



第十四號目次

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

流行の帶締



上圖新形帶締めは孰れも第一流の名匠が彫刻せし品に有之此の外意匠彫刻とも種々時好に適し候品取揃へ置き候間御一覽給り度候

1 十八金松竹梅の透し彫……………十七圓より

2 十八金ヒスイ、オパール應用月に雁の圖……………廿八圓より

3 十八金同上水に都鳥の圖……………十五圓より

印章入指環



上圖新案意匠登錄允請印章入指環は考案最も嶄新にして時勢の必要を穿ちたる外觀優美にして實用に適し今や紳士間の流行品と相成申候

一圖は外觀にして二圖は開きたる所三圖は即ち印章を取り出したる所

十八金製十七圓五十錢より同上寶石入十七圓五十錢より

東京日本橋人形町通り

澤田治助

電話浪花二五六九番

振替貯金一一二七二

鳥の言葉



大江原色版部製版

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

常に婦人に適切なる大問題を解決するは本誌也

記事有益

婦人世界

體裁優美

十月一日發行 毎月一回 三巻十一號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊分郵税共九十錢 十二冊一圓七十五錢

▲婦人は如何なる男子に嫁ぐか…… 村井弦齋

▲子供を遊ばせつつ教育す 東洋幼稚園長 岸邊福雄

▲想像した日本婦人と見て驚いた日本婦人 米國女學生…

▲他家を訪問して愉快に思ふ事 秦利舞子

▲西洋の婦人結婚法

▲文藝問答 本號より新に開始

▲姙婦は如何なる醫師を選ぶか…… 榊博士

▲私の娘が成長せば如何なる人に嫁入らすか…… 三輪田女學校教頭文學士 三輪田元道

▲私は十五人の子女を養育するに如何に苦心せしか…… 服部金太郎氏夫人 服部まん子

▲文學士を養子に貰ひて失敗せる寡婦の實例 東京女學館幹事 西田敬止

▲私の良人は高等官を辭して炭屋を開業せり… 前遞信事務官補夫人 猪越せい子

▲閨秀畫家野口少蘋と跡見玉枝の面影

▲袖口は如何にせば體裁よくなるか 磯村春子

▲注意すべき小兒の百日咳 醫學博士 加藤照麿

▲懸賞當選 我が家の實驗

▲弦齋夫人の料理談

▲義齒は如何に取扱ふか ドクトル 志村誠膺

▲婦人服の裁縫懸賞募集あり

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 (郵便振替貯金口座參貳六番) (電話新橋八七四番) 賣捌全國書店

誌友面影（十七）

（續々お寫眞の寄贈を望む、お返しも致しますから）



（大阪）古川糸子

（豐後）佐久長井しづ子

（宮崎）岩切いと子

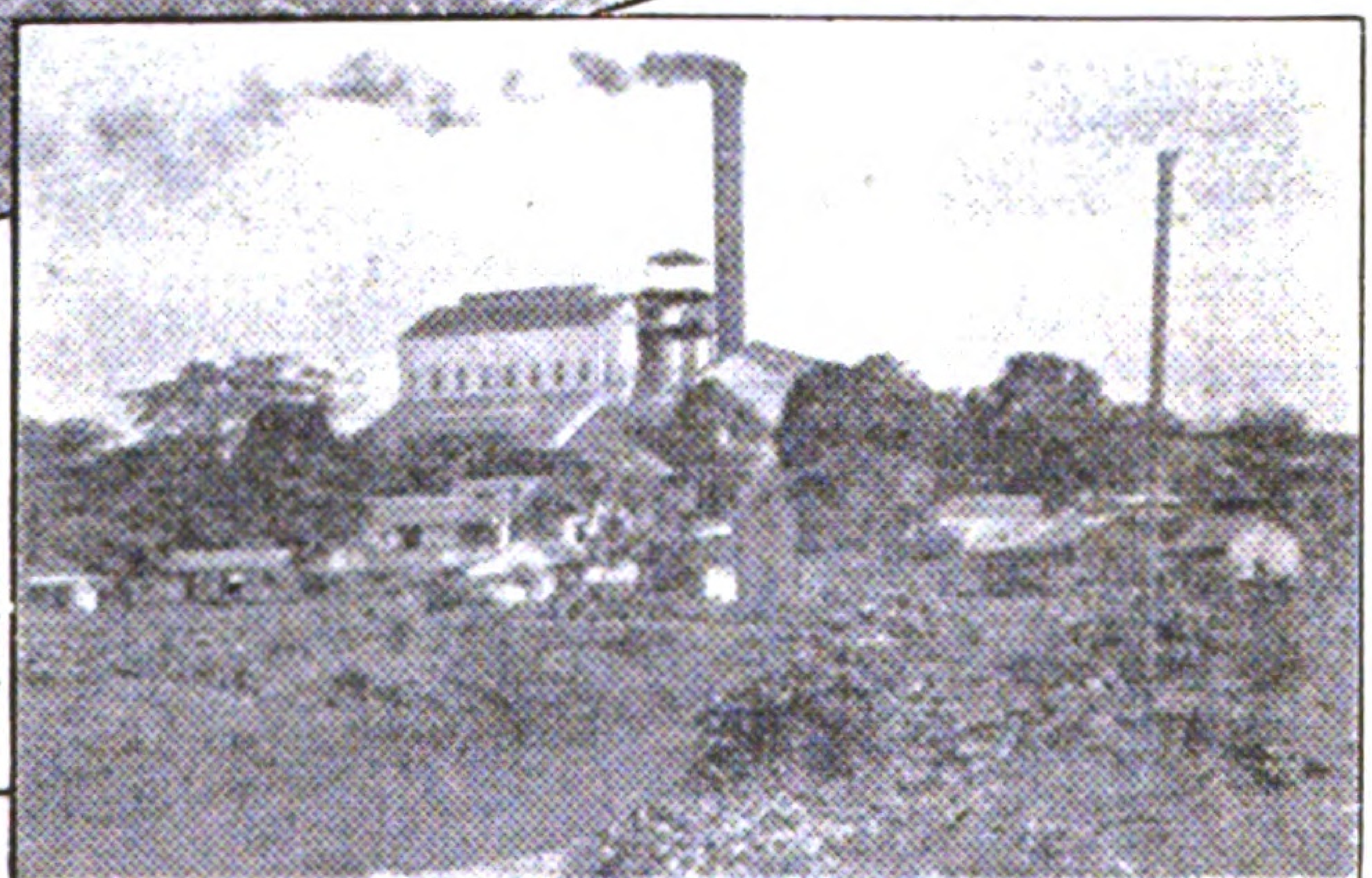
（德島）古林敦子

（鳥取）渡邊禁清子

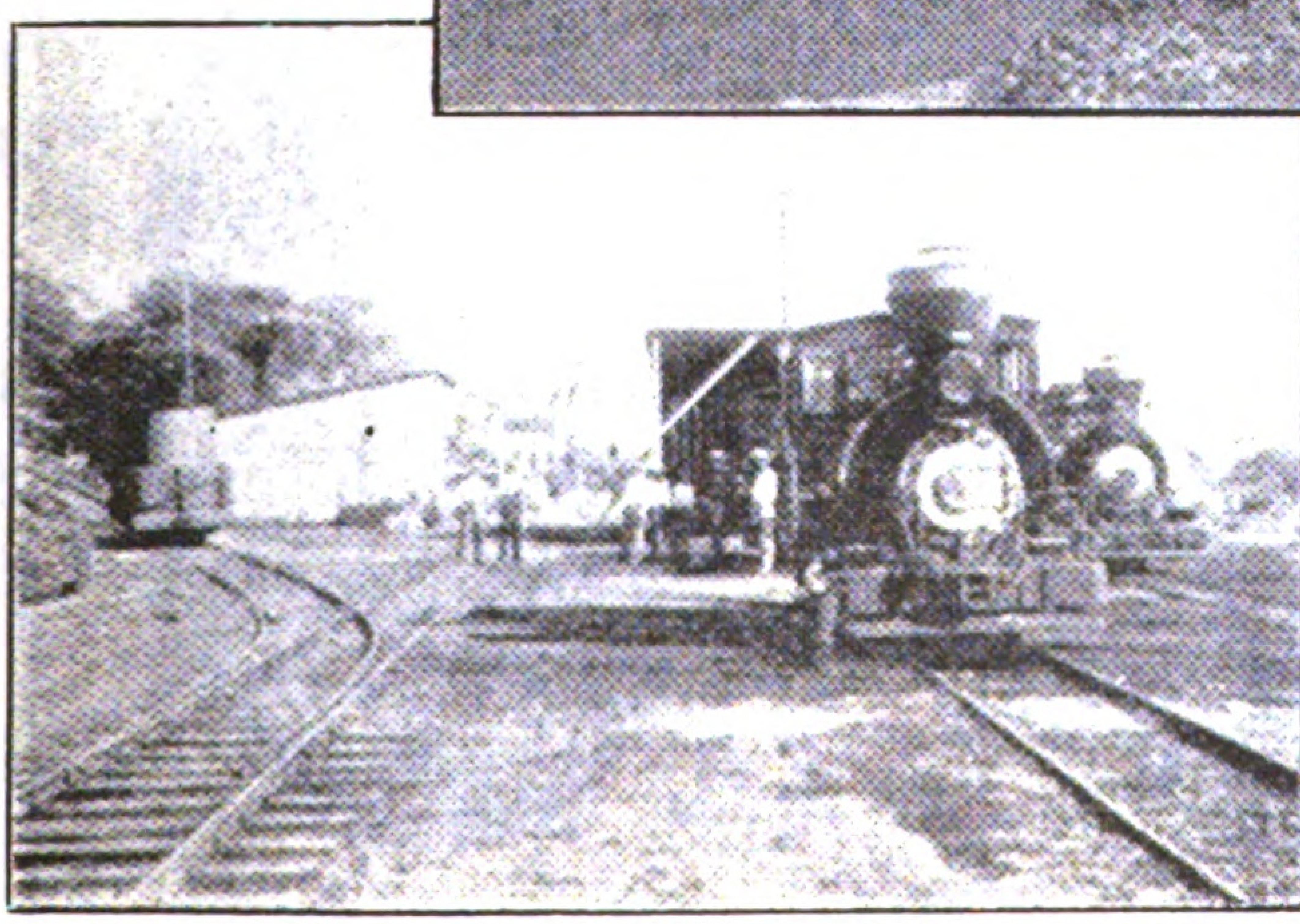
布哇風光



甘蔗收穫の光景



ワイパフ製糖場



（在布哇　上土井定子寄）

ワイパフ耕地停車場


水おしろい
本舖東京
大和屋

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

腦病を根治し記臆力を増進する靈劑

[illegible]記臆増進

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の元理に徹し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば**腦病、神經病**を根本的に**根治**し精神爽快智力活潑となり**記臆力大に増進**し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力欠乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に増進するを誓て確證する所なり（効驗）腦力を明快にし腦病神經病頭痛を全治し逆上を引下げ記臆力を増進するは勿論●健忘症●記臆欠損症●腦充血●便秘●不眠症●神經衰弱症●婦人ヒステリー●心悸亢進●腦力乏弱●神經系諸病●精神疲勞●身體衰弱●貧血諸病●情慾減退●遺精病等の諸症に用ゆれば其病根を斷ち筋肉を太め體量を増し強壯の身體となり人世天賦の快樂を受くるに至る現世紀唯一の特効新劑なり：：：常に腦神經を過勞する人、逆上腦充血を未發に豫防せんとする人、腦神經を健全にし精神快活に記臆強健を望む人は論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

（藥價）七週分參圓五拾錢 五週分貳圓六拾錢 參週分壹圓六拾錢 壹週分六拾錢（送料）各拾錢宛

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に聯關して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痔毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡するも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割増しの事

●以上二藥 **專賣元** 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

▲世界唯一 **麻病消渇の根治新藥**

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の實藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**麻病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にして必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用者豫め之を諒せよ藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割増しの事

奏効確證 美容新劑

やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑大瓶一個を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

藥價送料共特別製大瓶貳圓卅錢▲中瓶同上壹圓廿錢

以上三藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新學期開始──絶大新案通信教授

如何ほど文字の惡しき方でも

本會獨特の特許速成（實用新案特許 專賣特許）の方法にて練習すれば如何なる生來の惡筆にても僅少の時日にて先天的能書家と稱せらるゝ樣に上達する事機械的である之は特許の數字に依て遺憾無く說明されてある尙之迄教授したる會員の書蹟が如何に上達して居るかは會則に附してあるから御覽になれば分る事である

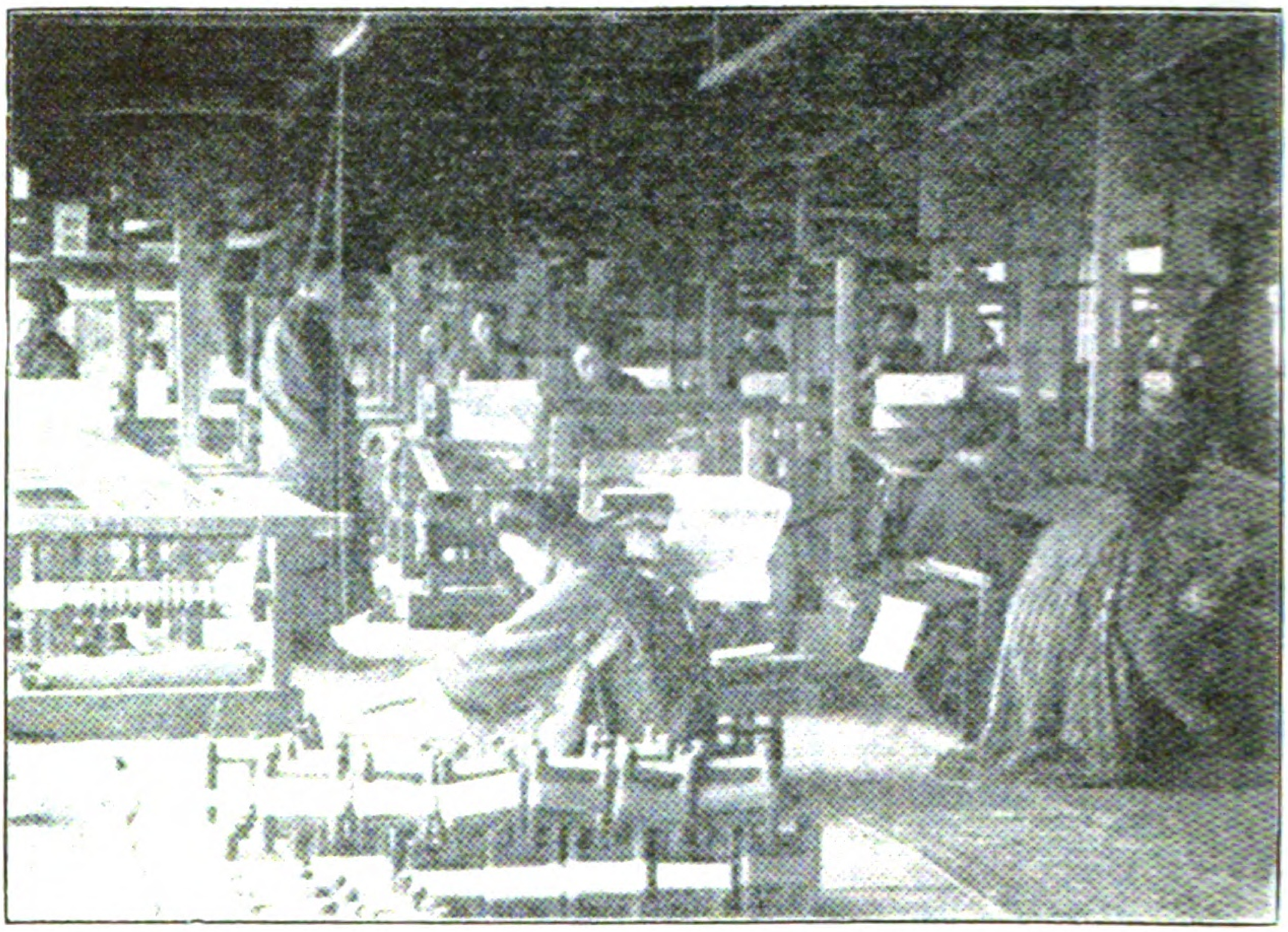
顧問 伯爵 東久世通禧閣下◎楷行草三體及假名文（細字とも）六ケ月卒業

書者 文部省習字檢定試驗委員 稻川雲谿先生及外講師大家數名

見本 詳細會則 無料進呈 ─ 東京本郷森川町 電話下谷三〇一壹

帝國習字速成學會

赤穂染織學校生徒の織物實習



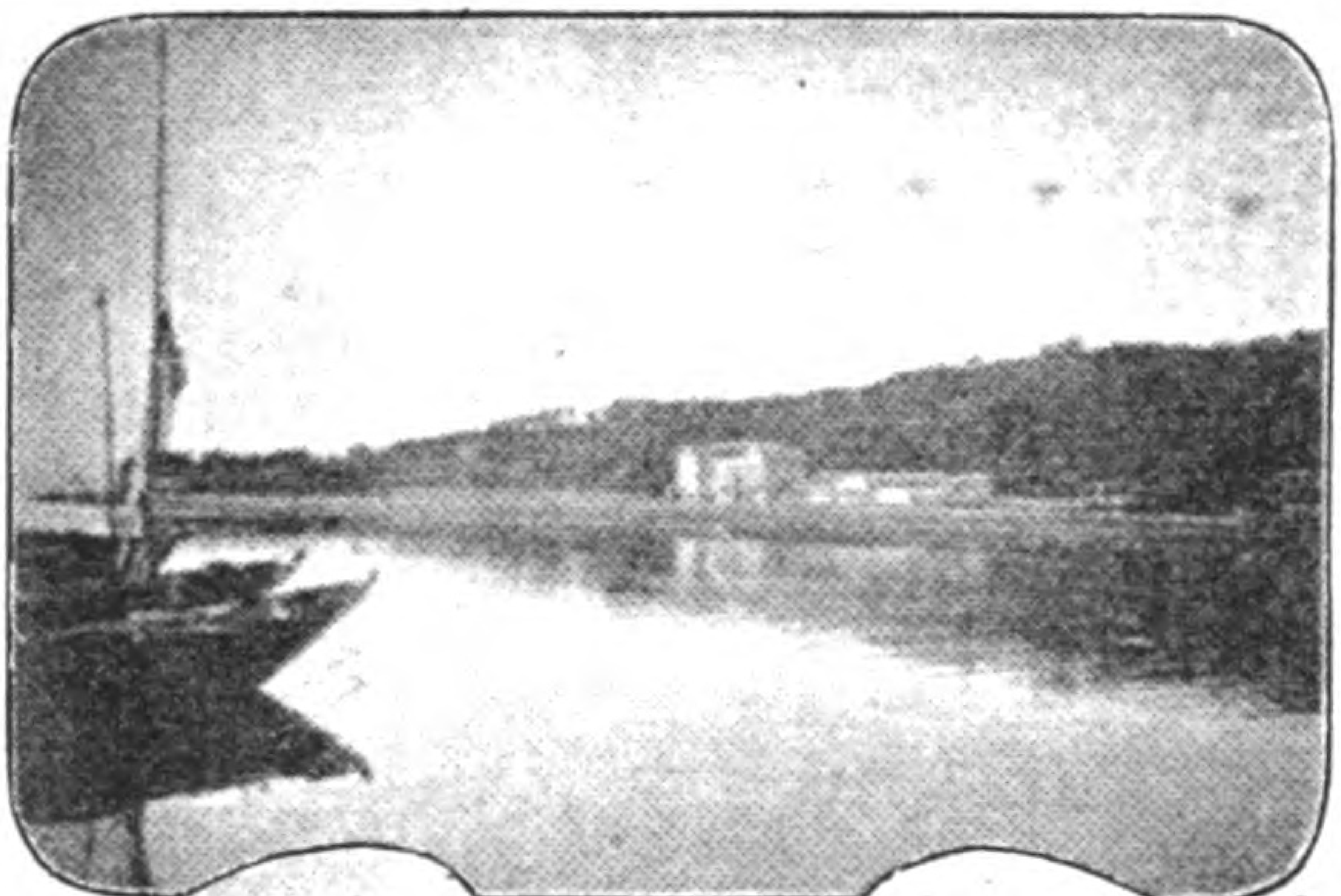
（長野縣　小田切良枝子寄）



（東京　無名氏寄）

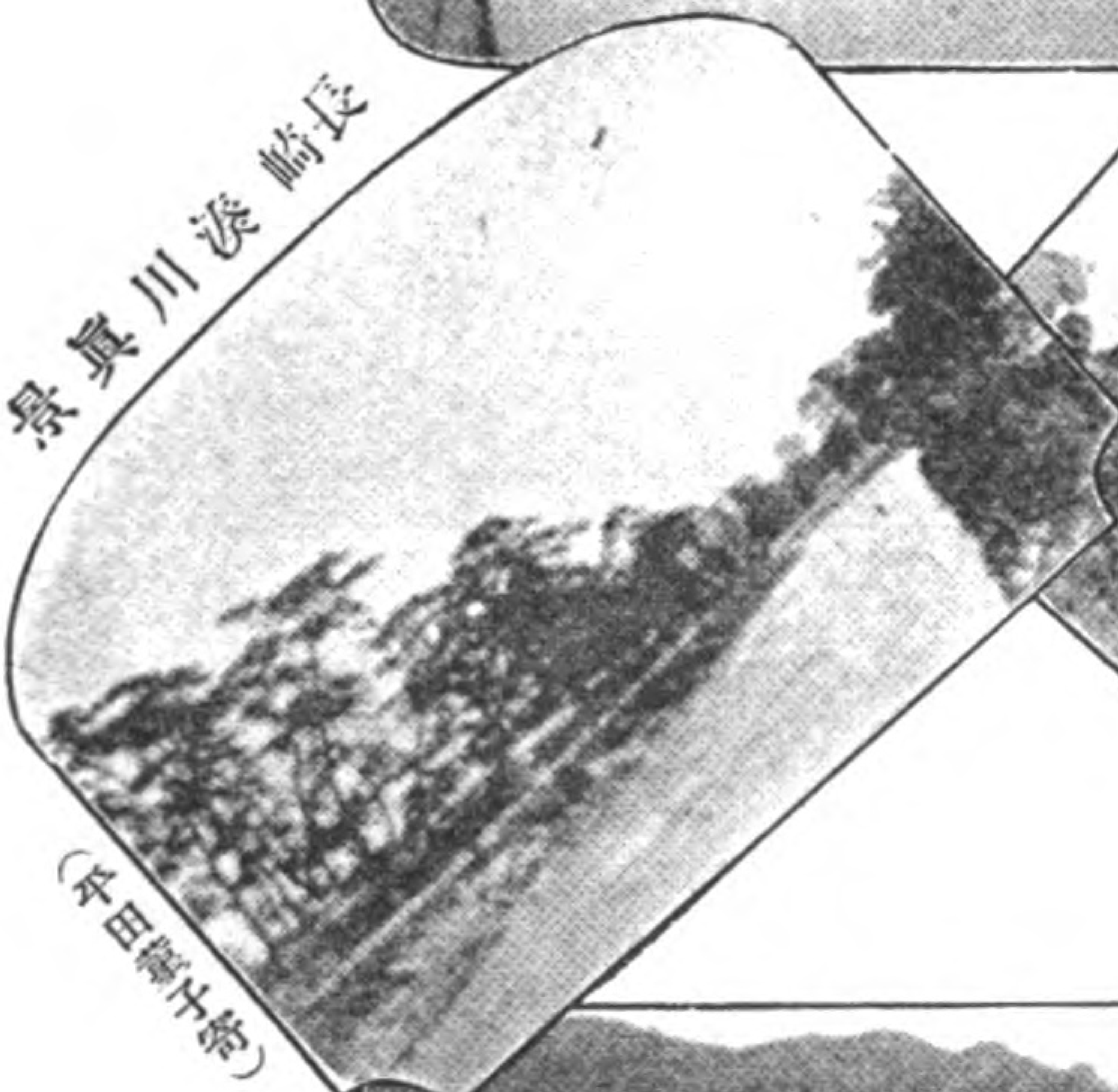
私立奎文高等女學校生徒の裁縫實習

福岡縣水產試驗場の遠望



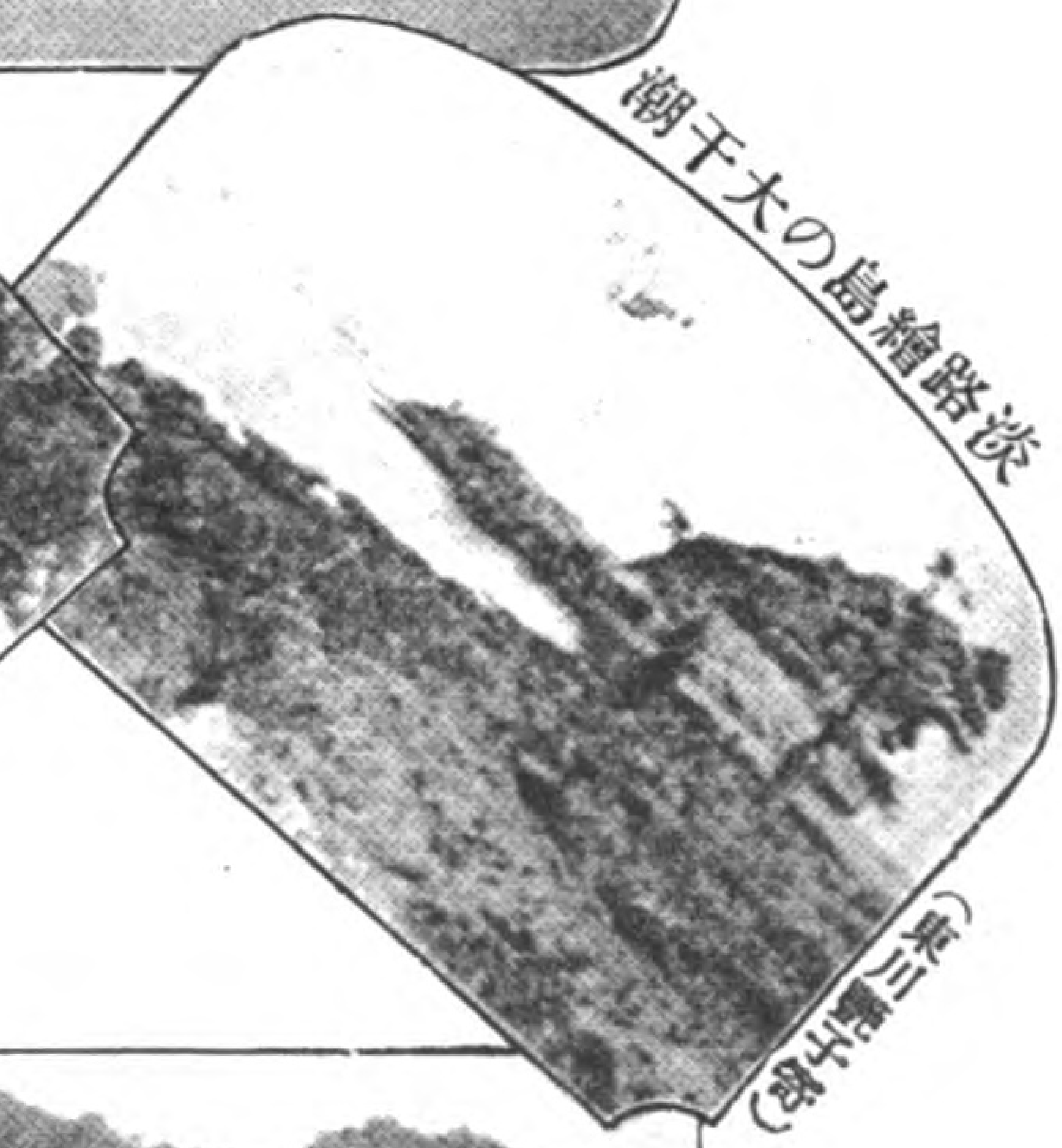
（山田改枝子寄）

長崎淺川眞景

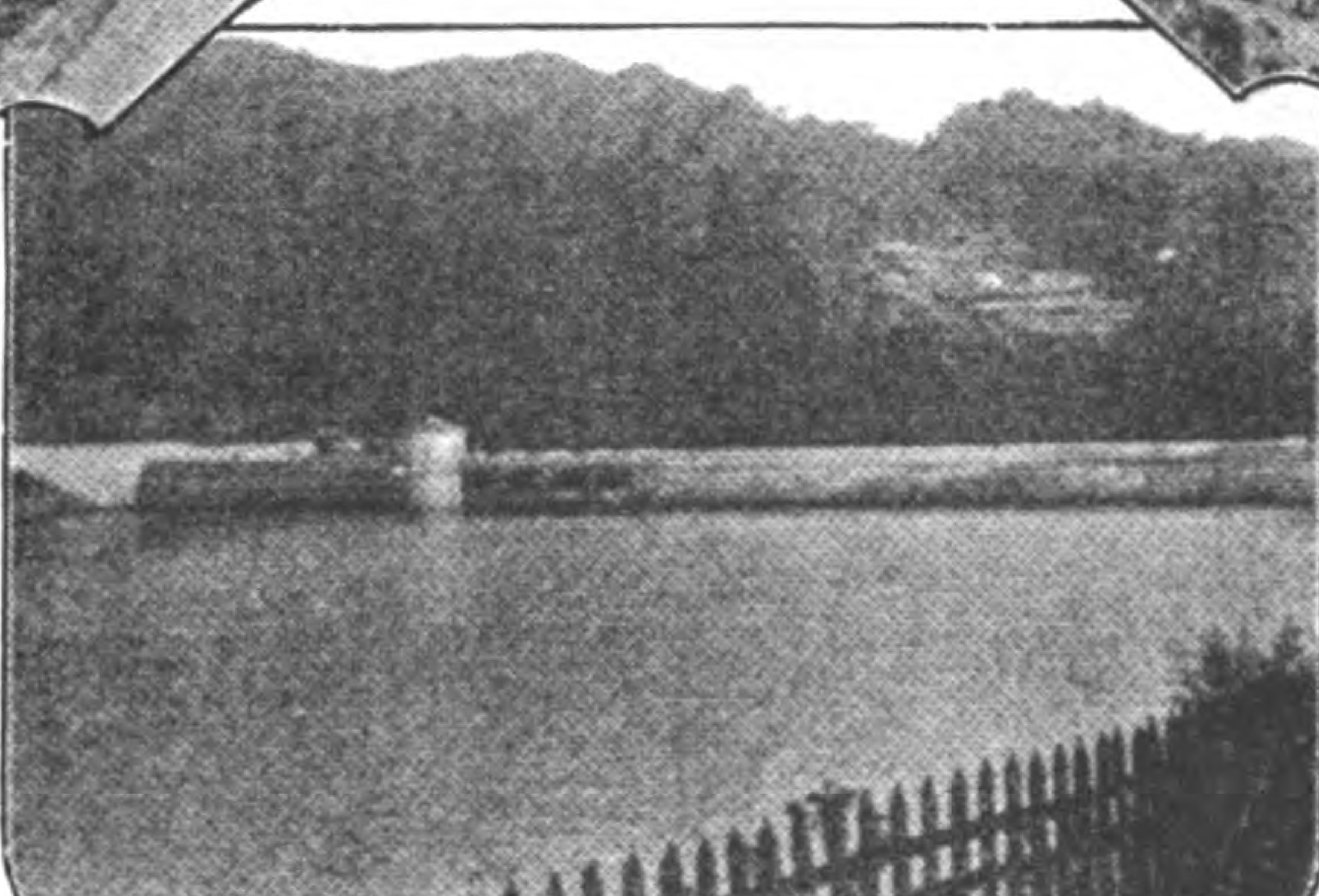


（牟田繁子寄）

淡路島繪島の大干潮



（東三郎子寄）



（仝上）

神戸市水道烏原の水源池

女子壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女學部新設

新學期開始

第一號 十月五日發行

此の際 入會金免除 の特典あり目下入會の最好機なり。

實用女學講義錄

新設 趣旨

本會は中學講義錄の發行に從ふ事既に五年進歩せる通信教授法は自宅獨習の目的を達せしめ得べきことを信じ今回更に女學部を新設して實用女學講義錄を發行し女學校に入ること能はざる人の爲に女子必須の學科を遺憾なく講習せしめんとす

學科 組織

本會は多年の經驗により短かき時間と少き學費とを以て修了せしむべき組織とせり即ち講習全期を一ヶ年半となし之を三學期に分ち毎月講義錄二冊を發行す講師は皆各科專門の大家のみ也。會費は最も低廉、都會一ヶ月の遊學費を以て優に卒業するを得べし

講義錄

女子唯一の目的は家庭の主婦たるに在り本會講義錄は高等女學校令に準據するは勿論勉めて實用に重きを置き以て圓滿なる家庭の主婦を作ることを期す▲講述最も平易にして懇切、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難きことなきを信ず

女學 雜誌 進呈

本會々員は講義錄を受くるの外毎月女學雜誌「姫百合」を無料進呈せらるゝ大特典あり「姫百合」は現代知名の女子教育家及び專門大家の訓話學說及び純潔なる家庭小說を收むるの外會員諸孃の文章和歌等を斯道各家の選評を經て掲載すべし。

規則書 申込次第直に進呈す

東京神田駿河臺
電本局三千四番

大日本國民中學會女學部

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

見よ

如斯やさしく面白き初等英語雜誌あるか?!
號を逐ふて愈々益々やさしく面白くなる!!
見本希望者は郵券五錢を添へて申込まれよ

理想的初等英語雜誌

初等英語研究

第一卷第十號要目（十月一日發行）

科學界の偉人ニュートンの肖像と略歴
次郎のＡＢＣ（發音綴字の話）
習字の手本（寫眞版）懸賞習字募集
讀本ひとり學び（新案獨案内）
育より倫敦まで（暗誦用英語）
太郎の日記（英文日誌の手本）
英語の歌（曲譜附）
もう少し氣を附け玉へ（英作文組立法）
秋季大運動會（やさしい會話）
國風俗、英文和譯の公式
文法の話（應用英文典）
オヲルドボイズソサエティ（初等英語研究青年會）
空似くらべ（英語異同辨）、ハイカルラ演
先生の手帳（英語の勉强法）、英語の遊
吾輩は郵便函である（英文手紙の書方）
天眼鏡（初學の誤る英語の訂正）
其他新聞の研究、懸賞繪さがし、懸
賞試驗問題等趣味の記事多し

附錄 兎の旅行（八頁に渉る面白き繪入西洋お伽噺）

◎初號以下數版を重ね全部取揃あ

每月一回一日發行定價金五錢郵稅五厘
一ケ年分十二冊六十三錢但郵稅共

懸賞

本號には公前の寄拔なる懸賞課題を掲ぐ、授賞者は約三百五十名賞品には金牌銀牌あり、課題は中學一二年の程度、何人も試みよ。

初等英語叢書出づ

英語英文の書籍は澤山ある。併し眞の初學向は頓とない、在つても不親切な大ざつぱな俗受專門のものばかり、本當に讀者の爲めを思つたものは殆とない。此叢書は此陷缺を充すため英語研究者が新に稿を起したもの、これを讀めば英語を解らぬものだの、六つかしいものだのといふ人は、恐らく無くなるだらう（每冊紙數約百五十頁定價各廿五錢郵稅四錢）

第一編

初等 英作文の話

英作文の手ほどきを最も詳密に最も分り易く說明したるもの、中學二三年は更らなり四五年生にも亦必讀の書なるを信ず。獨修者も之に依りて容易に困難なる斯道の門戸を開くを得ん、

第二編

初等 英文法の話

英文典は六つかしくもやさしくも如何樣にも說明の出來るものなり。從來學生の常に英文典に頭を苦めたるは或は之を平易に說明したる書なきに依らざるなきか。敢て大方に本書を薦む。

第三編

評註 西洋幽靈の話

現代に於ける讀書社會の人氣者モーパサンの小說を初學にも讀まれる樣の譯文と詳註を加へ、每頁別に殆ど一語を漏さゞる字引を附せるもの。文章平易事實怪異何人にも面白く讀まるべし。

發行所 東京市麴町區富士見町六ノ十 英語研究社



紀元二五六八年　（明治四十一年十月一日發行）　西暦1908

虚榮心

美しい衣服を着たい、立派な家に住みたい、流行の持物を持ちたい、芝居へ行きたい、音樂會へ行きたい、是等は皆女子通有の虚榮なることは言ふまでもない、併し是等は外面を飾らうと言ふ虚榮であるが、内部の虚榮、即ち精神を飾らうとする虚榮があります。同情して貰いたい、愛して貰いたい、良妻賢母と言はれたい、閨秀と言はれたい、何でも自分の言行を褒めて貰ひたい、是等は皆精神上の虚榮です、近頃は女子の自覺に伴ふて、女子の人格を認めて貰ひたい、女子の理性を認めて貰ひたいと云ふ一種の虚榮者が現れて來た。前者の虚榮は罪が淺い、後者のは罪が深い、前のやうな外見ばかり飾らうとする虚榮者は、追々世人も對手にしなくなるでせうが、精神を飾らうとする虚榮者は甚だ世人を欺き易い、彼等は紅涙潸々として能く泣く、彼等の筆は甚だ文學的で、人を引き入れるやうな感情の強さを上手に現はして、然も煩悶して居るらしく語ることが巧みで、場合に依りては自殺もすれば、駈落もする。けれど眞の意志、眞の感情は然うでない、只精神を然う見せたいと云ふ一種の虚榮が爲せる業で、時代に後れないやうな顔をして居ても、多くの若き女子は皆此の虚榮の摸倣者たるに過ぎないのです。

十月（大）
日曜　四日　十一日　十八日　廿五日
新嘗祭　十七日

良犬

瀬沼夏葉

もう可也の年輩の陸軍中尉ドボフと、志願兵クプナスとは、先きから差向ひて、もう大分杯の數も重なつた樣子。

「良い犬だ……」と、ドボフは自分のミルカと云ふ自慢の犬を、クプナスに見せながら云ふ。

「非常に良い犬だ、君。奈何だ此の鼻面の鹽梅は。良く注意して見て吳れ給へ、此の鼻面を、是れ丈ても大した價値だぞ、全く素敵の代物さ、愛犬家に出會したなら、さうさ、默つてもう二百圓、君は信ぜんのか？犬の方はさつぱり解らんと見ゑるな……」

「何解らんものか然し……」

「いや、其れに此奴はセツテル、犬の種類の名だよ、純粹の英國種のセツテル。驚いたらう、奈何だ、此の姿勢と云ふたら、面して其感覺と來たら……鼻の利くこと丶來たら、驚いたものさ！此のミルカが未だ是れ計りの小犬の時分だつた、我輩は、君、是を幾何で買つたと思ふか？百圓だよ！豪氣な奴ぢやないか！こらミルカ！此奴め！此方へ來い！うむ奈何した貴樣は！」

ドボフはミルカを自分の膝に呼寄せ、寵愛措く能はざるもの丶如く、顏を摺り着けて、犬の額を接吻する、兩眼には淚を泛べてゐる。

「誰にも貴樣は遣らんぞ……なあ、これ……うむ此奴め……貴樣は恩を知つとるか、うむミルカ？主人の恩を知とるか？……よし〵〵、ぢや其方へ行け！」と彼は俄に叫ぶ。

「奴、汚ない足て正服の膝の上にまても上り込む。仕樣のない奴だ！クプナス、奈何だ實際はな、百五十圓も出したのさ、這麼小犬に！然し其丈の價値は有る、確かに有る、だが奈何も我輩には殘念ながら獵を遣る暇のないのだて！て、せつかくの犬も、仕事がなけりや詰り君、惡くなる計りだらう、自分の天職を所謂士

中に埋めて居ると云つたやうな譯てな……だから我輩は思ひ切つて賣うと云ふのだ、買ひ給へ、クプナス！後になつたら乾度僕に禮を云ふよ！然し君、錢が無いと云ふのなら、よし、さうだ、半金に負けて置け……五十圓だ、思切つたものだ！ぢや、其れて引取り給へ、全然强奪つて行くやうなものさ！」

「いや君、そのミルカが君、若し牡犬てゝもあればだ、或は僕買つたかも知れんが、然し……」

「何々、ミルカが牡犬てないと」と中尉は躍氣となつて「そいつは君、怪しからんぞ、ミルカが牡犬てないと—ハヽヽ、こりや君は話にならんなあ、牝犬か！ハ……、困却つた盲目だ、牡犬と牝犬の見分が附かんのかなあ！」

「馬鹿を云へ、小供ぢやあるまいし、何て我輩に見分られんことがある、無論、牝犬さ」と、クプナスはキッパリと腹立聲。

「此奴は面白い、其れぢや君は我輩をも婦人だと云ふだらう、クプナス！貴様其れても工學校を卒業したのか！まあ、よく目を開いて見給へ實際牡犬だ、誰が見たつて牡犬だ、奈何して此が牝犬だなんぞと君は……ハ……」

「人をこけにするにもなあ君、可加減にして置け！」

「何だと、入らなけりや入らないて可い……强ひて勸めはせんぞ……君に會得さすることは到底難いのだ！今這麽事を云つてる中にも、君は又何を云ひ出さんとも限らん、此の犬のこりや尻尾ぢやない、足だなんぞと云ひ出すかも知れん……止さう止さう……だから君の爲を思つて謀つた意なのだ！おい、ワクラメエフ（從卒の名）コンヤク（酒）を持つて來い！」

從卒は猶一壜のコンヤク、をテーブルの上に出す、二人は各己が杯に注いて物をも云はず、默したまゝ、物の三十分も考へ込んてゐる。

縱んば是が牝犬であつたとしても……」とドボフ中尉は少し萎げ氣味て口を切る「却つて君の爲にや幸ぢやらう、可いか、子を生むぞ、而して其の生れた子を皆二十五圓づゝだ……誰ても喜んて買ふ……何て

又君は牝犬を氣に入らんのだ！我輩に云はせれば牡犬よりも牝犬の方が百倍も可いぞ、其上牝犬はよく恩を知り、よく馴れる、さうさ……だが君がさう牝犬には氣が乘らんと云ふのなら、よし、恁うしやう、二十五圓！其れて負けて置かう……」

「イヤ君、僕は一錢でも御免を蒙らう、第一犬は入らんのだから、又第二には錢が無いのだし！」

「那樣らさうと早く何故云はんのか、えゝミルカ、其方へ行け！」

從卒はオムレツを出した。二人は猶且默したまゝ食べ初める、旋て鍋は空になつて了ふ。

「だが君は正直な人間だよ全く賴母しい……」

中尉は唇を拭きながら。「て、僕はね、君を是れて唯歸して了ふのを殘念に思ふ、所で奈何だらう君、斯う爲やうぢやないか、ミルカを君に進上しやう！」

「だが君、持つて行き場所がないのだ」クプナスは云ふ「我輩の處で犬の世話など遣手がないのだ。」

「ぢや要らなけりや、要らないて……勝手にするさ！厭なら何も初めから……いや、何處へ君、まあ、もつと話して行け！」

クプナスは伸を爲ながら立上る、帽子を取つて、

「いやもう歸らなけりやならん、失敬！」と彼は欠を爲ながら云ふた。

「ぢや待て、送らう」

ドポフと、クプナスとは、外套を着て街に出る、初の中は互に默してゐたが、

「時に君、此の犬を誰か遣るやうな人を知らんか？」とドポフ中尉は云ひ出した。「君は其う云ふ懇意な人を知らんか、犬は君が見た通りな素敵な奴て種が又良いのだ！然し……我輩には今要らんのだから！」

「無いなあ、別に其う云ふ懇意の人は……」

二人はクプナスの宿まで來る中、もう一言も云はなかつた、クプナスは別れんとして中尉と握手し、扉を開けやうとする時、ドポフ中尉は咳拂して、何やら臆する樣子て言出した。

「君は知つてゐるか、此處の其の皮剝人を、彼奴、犬

を引取るだらうか？」

「引取るだらうさ……よくは知らんが。」

「ぢや明日ワクラメエフに連れさして寄越さう、何にもう奈何なつても搆はん、皮でも剥がして遣れ……やくざ犬！厭で厭で堪らん！座敷は汚す、昨日なんぞも臺所でもつて、肉を皆喰つて了ふ、始末にならんのだ、惡い畜生とも何とも、其れて種ても良いのならだが、何だか解の分らん、吃度番犬と豚の雑種位なもんだらう……いやお休み……失敬！」

「失敬！」

クプナスは云つて、戸はパタリと締る。中尉は唯一人外に殘つた。（チエホフ）

鹿

横瀬夜雨

吉野から歸つた愛子さんがこれは奈良のお土産てすよと三匹の鹿を贈られた、無論春日野の若草に寝てゐた本ものてはない、一つは銅て鋳たのて角の尖へは筆も置ける、加之背には紐附をメた兒まて危なかしく乗つてる、鹿は腹這になつて三本しか足の見えぬのはまだいゝ、水を入れて机の端に飾つておけるから。あとの二つは大きさも一寸程て首は拔き差しができるのだが、不思議なことには尻から長方形の小箱が出てゐて、それを又尾て提げてあることだ、もつとも中が穴になつてるから二匹の尾と尾を突き合して棒を亘して筆懸けになるのてもあらうかと思うた。

長家にお市お高といふ揃うて六になる女兒と、お市の下には次公といふ腕白もあるから、壞れかゝつた中庭の塀を潜つたり雪見燈籠の笠へ上つたり、酸漿の青いのを捥るのはまだしもとして菊だらうがコスモスだらうが三人の手の届く花は皆蕾を占めてしまう、時々は椽側から這ひ上つて坐敷てかくれんぼをもやる、十年以來子供といふものが無くて寂しいせいもあるが母などはさう叱りもせぬから善い氣になつて騒ぐ、手に終へぬ代可愛いこともある、「旦那ちやん」に次いての

怖い人として「奥の兄ちやん」を認めては居るが、愛子に貰うた鹿はやがてのことに見つかつた。

まづ机の周圍へ目白押に列んでおちやんとして、小さな指を出しくらして、ひとりがこれは兎といふとひとりが兎の耳にはこんな刺が生へてないようといふ、目がおつかないといふ、尻尾が長いといふ、とう〳〵兎にして乘つてるのは次郎見たいな赤ん坊だと定てしまう塀の外ではつく〳〵法師が鳴いてる、雲無き秋の午であつた。

初めは奥の兄ちやんなる自分を怖れて手を出さなかつたが、堪へられなくなつてお市が先いぢくり初めた、舍弟何てう猶豫すべきおねのだおねのだと姉のを引つたくつて。

お高は小さな方を取つたが、どうかする機にほろりと首が脫けたのでびつくりして着つけて見て嵌つたので安心したらしい、しげしげと尻の穴を見てゐたが、いきなり口へくはへる、とぴぴと鳴り出した。驚いた。

蚊火家が下のかはづすら
頬より聲を出せばや

尾筒に金の笛懸けて
鹿は尻にて妻を喚ぶか

大和少女は秋闌けて
髮のかざり所匂ふらむ

せんみ留れる蟬燈籠の
鎖に吊よ命の火

けら穴に鳴く夜すがらを
燈籠の火の草に射さば

角を遁れしやさし女も
変りて鹿は集らむ

自分が奈良に遊んだ時は雨が降つてゐて、猿澤の池に映る柳の枝も煙のよう、森閑として人無き春日の森はまだ鹿の跳ねまはるに任せて、杉の木立の奥には踐まれ殘りの草の花が咲いてゐた。

そのころ、鹿を呉れた愛子さんは女學校に通うてゐたのだ。大和は人の美しき國てある。

五夜譚

水野葉舟

一　謎の様な話

昔々、三人の女が一時に花に化れてしまつて、野に咲いて居た。處が、其中の一人だけは、夜だけ家に歸る事を許された。

そこて、其女が、或る夜、もう日の出る時が近くなつて來て、また野に歸つて、他の女たちと一所に、花に化らなければならない時が來たので、自分の夫に斯う言つた。

「朝になつたらね、私の咲いて居る處に來て、私が化つてる花を折つて頂戴な。さうすれば、私はまたもとの身體に返れるのだし、さうしてあなたとも始終一所に居られるわ」――そこて斯う言ふ事が起つた。

一體如何して、其夫が妻の化つて居る花を見付け出さうかと言ふ事が、第一に起る疑問だつた。

野に出て見ると、三人の女の化つた花が、ちやんと三本咲いて居るが、どの花も、皆同じ様て、どれが自分の妻だか見別けが付かない。其てはたと當惑してしまつた。……だが如何かして、もとの人間に返してやり度い。そしたらば、自分も妻と一所に住へるのだと思つて、種々と考へたが、……ふと思ひついた。

この三人の中、自分の妻だけは、前の夜中家に歸つて來て、自分と一所に居たから、他の女達の化つて居る花には、露が置いて居るが、自分の妻のだけは、其が無い筈だ……と思つて、其てやつと、自分の妻が化つて居る花が見つかつた。

其花には露が置いて居なかつた。

二　薔薇の花

或る處に極く貧乏な女が居た。子供が二人あつたが、末の方のが毎日森に、枯枝を拾ひに行つて居た。成る日、枯枝を拾ひながら、どん／＼森の奧の方に行くと、道に迷つてしまつた。如何したらいゝかと思つて、ぼんやりと樹の梢を見て居ると、ふと自分の側に一人の少さいが、丈夫て、强さうな子供が來て立つて居た。そして、その子に手傳つて、どん／＼枯枝を拾ひ集めて、束にして、それを脊にしよつて、家まで送つて來てくれた。

末の子は、其を不思議がつて、お母さんに、今日あつた事をすつかり話したが、お母さんはそれを信じなかつた。

それから、來る日も來る日も、同じ樣な事を言つて居たが、その中に遂々、一本の薔薇の枝を持つて歸つて來て、お母さんに斯う言つた。

「この薔薇はその美しい子がくれたのだが、これをくれる時に、其子が、この枝に薔薇の花が一ぱい咲いたら、又來てお前に逢はうと言つた。……」とそれておつ母さんはその薔薇の枝を水につけて置いた。その中に、或る朝、末の子が何時までも起きない、如何したのかと、おつ母さんが臥床に行つて見ると、子供は死んて居た。だが、其死顏は如何にも、晴々して幸福らしい心持を表して居た。そして、氣が付くと、その薔薇は、その朝、それは見事に、花が枝一ぱいに咲いて居た。

三　老寡婦

或る大きな町に、一人の年とつた寡婦が住んて居た。このお婆さんは毎日、夕方になると心細さうに、自分の室の中て、その年になるまでに、一人一人と死に別れた身うちのものを思つて、一人ぼつねんと考へ込んて居る。先づ自分の夫、二人の子、それから多くの親類の人々に先立たれて、今は全く、この世界中にたつ

た一人になつてしまつた。
この樣な事を考へ出しては、お婆さんは心細くつて始終泣き暮らして居た。とりわけ二人の子の死んだ事が、其心を惱して居た。その爲めには何の位泣いたか。
！……
今日も又、夕暮の時を靜かにして座つて居た。まるて失神てもした樣にぼんやりして居ると、ふと、其耳に會堂で、朝の祈禱の鐘が鳴るのが聞えた。それでお婆さんは、くよ／＼と種々な事を考へて居る中に、もう朝になつたかと思つて、驚いて提燈に火をつけて、せつせと會堂に出懸けて行つた。
會堂に行つて見ると、もう人が一ぱい來て居た。だが、平常とは違つて、小さな蠟燭が一本立つて居るつきりで、……しかし、其光が會堂の中を行きわたつて、薄く照らして居る。人が一ぱいで、何處と言つて空た席も無い程だつた。お婆さんは、自分の座りつけの席に行つて見たが、其處も、もう誰れかが來て座つて居た。
そこで、お婆さんは四邊を見廻はした。すると、そこらに坐つて居るのは、昔死んだ自分の親類達だ。皆、昔の儘の着物を着て坐つて居たが、誰れも、青い顔をして居る。
この人達は、決して話しもしなければ、歌ひもしない。だが、靜かな沈んだ調子で、私語く聲や、ひそひそする樣子が、會堂の中一ぱいに聞える。其處に、不意とお婆さんの叔母さんに當る人がやつて來て、斯う言つた。
「聖壇の方を御覽。お前さんの二人の子が見えるだらう？……」と言ふから、お婆さんもその方を見ると、一人の子は絞架に首を絞られてさがつて居るし、一人は車の上に身體が裂けて載せられて居る。
「まあ御覽、お前は大層あの二人の死んだ事を悲しがつておいでだが、あれはね、神樣が二人を無邪氣な罪の無い子供の中に、お召しにならずに、大きくなるまで生かして置いて下さつた代りだよ。……あの姿は！」とその叔母さんが言つた。

それてお婆さんは慄えながら歸つて來たが、膝まづいて、神樣におわびをした。自分が思つて居たのとは、神樣のお心がまるて違つて居たのを深く思つた。

それから三日たつと、お婆さんは、自分の臥床に横はつたまゝ死んて居た。

四　冷めたい手

（フランスの有名な外科醫、ヂローム、カルダン氏の著した「珍談集」の中に次の樣な話がある。ジエローム氏もたつた一度だが、遠方に居る友人が死んだ時に、何か奇怪な物音を聞いて、恐ろしさの餘りに、終日室の中に閉ぢこもつて居た事があるさうだ。）

自分の父がよく斯う言ふ話をして居た。父の話に、——

私はジョン、レスタ家て養育されたが、その中に、そこの子息三人にラチン語を敎へる事になつて居た。後に、それも止めて、一軒家を持つ事になつた。或る日の事、私は家に居て、醫學の書を讀んて居ると、そ

こへ、ジョン家から、子息の一人（その時にはもう立派な靑年だつた。）が急病て、面白くない容躰だと言ふ知らせが來た。それて、私は醫者の方の智識もある事だし、その上舊友だと言ふ點から看病をしに行つた。

その時、子息達の父になる人は不在てあつた。病人は二階に寢て居るし、私と一人の息子とは（も一人の子息は父と一所に不在だつた。）下の室に寢る事になつた。室は皆その頃市中至る處にあつた、塔に隣つて居る。

私が行つた其晩に、寢床に入つて居ると、絕えず四邊の壁をゴト〳〵と叩く音がする。

「あれは何てす？」と、わきに寢て居る子息に聞くと、

「あれてすか、あれは、例の化物てすよ。ちつとも恐ろしい事はありませんよ。あの事を皆て惡戲者と言つて居るのてす。何にも害をする事はありませんがね、時々、あんな風て煩くつて仕樣が無いだけてす。」と答へた。若い人はそれて寢てしまつたが、私は驚きながら、それを觀察して居た。

凡そ一時間半許り音も無く、四邊が靜だと思つて居ると、私は何か斯う親指で頭を押される樣に感じた。そして、それが非常に冷たい、私は油斷なく氣を配つて居た。と、親指から、人さし指、仲指、無名指と、だん／＼下つて來て、小指が殆んど額に達かうとした。形から察すると、十歳位の小供の手らしい。非常に冷たい手で、何とも言ひ樣の無い程心持がわるい。

其間、私はこの幽靈に出逢つたのを内心おかしく思ひながら、ぢつと耳を澄まして居た。すると、其不思議な手は、無名指で私の顔を上から下へ撫でおろして、口の所まで持つて來たと思ふと、その二節が口の中に入つた。その心持の惡るさ。私はひどく惡感を覺えたので、左の手で其指を引き出した。……世間はまた寂然として居る。微かな音も無い。

私はこの怪異な現象を半信半疑で、寢らずに居ると、殆ど一時間半許り經つてから、又、其手がやつて來た。

極くそつと觸るんだが、然し非常に冷めたい。やつて來ると、前と同じ樣な事を始める。口の處に達いた時に、除けてやつた。私は口を一文字に結んで居たが、齒にしみ渡る樣な冷さを感じた。私は二階の病人が死んだんぢやあるまいか、それでこの幽靈が出て來たのだらうと思つたので、床を出て、入口の方に行くと、その入口の戸に音をたてゝ、何物か私の前を通り過ぎた。私が戸の處まで行くと、戸の外側を叩く。それで戸を開けると、外の塔を叩き始める。その時には丁度月が照つて居たから、私は一つ正體を見極めてやらうと思つて、塔の處へ行つた。すると、塔の他の側を打つて居る。何でも私をさける樣にして居るらしい。

私は病人の樣子が氣懸りだから、行つて見ると、まだ死んでは居なかつたが、もう非常に弱つて居た。それて、枕元に居る人達と話をして居ると、丁度家が倒れる樣な音がした。すると、そこへ私と枕を並べて居た病人の兄弟が、恐れて半分死んだ樣な、色青ざめて、室の中に飛び込んで來た。そして斯う言つた。

「あなたが起きた時に、私は冷めたい手が脊に觸つた樣に覺えたが、それはきつと、あなたが私を起して、

病人の容態ても見に行く積りだらうと思つたのです。それて私はあなたが、私の熟睡して居るのを見て、一人て行らつしやるだらうと思つて、ぢつとして居ました。しかし、あなたが起き上つた氣色も無い。そして手の冷たさは益々加はつて來る。もうこらへきれなくなつたので、そのあなたの手を私は拂ひ退けた。その時に氣が付いて見ると、あなたの床は藻脱けの殼でしよう。まだ溫かつたが、私は例の幽靈の事を思ひ出したから、夢中になつて、二階に馳け上つて來たのです。こんなに恐はかつた事は無い。……」と

「それて、病兒は翌晩死んだ」。

これて老カルダン氏の話は終つた。

五　嚙む幽靈

千八百六十四年九月三日發行の「ノーツ、エンド、クェリース」(珍聞奇談を載せる雜誌)。に次の樣な話が載つて居る。そしてそれは最も信賴の出來る婦人の話したのを、其儘寫したのだと言つて居る。

或る家族の中て、七人の子供の一人である、エムマ、S——と言ふ娘が、……スタッフォートシェヤー州の沼地に建てられた、C——附近の大きな家て、顏を西方に向けて、只一人て眠つて居た。

次の朝は早く起してくれと、下女に言ひ付けて置いたので、朝三時から四時の間に、戸を烈しく叩いて起されたが、驚きはしなかつた。其時、エムマは初めと二度目との戸を叩く音を聞いて、

「有難う、聞えたよ」。

と答へたが、其にも拘らず三度目にまだ戸を叩く。それと共に風がさつと吹いて來て、寢臺の眞中の處の窓掛が開いた。エムマは驚いて起き上ると、

「マリー、お前は何をしたい。」

と叫んだ。そしてよく見ると、それは下女ては無い。叔母さんだ。叔母さんが窓掛の間から覗いて居るのが見えた。

これを見て、非常に驚いたが、それと同時に、一體無意識てエムマの方から腕を投げ出したのか、或は腕が

丁度旋風に捲き込まれる樣に、引張りよせられたのか、判らないが、エムマは指を一本、幽靈の齒てしつかりと嚙まれた。尤も何の跡もつかなかつたが)。それても驚かずに平氣て居た。そして直に起き上つて、衣服を着、誰も居ない下の室に降りて行た。

間もなく父も降りて來た。そして娘にその朝早起きしたわけから、其話しを聞いて笑つた。

しかし、變だと思つて義妹の家を訪ねて見た。處が不思議にも義妹は死んて居た。それてすぐ家に歸つて來ると、妻にこの話をした。一所に聞いて居た娘のエムマは驚いて悶絕して倒れた。……その指の一本に臨終の時の苦しさて嚙まれた樣な跡が殘つて居た。

生と死

服部嘉香

幼き喜び

「われに名もなし、
老といふそはたゞ二日」
——何とか呼ばん汝が名は——
「われ幸足りぬ、
喜びぞわが名ならめ」
——汝にぞ來れ美しよろこび
いとしよろこび
美しよろこび、たゞ二日、
「うまし喜び」——汝を呼ばん
汝こそ笑め
われ守り唄を歌ふ間に
汝にぞ來れ美しよろこび。（ウヰリアム、ブレーク）

黄金の鍵

黄金づくりの
死の扉
人間の眼は
えてそ見ね。
蒼きつめたき
唇つぐみ
肉の眼を閉づる時、
靈ぞ眼ひらき
いぶかしきものとてそ見め
淸き手に
いつしか持てる
黄金の鍵を　（ウヰリアム、ブレーク）

sheer joy of playing together. The children would sing and tell stories and during the day when it was cool, we used to take a walk in the country.

A: Did every child go out with you?

K: You could never leave any one of them. Even the youngest baby had to go with us on the back of the maid. They are so bright and lively and yet very obedient and sympathetic.

A: Their mother must be a wonderful woman to bring them up so well.

K: Certainly she is.

A: She need not be envious of Cornelia. It is her glory to have such loving children.

K: I forgot who Cornelia was.

A: Don't you remember the story I told you about two Gracchi, the famous Roman heroes?

K: Yes I remember now. And their mother was Cornelia who showed them to her rich neighbor as her only precious jewels.

A: "The Famous Stories" tells it very sweetly. Send a copy to the Osekos.

のが面白くて，哄笑破れる様て御座います。
子供連は又歌をうたひ，噺をしたり，晝間は涼いと郊外運動なのです。

叔：皆さん御前と一所に御でかけかい？

清：到底一人丈でも家へ置て行く事は出來ません．赤坊まて女中に負ぶさつて伴てきますの。皆活潑な元氣なお子供様ですが又大相溫和て親切てす。

叔：母御は必らず感心な御方に相違ない，彼麼によく御子方を御育てなら。

清：眞個に然うて御座います。

叔：決してコルチリヤを御羨みなさるに及ばない。其麼な善良の子供達は親の榮譽だね。

清：コルチリヤて誰てしたか失念しました。

叔：其，私が先に，有名な羅馬の雄士グラカイ兄弟の噺をしたが，記憶して居ないかい？

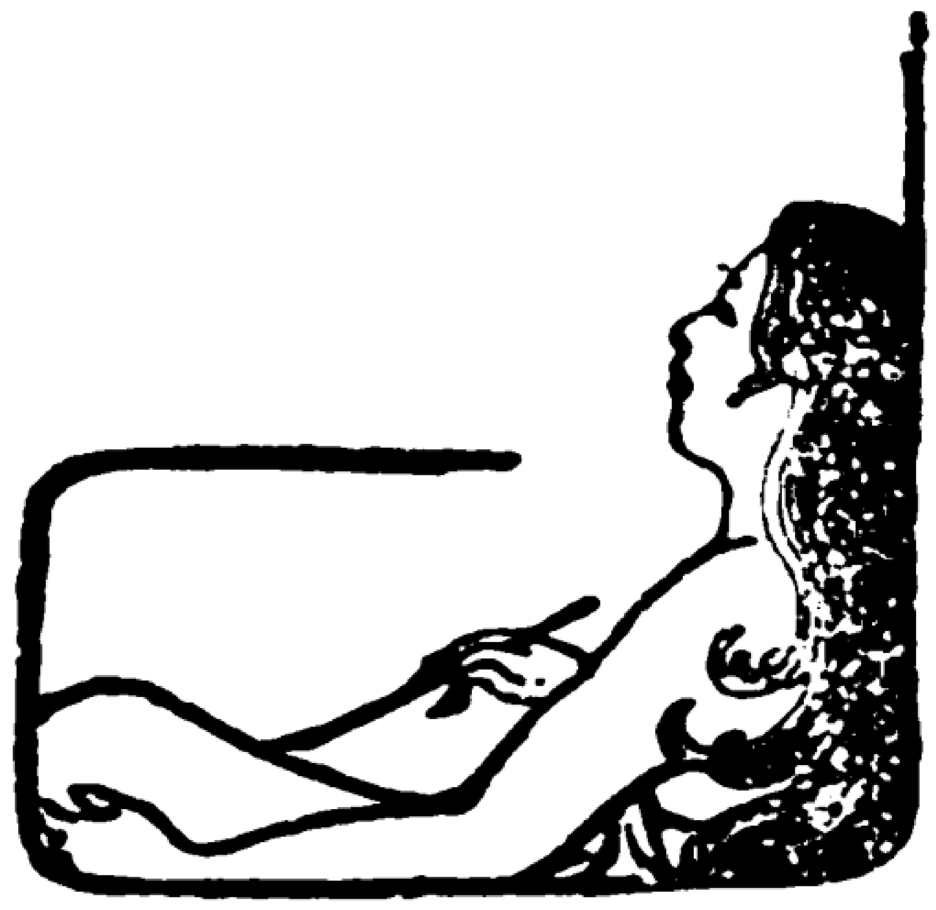
清：然う々々，思出しました．其母がコルチリヤで自分の隣の婦人に，此が私の唯一の寳だとて，二人の子を見せたと，云ふ物語てした。

叔：「有名なる物語」によく其事が書てあるから，一冊大世古さんへ送るがよからう。

英　文

（第四年第十回）

女子英學塾講師 河井道子



A Happy Family. (No. II.)

K : Did you know that the children have an entirely separate house of their own?

A : Their play-room, is it?

K : No, it is a lovely house with several rooms and a garden attached to it. It stands at the back of the main house so that the children can play or study without disturbing the rest of the family.

A : In every family, it is quite necessary to have at least on eroom given entirely to its children. Otherwise, they seatter books, toys in every room of the house and there is no peace and rest to their parents.

K : The Osekos are very careful in training the little ones. Just think, the parents would join them in games every evening, and we laughed, roared, and shouted from

樂しき家庭（其二）

清：彼の家では子供達の爲として，全く別に一軒建てゐるのを御存知？

叔：遊戯室だらうね？

清：否，幾間もある綺麗な家て，御庭も御座います．母屋の裏に建て居ますから，子供方が，家内中を騒がせずに，勝手に遊びも，勉強も出來ますのてす。

叔：何の家ても子供の爲とて，少くとも一間位はなくては困るね．さもないと，家中何の部屋へても本や玩具を散らかして，親に少しも靜に緩りさせないからね。

清：大世古さんては，子供をよく御育てになります。マー面白いてはありませんか，晩には御兩親とも御子供がたと一所になつて遊びなさるのてすよ．其てすから一所にと云ふ


故鈴木野火君

新しき涙

鈴木野火を悼む

本社創業以來、私と机を並べて本誌の編輯に從事して居た鈴木孝平君（野火）は九月十一日の夜、病を以て夢のやうに逝くなりました。

大抵の人は死ぬと褒められます、私は爾云ふ意味で鈴木君を褒めたくありません、生きてゐる間にでも君は決して人に非難せられるやうな人物てはなかつたのです、惜しい生命を一つ失ひました。

君の生國は遠江でした、僅に二十七年の一生ですもの天下に傳へるやうな經歷の無いのは勿論のことです、而し君が天壽を永うして是から社會の表面に立つたなら、立派な傳記が出來上つたらうと信じます。

只何の苦勞もなしにぬく／＼と成長した人とは違つて、君は人生の暗い蔭を歩いて來ました、ですから、萬事が控へ目で、遠慮勝て、普通の人間なら拗戻る處を、君の根本の性質が良かつたので、言行に表裏なく、何處までも眞面目と實直で貫徹ました全く現世の若い人に似合はぬ苦勞人でした。

而かも君は平凡なる善人ではなかつたのです、燃ゆるやうな感情を抱いて居ました、君の詩は能くそれを語つて居ます、未だ世間には多く發表しませんけれど、作ると屹度一纏めにして、私に不可ところを示してくれと言ふのが常てした。多く口語詩て海の潮の或は銀色に輝き、或は火の色に燃ゆるやうな詩てした。後から後からと作つて見せました詩が私の手許に隨分在ります、早く死ぬ人だけに出來るだけ預けて行たかと思ふと愍然で堪りません。

何うかすると君の顔が見え、君の聲が聞える、あゝもう君は此世に無いと思ふと、何だか世の中が嘘のやうて自分までつまらなくなつて了ひます、皆生きやう生きやうと活動してゐるのに、默つて其仲間を外れて行た君は既うそれ切てせうか、君の顔君の聲、君の詩を知つてゐる人は幾人あるてせう、君去つても空に光あり、地に輝きあり、悲しいものは人間ばかりてせうか。

社主野口氏、及び社員一同を代表して謹んて痛惜の意を表します。

河井　醉茗

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

濟世の為初版壹萬部限り無代進呈す送料封入至急申込あれ

二大療法

壹部三拾錢
送料貳錢

神經病 神經衰弱脳脊髓心臓胃腸生殖器各部の神經衰弱ヒステリー血の道ヒポコンデリー

胃腸病 急性慢性胃加答兒アトニー胃潰瘍 胃痛消化不良胃痛腸加答兒(下痢)

肺病 肺結核肋膜炎肺尖加答兒等……

我社は救世の大事業として各病専門博士の指導により完成せる三大療法なり各患者は一讀再生全快の幸福を得よ本書は治療攝生法の外殊に各博士の臨床實驗せる治療藥を詳説せり

東京京橋越前堀 醫藥新報社出版部

男女 ちゞれ くせ毛 赤毛

は何程の難毛も直に根治黒變し良き艶の出る奇術を郵券封入申込の方に無料教授して美髪にして差上げます

東京 麻布區材木町 岩阪

脱毛術發見

男女**毛深**き人僅か十分間に害なく毛を抜き亦發毛を止める秘法あり貳錢郵券送れ呈す

東京市小石川柳町 東洋堂藥院

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀 河村愛子



◎婦人事務員募集

年齢十七才以上廿五才以下學力はなくとも相當文字を書き得る者給料は八圓乃至拾貳圓可成當社にて止宿なす人を望む但し貳ヶ年以上勤務なす人を望む

右希望の人は自筆の履歴書送付あれ

東京市京橋區南鍛冶町 明治廣告社

女子文壇始め全國諸新聞廣告取扱業



美文

編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採錄す、二十四字三十行以內、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は每月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

天　○誇

四谷區傳馬町二丁目　河野槇子

斜めに射す光線に、紅さしたやうな爪の色まで美しう透いて見える澄みきつたお湯は、ひた〳〵と波紋を描く。緑葉の香りをのせてくるそよ風に。

あゝ其の清らかな中にしづかにあたたまつてゐる私の胸の中には、暗い冷たい影がひそんでゐて、ともすれば夕ぐれひとりて枯野の末をゆくやうな思ひが致します。

ふと瞳をあげると大空は一塵のさへぎるものなく、只萬里の碧瑠璃をみるばかり。せまき都に生れて、み空の長閑にひろきを慕ひ、雲晴れよと願ひしはきのふでございました。胸に憂ひの雲とざす今は赫々たる白き光に云ひしらぬ恐怖を覺えます。

世を人をかすかながらも知り初めた私は、もうとこしなへに明い國から追はれたのでございませう。昨夜も彼方目には魂の故里を望みながらも、身は暗き谷の底へ底へと落ちて行く夢をみました、どんなに悲しうございましたか。

み空の碧りはだん〳〵濃くなります。血潮の湧く音は高く〳〵胸にあてた双手につたはります。あゝ今日も暮れてゆく——刻一刻故里をはなれゆきて、やがてこの寂しい旅の終る時は？ふと心の奥でさゝやきました。

あゝ其のときは？………苦しき人生の旅に疲れはてゝ、倦み果てゝ、解けば丈なすみどりの髮も白くなり、あたたかい血も涙も涸れはてたあゝ其のときよ、私を迎へてくれるのはたゞ冷たい墓ばかり、きつとさうでございませうよ。さてそこで肉は滅びてしまふけれどあゝ痛められた哀れな魂は？……學校の先生は仰有いました、死は永久に眠るのだと、また人生と云ふ永い夢からさめるのだとは何かの本でよみました。さて我魂は？——重い肉をはなれて活動するのでせうか、いえ〳〵今此の胸の中にかうやつて大切にあたゝめてゐてさへもこんなに痛むのですもの、犯した罪に責められて安らかな眠りに入ることもできず、いつまでも朽ちにし家にこもつて故里を戀ふては泣いてゐるのでせう。おゝ思つてもぞつとします。

「おあかりつけませうか」突然下女のこゑ。はつと未來からうつゝによびさまされました。少女にかへつた私は動悸のたかくひゞく胸を抱いたまゝつと立ちました。暖い狹霧の中に。染まつた丸い肩にばらりとかゝつた毛はぬれてうるしのやう。みまはせば身は暗に包まれて、わづか一方光りのはいる戶口から空をみるばかり、いつのまにやら星がひとつ若いすゞしい其の光りが瞳に射したあゝ其のたまゆら！私は云ひしらぬ「誇り」を覺えましたそゞろ「徂くな我春」と祈らるゝのでございました。

自分はまだ此の如く、深い意味を以て處女の純潔を誇り得たものを見ない、運命の星は此少女の魂を何處に導くであらう、不安、恐怖、暗黑、光明、あゝ女子の夢も昔のやうに安らかではない（評）

地　○信濃

名古屋　入重子

針を持つと乾度思ひ出す。懷しい信濃の國は善い所に違ひない、何故つて、汗の香、塵の色の漲るこんな眞晝でも、あの深山の湖には周圍の青葉や綠葉に、絕えず風が白々とあたつて搖れて居る。其下にある苔も下駄に踏まれるでもなし、延びて這うて、土の香さへすが〳〵しい。木が茂つて枝が込んでぐるりと圍んだ、眞中の水はあをくて魚すらはねぬ。森を騷がす鳥もなし。さくから熟つと落ち付いて、氣が平かになつて、其の靜寂な自然に包まれた樣になる。日が傾いて木の隙から斜に日光が頰に當る頃は廣い野に行つて見たい。

夏草が茫々と生へて居る。歩々の間、小さな乳色の花が怠るさうに咲いて居る。こんな夕方には飛彈から歸りの旅僧が石の上に、どつかと腰かけて泥にまみれた脚袢を脫いで淸水に足を洗うて居る事もあらう。何處かの寺の鐘が響いて來ると驚いて立ち上り、またトボ〳〵と歩み出す。夕陽は彼が雨と日に晒した笠に晃めいて野山に一瞥を吳れて沈んで仕舞ふ。

また夜がよい。廣い庭の一隅にある離れ小坐敷をガラリと開け放して椽側に出て、秋草の畫いた絹團扇を、靜に使つて居ると、冷やかな夜風が吹いて團扇の風を消して仕舞ふ。

裏門から外に出ると、一人の青年が踞んで居る。水銀のやうな細流の水で棒切を洗うて居る、笛らしい。草の香がおそふて來る。水の音が亂れてする。靜な夜!!

こんな思いは每日のやうに起る。繪を見たのでもなく、行つた事は無論無い。が、幻は始終見る。オゝ懷かしの信濃よ！、私は何時此の信濃を見る事が出來るであらうか!?

信の地、山に富み、水に富み、人に富み、而して詩にも富む、中京の一少女が針持つ白日の夢にも其愛の國に呼ぶのはもつともである、

之を此處に言ひ表して人を感動せしめる少女の力も賞むべきものだ（評）

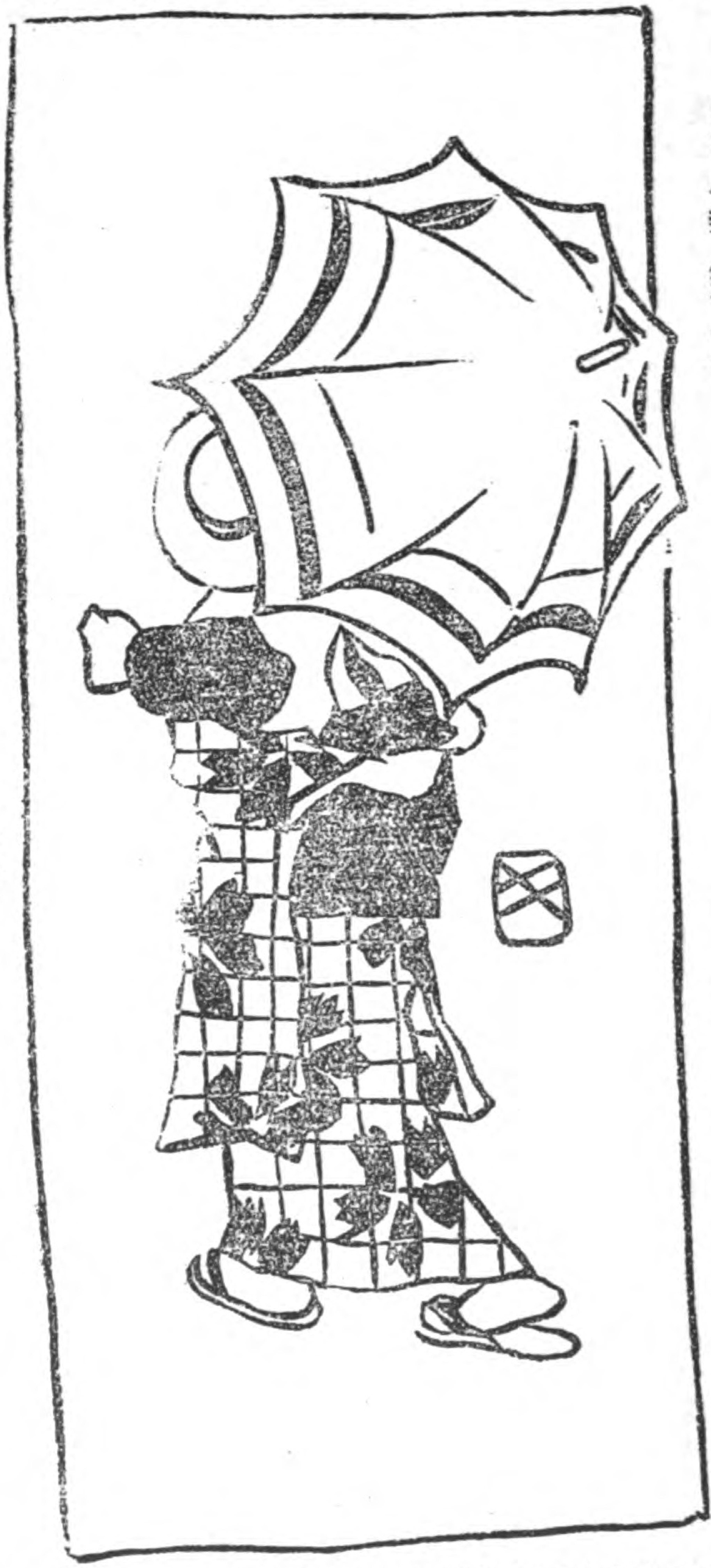
人　○願ひ言

はづかし子

の命にかけてもと、いのる心願も十九日め、考へて見れば、行末心細い私の運命です。四月程前の三月上旬、私には片親の、母樣の御言葉のまゝに、今は戀しい夫を迎へて、思へばあの夜あの時うつゝに取りかはした、さかづきも、苦しい苦しい人世とやらに入る、第一歩であつたのでせうか？

嗚呼尊い夫、なつかしい君はまだ都に……最高の學府に、物學び給ふ御身ですもの、

夕暗にまぎれ出た私は、人聲一ツせぬ裏口から、そつと身を現して、何心なく空をあふぎました、よく晴れた、水の樣な夜の天に、織姬も彦星も、現れて居ます。今宵も寂しい裏道を二丁餘もある地藏堂へと急ぎました、こうして毎夜、生の母親にもつげないて、十七年



うしろ姿（天眞）

名古屋市押切町七丁目淺井方　きよし

愈々世間の人の口のはに、よく家付の娘は我まゝだのと聞いて居ます私は、情けない……母樣が、私には實によいのでは、ありますが、此頃時折胸をさゝれるよりつらい、思を致します、お前はあれでは、つとめ過ると、果てはいやな〳〵かげ言に迄、耳にきく私の心あゝ、忘れても一人子には生れないもの、其れにあやしいは、自分の心、只々君戀しくて、はなれがたう、此の日頃私は何とはなしに、物思ひに沈んでなりません、どうせ私は邪魔にされるんだから、と現在生の母親の、お口から聞く度毎、身に代へてもと戀る夫の、我れは養子の身と、沈み給ふを見る度、私はいつそ死にたう御座います、思ひあまつて人なき裏口へのがれ出ては胸のなやみに知らず〳〵、そこの土へ死のたのしみ、と書いては日を暮したのも幾度。鳴呼もしや〳〵、夫と呼ぶ事の叶はない時が來たら、ふるおろかとは、知りつゝ今宵も又、供花さゝげて、ふる年のふ胸に、南無地藏尊何卒母の心和げ給ひてよ、うら女が一生に一度のお願、命にかけてと、一心にいのりあげ、たき生る線香の匂のうちに、云はれぬ尊さと心強さを覺へて、

こうして毎夜私の影が見ゆるうちには、あの方はほんとにお美しいけれど、どこかにお惡い處がと、胸にあまるかげ言、聞いたのも、二度三度、けれども私はよしない人の噂を夫にさへ、御耳に入らないで首尾よく三七日の、お願が幾分なりと、せめて母樣のお胸に通へば思ひ殘す事は、ありません。

單純なることなり、おろかしき事なり、さりながら讀んて暗涙な禁ずる能はず（評）

秀逸

○憂愁

阿波　長曾我部菊子

一、歸らん北地に。

「ああ近い鳴門も見て行きたい！けれど〳〵私は矢張青白てしびれるやうな悲しい思をかきだいて、歸る歸る!!!誰にも逢はずに北海道へ。あの寒い〳〵北海道へ。どうぞゆるして下さい。」と紫色のインキのあとの取り急いだかやゝ亂見えて、書かれた愛らしの友のお手書を受取つた日は、私は去月來の失望の爲に病床に臥して、不覺の涙にくれて居つたので、あまりの嬉しさに、幾度ともなく讀んでみて、情にたえず、つと火の如く燃ゆる接吻をしながら、（淡路の志筑町といふのはどんな處？）と枕上なる祖母樣にうかゞふ。と桃をくる〳〵皮むいてゐた祖母樣は御手をおいて、（おゝ！志筑かい。汽船には撫養の港から乘る。一時間ほどて福良に渡らる。それからは陸路を七里、人力車もゆけば歩いても氣色佳い地とじや。白い砂濱の、長い松原の二がまことに美い漁夫の町といふ。何かい。○○さんはそこへ來なすつたかい！）（アー）と返事する

のでもなく嘆の思もれて私は涙充てる眸をパッと見開いて力無う天井にそそいだ。（七月二十九日）

二、黒　蝶

昨日太陽の沒りはてゝしばらくの後、魂さかるいまはのけはひとやら。静に静にさはれ底には幽かなるおそろしみ（？）をたゝへて迫るうすぐらがりの懐かしさの常にもましてしみじみと心にしむので、後園の垣根に腕もたせて、何もの思ふともなく、死人の様にがつくり垂れてゐた頸を上げて、黄昏の天の一角に瞳をこらしたのである。とスーと舞ひ來つて何者か我眼をかすめた。じつと見定めると大きい黒蝶が一、此處を十歩のへだゝりに咲ける秋海棠の、ポッチリ紅う薄暗に、うきたつ花にとまつたらしい。見つめてゐると、ひらりと、舞ひ上つたやうー。更に宿を他の美き下に、もとめやうとするのであらうか、つかれた羽ぶりにひるがへりさま、あなや、我頬に身もすれ〱にハタハタと彼方の暗きに飛び去つてしまつた。

あまりにも怪しい蝶のふるまひ!!!。ところきの胸を力きはめて双の掌におさへて、きつとした私は。何となく、不知不識、常日頃、嚴しき家庭の壓迫の下に、束縛の下に、あくまでも、血はうら若き處女の身をも、心をも、囚はれて暮す悲哀に思ひ至つたのである。うらやましきは蝶の翼!!とおもはず弱い聲をあげて涙を呑んだ。涙を呑んで垣根をはなれて、憂愁に曇る最後の一瞥を遠く東の空によせた時、星がきら〱と、輝やいてゐるのが、思ひなしにか我が靈を誘くやうー。おびかれ氣味に「死」ー「死」ーと私は呼んで見た。（八月二日夜）

文章としては一の方が好い、「黒蝶」は散文詩とでも言ふべきものであらう（評）

○花野の夢

南品川　静江

其れは何時の事であつたか知ら無い。

萠黄色の野一杯に咲いて居るけしの花の眞中に、私は靜かに眠つて居たと思ふ。身には純白な薄いものを衣て居た。無心に手を延して、側の花を摘みとり髮にさして見た。髮はサラリと長く地に流れて居る。

默つた儘に身をかへして、暖かい右の腕に頭をのせた其の時、何とは無しに眼じりからほろりと落ちた一雫は、白い腕を傳ふて若草の根に消えてしまふた。

現なく草の根がたを見守つて居ると何處からか風がさやさやと吹いて來て、脆い花瓣は一ひら一ひら散つてしまふ。純白な衣には美しい模樣が出來た。私は其胸のあたりに散つたのをとつて、なつかしい人の名を呼び乍ら心ゆく迄唇にすふた。あゝ母樣は紅けしがお好きであつた：：：：。

風が一しきり花の上を渡ると、眞紅のけしが前後にゆらゆら左右にゆら〱曲つたり起きたり、輕ろく眠むげにゆらめき果てはかすかに消えて行つてしまふ。其

の甘い香其の仝じゆらめきが、私を誘ふて極くかすかに眼を閉ぢて一眠つてしまふたのだらふ。
ふと遠い〳〵この野の果てから『ふみさあーん』と云ふ聲が聞えて來る。
言葉は無くて身を半ば起した時、亦『ふみさあーん』と呼ぶ。片時も忘れた事のない逝かれた母様の御聲？得堪へずに『はあーい』と答へして起ち上つたが、もう何も聞えなかつた。見上げた空には白いちぎれ雲が、ふはり〳〵飛ぶより他に影も見えなかつた。
あゝ其れは何時の事てあつたか？
人に云ふと夢の國に行つたのだと云ふ。屹度遠い所なのだらふけれども逍いたい行つて見たい……。
私はどうかしてもう一度あの優しい『ふみさあーん』といふ聲、花野の果てに隱れて消えた涼しい聲を聞きたいと幾年かたつた今ても、花咲く野を通るたびに、白い雲が飛んだらと青い空を仰ぐのです。

わざとらしい事が、わざとらしくないやうに感ずる、第一、考へが好いのて、又考への通りに動く筆の力だ（評）

○小さき流れ

信濃　太田喜志子

日かげはまだしめつぽい煙てもなびいて居るかのやうにぼんやりとして居る、妹の髮を結ひやつて手を洗うと此の小流にのぞんだ、手には木槿の葉を持つて居る、七月の水は七夕様月て天の川の水が流れるからどんな汚じみた物てもたゞ洗へば美しくなるッて祖母様がよく仰有つた、それては妾も髮を洗つて見やうか丁度油草もあるし！と思つてもう解かうとしたけれども急にいやになつて仕舞つた。あたりの物事があまり美しくて詩に成りさうで〳〵たまらぬのでつい心は其の方にとられて仕舞つた。うつとりとかゞむと下流の方にある水車が同じ調子に草を分けて一直線に水をさかのぼつて長く〳〵影を見せて居る。
葉の紅い花の紅く房になつて居る油草、これが髮を洗ふに適して居るとは、何とやさしい草てはないか、
何か歌に成りさうだ、あゝ何とか云ひたい、手を伸べて水をピチヨ〳〵たゝいて見た、胸にはもや〳〵として居るけれども、何とも口には出ない、水棚を見るとそれは〳〵種々の物がかゝつて居る、
あゝ丁度今日はお盆のお流しの日てあつた、こらまア大變なものよ、黄な女郎花紫の桔梗おや茄子の馬も、一瓜も、あれ玉蜀黍も、一まア大變なものだ、ふとあの風來山人を思ひ出した、このお流しのいろ〳〵を拾つて、一時の大儲けをしたと云ふ、おかしくて一人にッこり。
それから又風流志道軒の事を思ひ出してあの頓智がおかしく今更のやうに笑つた、
また水上の方から吾亦紅や、松虫草の一束ねが、ゆたりゆたりと流れて來た、この花の皆はどこの誰れの手に摘まれてどんな思ひのお靈屋に供へられたのてあら

う、母なきに泣く子の涙がこもつて居るてあらうか。妻に、はた子に、――いづれの涙がこもつて居るてあらう、行く先は流れにまかせて、……どこの何によつて朽ちゆく運命てあらう。流れも花も無心てあらうか。妻はシックリと胸に深く感じて、嬉しさに堪へぬのである。

農夫（地賞）

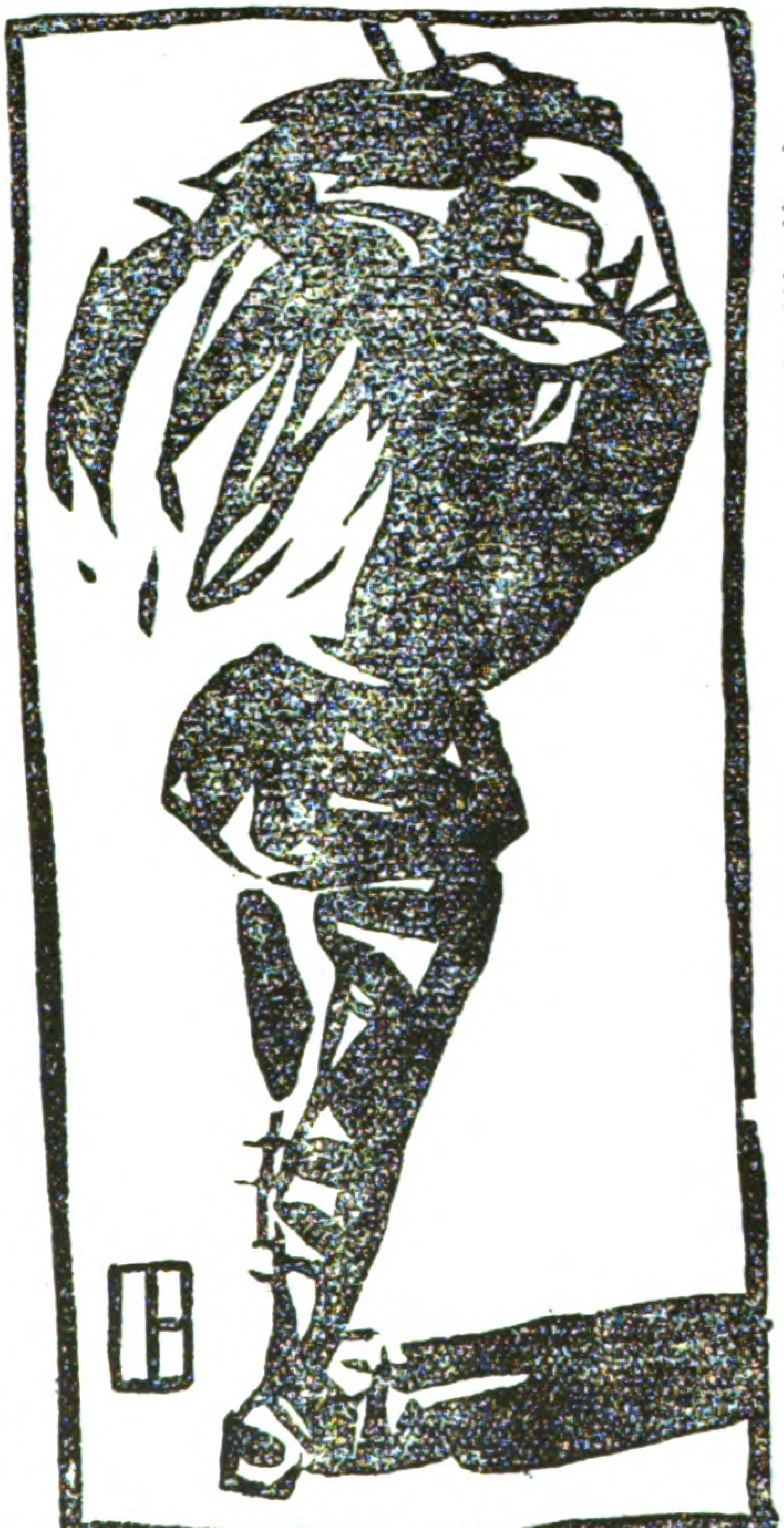
青森縣三戸郡大字二日町　立花とも

センチメンタルな女性の本質も表はれてゐるやうだし、文章も新味があつて今の若い人が書くやうなことは書ける人だと思ふ、まだ個性は表はれてゐないが（評）

○黒髪

越後　佐藤浪子

裏の木立に蟬啼きて暑き夕、庭の打水に涼風起る。去年の夏、久子の君と海に遊びしことなど胸に浮びぬ、東の空ほの白うなりて朝の氣つめたき頃、或は日入りて空はバラ色に潮靜かなる夕べ、磯のそゞろ歩きに未だ鄙には珍しと人も思ひ、田舎者なる吾等もあつぱれ流行と許せしマガレットに結び、一ッ上なる久様は水色に、妾は淡紅色なるリボン懸けて各々白百合一輪づゝかざし、岩間の潮水に鏡して美しとほゝ笑みしが、其懐しき久様は遠き北海の地にゆき給ひ、殘る妾は病み上りの身、寄せてはかへす新潮に脛洗はせて小貝拾ひし去年の戀しさよ。やがて髪結お勝さん來り、妾は鏡臺持ち出てゝ前に座す、フッツリと音して散りし黑髪の去年の姿や今いづこ、重き病になやみし身のかく見苦しく成らんとは、覺悟し乍も流石餘りにすくなきを耻し、消えも入りたき憂き想せられて、髪よき人の座ろ妬ましく、やがてしばし「お嬢様宜しう御ざいます」幽かにお可憐しい此お髪と一人語せしがはつと身にしみて、折から見上ぐる鏡の、引つめ髪の少さき髷、たまらず涙のホロ〳〵と頬をすべり。庭の紅百合一辮ちりぬ。



女は若うして黒髪の少きが實に大いなる痛恨てあらう、かなしき

文(評)

○風の音浪の音　三浦三崎　田中久子

虎雄さんの聲……と思ふ間にもうザアーッといふ風のうなりに消されて了つた。ふとおびえたやうに私は目をあいて見た。

六疊のまんなかに置いた食卓へ斜に寄り掛るやうにして三輪さんは何か頻りと雑誌に見入つて居る。小さな置ランプが三輪さんのからだの陰に成てるので鈍い光がボーと四方へ擴がつて天井へまるくホヤの形を描いてゐる、其うしろの暗いかげて虎雄さんは裸のまゝ腹這ひに成つて、並んで寐ころんでゐる兄さんに又此間の旅行の話をしてゐるのだつた。

「そりや素敵さ、ねえ三輪君」と云つた虎雄さんの聲は大きいけれど、外の嵐の音にともすれば消されて了ひさう、まくわ瓜を食べ〳〵話す口の動くの許りがみえる。三輪さんはうるさゝうに返事もしないでページを操つた。外では又恐ろしく浪の吠え立てるのに交つて風の音、雨のしぶきが絶間もなく窓の戸をたゝく。

母樣にさすつて頂き乍らまたうと〳〵と眠りかけると直おそろしい音におびえて目が覺めて了ふ。

虎雄さんはからだを半分起して太いまくわ瓜をスカスカ切つて夫を手際よくする〳〵とむくと、すぐ兄さんが手を出して取つた、又一つむく。青い皮が長くくるくると輪になり乍ら落ちて來た時、「ホーあの浪の音！」とバタリ疊をたゝいて兄さんが飛び起きた。虎雄さんも庖丁の手を止めて耳をすます。

三輪さんもからだを動かしたとみえて、痩せた自分の寐姿をさすつて下さる母樣のうつむいた淋しいお姿とが壁へうつゝた。

風のうなり、雨のしぶきがまた茅屋根をゆする許りに襲ふ……。

印象を明瞭に出さうと努めた文字の苦心は確に見える、文としては少しも遜色はない(評)

○月の夜　小野つかさ

あんまり月が美いので思はずこんな處迄來て了つた葉月上旬、實にいゝ月だ、私は滿月よりも八日月などの方がしほらしくつてすきなので。あゝやつぱしあの泉水の清い〳〵水は枯れずに、月の影は思ありげに漂ふて居る、一年前の今日此頃が偲ばれて、懷しくつてならないので、私は主なき家の荒れ果てた庭へ、知らず知らずの間に入て居たのである。

丁度こんな晩だつた、そらその＝今はもう破れて荒れて見る影もないけれど＝まがきに添ふて、流れる川の土橋の上迄夜の景色にそゝのかされて、ぶら〳〵とさ迷ふて來ると何方からか優しいお聲で、靜かに詩を歌ふのが聞える、

夕波くらく啼く千鳥

われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたにとべるかな。
若き心の一筋に
なぐさめもなくなげき……
…………

おゝたしか藤村の草枕？私は何となく切りに歌ふ主が床しく懐かしく思はれて、垣根に立つてソッと耳を傾けた――。

姉様の御身の上は語るまい、思ひ出すさへ泪の種だもの、只さる華族の姫様て、御病氣保養かたがた避暑にゐらしやつたので、時々涙ぐんだり考へ込んだりなさる、ひどく沈んだよく物に感じ易いほんとにやさしい方だつたとだけ云つておかう。私をつうちやんつうちやんとそれは眞實の妹の様に可愛がつて下さつた私は姉様と呼ばせて戴いたのだもの。あゝお別れはほんとに悲しかつた、夏も末の心細いこうろぎの聲が椽の下から聞える頃だつたが、お手入れのゆきとゞいた白菊はまだ蕾がかたく、ばらはもう影ばかり殘つて居ると云ふだけてしほれた小さいのがお手洗鉢のわきに咲いて居たつけ。おゝ今はどうしたらう、椽に添ふてまがつて見た。雨戸はすつかりメてある、石燈籠のあたり草茫々と生えて松も南天も楓も何も彼も自然に任せて人の手を加へないので、お庭は見る影もなく荒れて了つた。私は何とも云はれなく悲しくなつて、人生のうつり替りが身に泌みて泣けるのだ、いゝえ泣くのぢやないのだけれども只泪があふれるので……水お手洗鉢は其のまゝだけれど、汲む人がないので、かはかれて煤はたまり、蜘蛛の巣にとぢられて居る、かたへのばらは愛てる主のない故か、ひよろ〳〵とくねつた莖に花は十ばかりもついてるけれど、いづれ、はかなげな、かげの様な、哀れは犇と胸に迫る、月の光は蒼白くかげさす鉢のくもの巣の上へほろりとくづれて一輪散つた、風は絶えず襟元から後毛を吹いて、涼しいしつとりとした感じは殊に去年の夏の追憶をくりかへさするのである。

あゝあの優しい美くしい姉様は遂々此春お亡り遊ばしたのだもの。

私は堪へられなくなつて急いて柴戸を押しあけ、のがるゝ様に表へ出たが、ほつと太息を吐いてはじめてわれにかへつた。

裏の森はしづかに眠つて、淺間の山はおぼろの暗に高く高く男らしくも仰がれるのであつた。

廢園の荒涼たる態と、人事の轉變とからみあつて、入日月の光りの青いやうな氣持がする、青いやうな色の文章、少し褒め過ぎかも知れん(評)

○退院の日　　小石川　よし枝

古代紫の地に、櫻を派手に江戸褄にしたお振り袖に、

紺を重ね、帯は蝶をくづした、赤地の厚板、しごきは、黄金ちりめん、長襦袢は、水色の地に、なでしこと云ふ極あつさりとしたもの、半衿は、肌着を赤に、上は胴とおなじなでしこのぬい模樣、まだ松山へは、やつと二三日前にはじめてきたのだと云ふ、鈴のついたぽつくり下駄に、絹レースの赤の洋傘、づらりとそろへて、「けふこそ、いよ〳〵退院するのですよ」といはれた時の嬉しさ、

家へ歸つてみたら、笑がほでむかへてくれるとおもつた、姉はお正月にお揃ひにてきた、こぼれむめの總模樣のお振り袖きて、目を泣きはらして、いきなり「つゆさんら、えゝわい、いろいろなものをこしらへてもろて、……私やつまらん、

「そんなら姉樣も、病氣おしたらよかろ、そじやけんど、死によつて、私やつらかつた、

一つ違いの姉は七つ、私は六つの春、激烈な、ヂフテリアを病んで、醫者に匙まで なげられたのが、全癒して、五十日目に、我家に歸つた時の出き事、けれど、いま、肋膜をやんで、五ケ月を、あのわびしい陰氣な病院に暮して、いえはいえたが、骨と皮ばかりになつて、歸らんとするいま、定まれる家もなければ、喜こんでくれる親もなく、又、羨む姉もない。

一寸、小說風に出來てゐる、此筆つきなら小說が書けるだらう（評）

○若き母

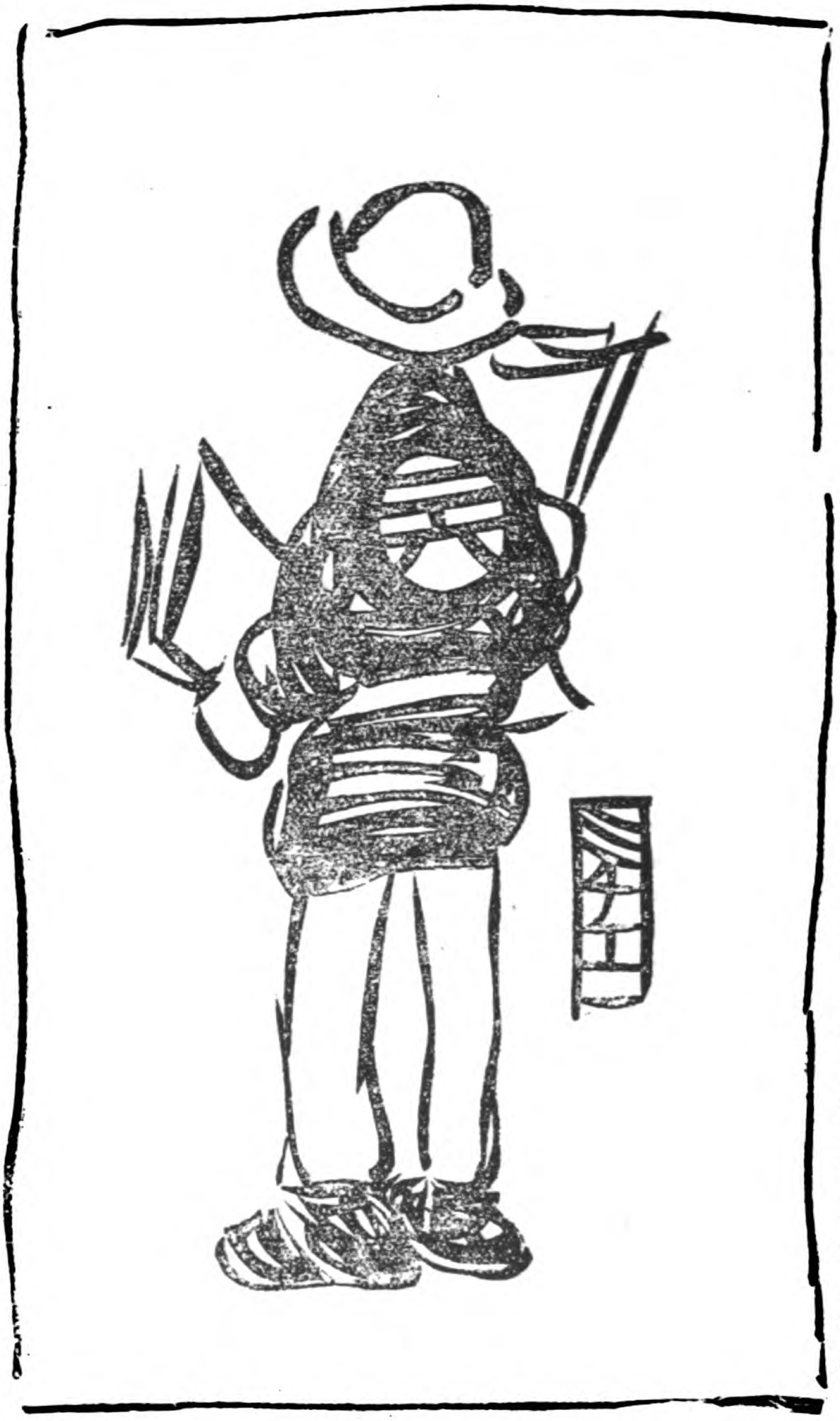
牛込　野村光子

開た開た桒の花開た蓮花の花開た白菊の花壇を越えて可愛い聲が聞えて來る針の手を止めて見ると半ば燃え初めた紅葉の樹を木楯に圓陣く手を引合つて綾子が御友達と餘念なく蓮花の花の遊戲をやつて居る築山の松の枝間からチラと薄紅色の兵兒帯花ちやんだ次は鈍白の西洋前掛を隣りの太郎さんだらう少さな足音をさせて愉快そうに遊んで居る蝶摸樣の元祿袖に紅緒の雪踏を踏みしめて綾子が見える皆仲よく遊んで居るのでホッと吐息をして休んだ手を急がせる過日まで御乳をせびつた綾子がもう母樣人形さんを頂だいよつて言う樣になつて仕舞た月日の立つのは速いもの自分が嫁てから丁度來月で滿五年になる私ももう廿四に成て仕舞た氣ばかり若くても他の見る目は隨分と世帯じみた奥樣風になつて居るだらう。

先日江之島からの歸途に新橋の停車場で同じ級の高江さんや文月さんにゆくりなく會逅した時先方は女子大學の女學生昔時と變らぬ活潑な姿で紫紺の袴にてもりボンだけは飾してを出おあなかつたが川村さんて實家の名を呼ばれてまあ暫くと言はれた時は何だか恥しく思た貴女もお變りなくと言ふて居ると綾子が父の手を離れて馳て來て母樣て私の袂を捕えられた時はつと思て妙に頬がほてつて仕舞たまあ御可愛らしい御子さんてお出遊す事あなたに酷似よまあ御人形さんの樣なと

御人に言はれて綾子の肩へ手を掛たぎり丸髷が急に重たくて頭も上げ得なかつたつけ御両人とも秋風肌に涼しい今日此頃を寄宿舎の窓から懸しひ故郷を偲んてお出になるだらう自分も一度は同じ希望の光に憧憬した一人だつたが現はもう温い家庭の人ともなり五つになる子の母ともなつて斯様な者ても一家の女主人公人の運命は種々なものだ、はた〳〵

新聞寶（人寶）



、、、、、、、、、、、と足音が聞えて自分の瞑想は破られた。咲き過ぎた。雛の。紅芙蓉は少さい地響に待てた様にはら〳〵とくずれた。

三河國岡崎町康生一三人　近藤道江

吉野の勇さん勢よく御禮儀を一つして叔母様綾子さんは？て首を傾げて聞くのである、おやゐらつしやい綾子は彼處に遊んで居〼よ立膝になつて「綾子」と呼ぶと、はあい母様何にと白い顔が花壇の上に、勇さんがお出だよ、あ勇さんゐらつしやい

よ勇さんは走て行く今年九才で活潑な眉の濃ひ目の涼しひ可愛ゐ御子だ、此花美麗だらう凛とした冴えた聲音持て來た紅菊を見せて居るらしひ私に頂だいな紅葉の樣な手を出して一齊に言ふと鬪繞を一わたり見廻して綾ちやんに上げ樣ね、有がとう、何の氣なしに先方を見ると綾子が紅菊を持て此方を見て居たので母子は莞爾と微笑みかはした。

吁綾子はだれにも可愛がられる何と幸福な子だらう永久までも永久までも成長くなつても世の人に愛せられる子である樣いまの通り優しひ心を生涯持て居る樣にと紅友禪の帶を膝に右手に尺を固く握て私は切に祈るのであつた。

小說の方に近い(評)

○小川

德島縣　西野花菱

久振實家で團欒の夕餉終へて、團扇片手にひとり門前の小川の畔に彳む水の樣な涼風が浴衣の袖を弄つて、遠くに馬の鈴が鳴る、思出多き小川を熟と眺めると、目高が幾百もむれて彼方此方に運動をし、藻かげに小蝦がピンピンはねて居る。澄んだ流れの底の小石が一寸濁つた、と見ると泥鰌が泥から呑氣に首を出したのだ。底をよく見ると、可愛足跡が幾つも有。誰のかしら。あら蜆の穴も有、是を竹の細く割つたのでそつと突くと釣れるのだとそゞろ幼時の遊びが思出されてひとり微笑む石垣には何とか云ふ黑い細長い貝が澤山付てゐる川上から菱の葉が一ッ流れて來て向の杭に莖がかゝつてくるりと一まはりしドンドン行て了つた。飽かず眺めて居る後で「大きな袋を肩に掛け、大黑樣が來かゝると」と女の子の唄ふ聲にふり向けば、今年七ッの御隣の政ちやんが浴衣の筒袖に紅のメリンスの帶して二尺程の竹で我家の槇垣をバサバサ音さして居る。「政ちやんお出なさい蜆が澤山居てよ」と云へば「取て頂戴」と走つて來て竹を私に渡すから、蜆の穴の大きい樣なのを其先で堀ると水は颯と濁つて何も見えなくなる、けれど流の早さに後から直ぐもとの如う澄むのであつた。見れば大きいのが上に出て居るそれを竹でとつて「上手でせう」と云ふと「えゝ、此處にも大きいのが居てよ」「そう、それも取つて上ませう」と云つて五ッ取り政ちやんの手に入れると大喜び。萩の美しい葉が夕風にゆれて五日の月が空に淡く光つて居る。私が「それ幾つ有かしら」とわざと問ふと「一ッ二ッ三ッ四ッ五ッ、あの五つよ」と甘える樣な口「そうよく知てる事誰におそわつたの」「姉さんなの。姉さん學校へ毎日行くのよ」「あなたは」「あたし八ッになつたら……それでもあたしイスのイとスヾリのスと書てよ」「そう感心ね」とほめる。小さい手で紅い帶をいぢりながら「石盤買うて貰つたのよ」「精出して姉さんに敎へてお貰ひなさいよ」「えゝ」とニッコリ櫻色の頰に靨が可愛い。

稚い話に花が咲くうち、あたりは稍暮れて月はいつしか色冴え、萩の茂に小さな虫の聲。「政ちやんもう歸りませう。あなたも母さんが待つてるわね」云ふとすぐ「さよなら」とおじぎしてカラコロと下駄の音輕う殘して木の間に隱れて行く。

すら／＼と小川の水が流れてゆくやうに書いてある、暗い悲しい文章の後で、斯んな作を讀むと、蒸暑くて堪らなかつた後て、涼しい輕い風に吹かれるやうだ（評）

○晝

本所　秋山欣子

頭の上て、轟ーッと凄まじい音がしたので、ふつと無我の境から覺める、兩國へ這入る貨車が煤煙を擧げていつた、氣がついて四邊を見回す、誰も居ない、そつと四疊半を覗くと、叔母樣も千代樣も呑氣に眠つて被入る、出かゝつたあくびを呑み込んで机の前へ歸るとどこかて時計がだるさうに一つ。あゝいかに高架線の下だからつて斯程の暑さとは想像しなかつた、まるで麴室へでも這入つた樣。折角從兄が高萩へ誘つて呉れたのに、一寸した反抗心から、遂々諾かなかつた罪かも知れない、けども彼時は愉快だつた、汐風浴びて磯に寢て夏を忘れる積だつて從兄がいふと、私がむきになつて、それからして男らしくもない、なぜ燃える樣な眞晝野を拔渉して夏を懷ふといへません？私あ鼻が惡いんだから高萩へても行つたが好いんだけれど、兄樣が行くのならよさう、それよりか暑い本所てせつせと働いて眞に夏の光に活きやう、といつてやつたつけ、其後從兄は私のアドバイス？を容れて乘鞍にあるんだ、と記憶の蔓を次々に搖ると、何ともいへぬ微笑が頰に登る、こんな時の癖て、手をかう組んて頤へ突張つてうつとりと的のない處を眈んてると、幽かに遠雷の樣な潮鳴りの樣な轟きが傳つてくる、またかと顏をしかめて上目遣してると、ふーつと地を嘗め這ひづる樣な汽笛を耳近く鳴らして銚子行の客車が通つた、と、直ぐ眞黑な機關士の顏が目に浮ぶ、此暑さに醉興じや出來ない業だと思ふ、旅する人もそうだ、暑い、辛いの幾百かの思が車輪の樣に回つて、炎の樣に凝つて、バラ／＼と明り窓の朝顏へ落ち散らばつた煤——の樣な餘燼を沿道へ吐き出して行くんだ、と思ふと汗が湧く。明り窓へにぢりよつて萎れた紅の葩へたかつた煤をふつと吹くと、花陰から蚊が聲を呑んて出た、晝寢からさめてねぼけたのか窓障子の隅をかさこそと叩いては骨の椽をそろ／＼と歩いてる、何となく、夕方くる盲ごぜをみる樣哀な姿なので、そつと指先て摘んて明るい方へ放してやる。

能くあの邊の光景があらはれてゐる（評）

○涙

神田　田中喜代子

何かの音に目がさめたくらやみをまじ／＼と見つめて居るとひとりてに涙が出る、ふと此んなことを考へ初める、

涙は情を現はすけれども果して涙ある人が情ある人であらうか、涙なき人が果して無情であらうか、全體を通じて上流社會の人が涙がなく、下流社會の人に涙があるであらうか、生活上から云へばそうあるべき筈、併し彼の社會主義等を唱ふる勞動者の半面は冷笑冷罵にみちて居る、がその半面には實に血のやうな悲噴の涙があふれて居るのではあるまいか、大馬鹿は利口に近いと云ふたとへの通り、極度の悲しみになれて居る彼等は半面の冷笑冷罵に依つて半面の悲しみをおほふて居るのであらう、だから大低な事では彼等は泣かぬ、けれどたしかに情はうごいて居るにちがひない、上流の人の星を見ても泣く、すみれを見ても泣く、左樣ゆうのは未だ未だほんとの悲哀ではないのだ、人は逆境にあればある程强くなつて、そして情は動き易くなるから、ぢきに悲痛を感ずるが、併し悲痛を感ずるやうになれば成る程、泣かなくなる、すると未だ涙をこぼして泣く中が可いのかも知れない、さうだ泣く中が花なのだ……

泣く中が花なのだは言ひ得てよし(評)

○あけびの實　和歌山　岡崎さき子

秋がくると思ひ出さずに居られませんのは未通草の實であります、古代紫にうす紅をなすつた樣なその色、曲玉の樣な可愛ゆいその形、はては大木の梢からぶらんと垂れ下つて、こぼれそうに鐵漿をつけたその口を脇の見へる迄あいて笑つて居るかの樣な其姿が目前にちらついて自分が嘗て此の木實に就いて嬉しかつた悲しかつた小さな歴史のページをみるのであります。

丁度一昨年の十一月、木葉のやゝ黄ばみ初める頃でした、妾はお父樣に連られてあの名高い高野山にお詣を致しました、三里の坂路を山駕籠て苦い目にあつたり、袈裟掛、押上、鏡岩などの因縁を駕籠昇さんに聞して貰つたり恐ろしい仁王樣のある大門の側て野菊の花束をこさへたり、金の柱の何本もある大きな伽藍を見せて頂いたり、古い佛樣のいくつも〳〵祭つてあるお堂を拜んだり、大名の墓の大きいのに驚いたりして、歸りには小林區署の許を得て林道を降りました、その時道の側の大きな胡桃の木につる草が一面に絡まつて紅らんだ葉蔭から紫の曲玉形の可愛いのがいくつもいくつものぞいて居ました、妾は欲くつて欲くつてお父樣につらまつて、手を仰して見たり洋傘の柄て引掛て見たりしましたがどうしても取られませんでした、其處へ木馬とか云ふ運搬器に木材を山の樣に積んでキイキイと林道を下つてきた若い夫婦らしい男女がご在ました、お父樣はその男の方にあれを取つてくれつて仰つて梢を指しますと「ヨシキタ」と返事よくスル〳〵と其木によぢ昇つてつるのまゝ澤山取つてくれました

のてお父様は御禮だつて十錢銀貨を一個差出ますと其人は見むきもしないでさつさと行つてしまいました、其時の嬉しかつた事は言葉や筆でつくせない程でした。

それから又去年の秋でした、妾は肺を病つて其片方をなくする程の重患で御醫者様もだめだつて仰しやつたそうですが日々熱に浮されての譫言にあけびの實を食いたい〳〵と云つたそうです、お父様やお母様はどうせ助からないのなら毒になつてもかまはぬから食べさしてやれつて近くの山から小さいはぜて居ないのを三個取つてきて食べさしてくれましたが、それを食べると烈しく咳が出てとうとう三合程咯血致しました、其時の苦しかつた事は今でもわすれません、あゝ又秋がきました妾は死ぬと言はれた病にも死なゝいで今年は健康であけびを食べませう。

（守田りせ子寄）

特色のある記事、悲しいことを悲しさうに書いてないだけ哀の深い感もする（評）



山路

○縊死の人

大阪市　松葉要子

尋常小學校の舊校舍に隣り合つてみすぼらしい程小さな平家は此の村の役場である。道に沿うた黒い門の左に半ば朽ちた掲示塲が俯向きなりに立つて居る。大方は雨に打たれ、風に吹かれて文字さへ見分け難き中に際立つて、斜めに裂けたその一部が缺けてなくなつた公告がある。女。住所不明。年齡四十四五位。丈四尺八寸五分。顏長き方。鼻普通。奥齒二本缺。……飯石村界栗林山中に於て縊死。死躰は假埋葬に附す、右心當りの者は當役塲に申出づべし。こんなになつて居るのに、未だその儘掲載してあるのは何れその死躰の引取者もないのであらうか。私はじつと目を据ゑて掲示を見て居る。とあの狐が化けると云ふ栗林山で物凄い女の死の有様を思ひ浮べると同時に、何とはなく哀さが一入胸に一杯になつて來る。四十五と云へば私のお母様より二つの年下、定めてお父様の樣な夫もあつたらう、私の樣な忘れられぬ片身の子もあつたらう。放れ難い、懷しい戀しい夫も子も振り棄てゝ、知らぬ他國の知らぬ山奥に冷たいむくろとなつ

たのは何處まで、運命の神がつらくあたつたものであらうかと限りなき空想に耽けつて居つた。

ふと後ろを見ると紺風呂敷の荷を負ふた旅商人らしい男が私と同じ樣に公告を見て居る。頰のこけた、眼のきよと〳〵した顏ににやつと笑を浮べて「何んだ首吊りか」とつぶやきながら、すた〳〵と興嶽寺の方へ行つた、秋風がザワッと吹くと向ふの蕎麥の花が一樣にふら〳〵と動く、學校のオルガンが冴えて聞えて居る。

(反古同樣の一枚の公告にも人間の生命は係つてゐるのだ、好い眼の着けどころ、旅商人を點出したのも好い、今少し文に深刻の味ひがあつたら、更に悽愴の氣が起つたらう(評)

○妹

兵庫縣　石田好枝

妹の小さい柩は埋められた晩であつた、私は餘り心寂いので早く床に入つた、床に入つて幾度と無く寢返りしたが、厭に妹の事が頭に浮ぶ。

妹は今年十二、只だ花なら固く結んだ蕾の頃、運命の紳のなんと云ふ戲……十二年と云ふ間は姉妹の約束した美代ちやんと私、私は未だ兩親のある身、美代ちやんは此頃どうして居るだらう、魂は何處に迷つて居るだらう。

美代ちやんは成長すれば大臣の妻、さも無くば一代ミスて一國の女王に成ると、種々の空想を私に語つた事もあつた。

又十才の頃小學校の演說會の時、あの美しく裝飾した演壇で優しい姿兩手を振りつゝ、鶯の樣な聲で、島の女王の昔話をした事。又裁縫の稽古の時、あの小さい紅葉の樣な手に針が立つて泣いて居た、私が島の女王さんが泣いて居る、大臣の奧樣が泣いてお居でだと云つた時、美代ちやんは愛しい顏で、姉さん女王さんも針が立つた時は痛いわ、と云つて笑つた事。

あんな優しい妹が六十日の疾病にあの樣に醜い姿になつたか噫々、恐怖い。小さい私の胸に妹の種々の事が押寄せて、どうしても寢られぬ、そつと床から出て妹の部屋に行くと、妹の衰えた姿が朧に見える、私は頭から水を掛けられた樣に、ぞつと身慄してばつと障子をしめると妹が後から姉さん、姉さんと追かける樣、驚いて奧に走り込むと佛壇の線香床しい匂、妙にぷんと鼻を突く、油が無くなつたか燈明の火が消えそうてぢり〳〵と音がして氣持が惡い、煙の中に弱果た妹の姿が現れて、姉さんと手て招く樣。

自分の部屋に飛込んて床に入る、又厭に妹の姿が前に現れる。すると東の方が明くなつて來た、晩に掛けて置いた「ヲリウブ」入りの時計が五時になつたか、每もの梅が枝を歌ふ……斯樣に夜を明した事も度々ある。

妹の墓塲には數百尺もある、大變枝振の善い銀杏の樹がある、時分が時分て身にしむ樣な寒風に銀杏の奇麗な葉が高く四方に飛んで行く、妹の小さい石碑にも一葉二葉ひら〳〵と飛んで來る。

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は総振仮名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同断、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は乙種の規定に據る。

天　○樂夢苦夢

熊本市破分町一　近野春子

もう朝夕は、冷たい風が身に泌む樣な秋も末つ方の、淋しい夕暮でした。吹けば飛ぶ樣に、瘦せた骨計りな汚ない乞食のお婆樣が、竹杖を力にヨボ〳〵と、村でも富豪の噂ある、お富樣の門口に立つて、頻と惠を仰いで居ますと、家から、十二位の立派な衣服を着た娘が出てきて、さも嫌相に鼻を撮んで、そして言葉も荒しく、「オー臭い。何も無いんだから去つてお吳れ。」と言つても、仲々去に相にも無いので、終には腹を立てゝ、落ちてた小竹で一寸突きますと、乞食は恨めし相な目付で、フイと行つて了ひました。が軈て、二三町も參ると、一軒の小さな藁屋根がありますので、又候、「御飯でも少々……。」と申しますると、年は同じく十二位の、打立はよくないが、優し相な娘が、御飯を盛つた茶碗を持つて來て、「さあ可愛相にネ。」と與へますから、乞食は何度となく叩頭をして、さて、「ほんに有難うムひます。せめてはお名を。」と申しますので「私清と云ふの。」と答へると、皺だらけの顏を莞爾させ乍ら去つて了ひました。

其年も程なく暮れて翌年も春の半となりました。野山には數知れぬ草花が咲き亂れてゐるのです。お富樣とお清樣とは手々に小籠、摘草にと參ります。吹く風は軟かに袂を弄り、白い蝶と黄い蝶とは、二人を導き顏に花から花へと舞ひ移るので、面白くて〳〵堪りません。思はず知らず、まだ一度も來た事のない所迄、深入りして了ひました。心が心ではありません。もうそろ〳〵日が向ふの森へ沈み掛ります。仕方がありませんので、涙乍らに思案に暮れていると、折柄白衣の老婦人が通りかゝるので、里に出る道を尋ねますると「今日は迚ぬ駄目だ。今夜は妾の家にお出て。そしたら、明日連れて行つて上げよう。」と誘はるゝまゝに其婦人の後について行きますと、とある森中に一つの立派な建物があります。こゝが其婦人の住ひでした。色

種な果物や溫かい御飯をもてなされて、さて柔かい臥床に就きますと、晝間の疲ですぐ夢地を辿りました。其夜、お清樣は如何な夢を見たでしようか。夫は〱愉快な〱夢を見たのです。夫はお清樣が余念もなく摘草してる所へ、一人の神々しいお婆樣が來て、こちらに來いと言ひますので、其通りにしますと、やがて大きな御殿に案内されてあらゆる金銀寶石で飾り上げた立派な室に伴はれました。庭には、曾て繪にも無い樣な種々の花が、恰度生きてる樣に、お清樣を見ては莞爾してゐる。梢に歌ふ鳥の聲迄が、自分を讃めてるのがあり〱聞えます。早や山海の珍味も並べられて、何共云へぬ好い



香氣が室内に充ち充ちてゐると、軈てお婆樣は、お清樣の左手を確と握つて「お清樣。去年の御恩忘れはしませぬ。と何だか小石の如な物を右手に握らせられたと見て、夜が明けましたが、不思議な事には、右手には、美くしい光澤のある、小さな紫色の玉が夢其の儘に殘つてゐました。さてお富樣は何の夢を見たでしようか。此は又た、大變な事になりました。お清樣と同じ樣に、お婆樣の御殿に參りますと、見るも恐ろしい赤鬼が門口に立つてゐます。室に入れば、周圍には風の神、雨の神、疫病の神、夫に加へて、大嫌ひな大蛇や獸が澤山ゐて恐ろしい目で、お富樣を見ては、色々と惡口を吐くのです。

それにお婆樣迄が、毋と頭の上から見下し乍ら、「妾を忘れはせぬだらうね。人吾に辛ければ……。」と云つて、指て脇腹を突かれて、キャッと聲を擧げると夢が醒めましたが、脇腹は倘痛むのでした。朝飯が濟んで、一人は包み切れぬ喜を湛へ、一人は包みも敢ぬ憂の色に閉ざゝれた小女が、老婦人に里近く迄、送つて貰つて別かれる時、よく／＼氣を注けて見ましたら、間違もない去年の乞食のお婆樣でした。すべて、人から善い目に逢ひたいと思ふなら、人にも善ひ事をせねばならぬものです。（了り）

（評）家庭的敎訓お伽噺の上乘但し筋は在來のものと餘り違はないのは殘念です。

地

○三つの願ひ

伊豆國賀茂郡下田町　土屋いそ子

朝鮮に、面白い話があります。これもその一つです。昔ある片田舍に、爺さんと婆さんとありました。何の因果か貧乏の上に、子供が一人もありません。いつも子供が一人、欲しい／＼と思つて居りました。するとある月のよい晩でした。「あゝこんなよい月の晩には金のある者は、酒でも飮んで樂しく遊んで居るだらうに、同じ人に生れながら、本當に馬鹿々々しい、つくづく浮世が厭になる。」とこぼせば、「今更そんな事を云つたつて仕方がない、これから神信心を致す方が餘程いい。」とそこで二人は一生懸命神信心を致しました。するとある晩、二人は同じ夢をみました。それは、一人の男の子が來て、「我神の使命をうけて參つた者であるが、お前達に三つの願を、聞屆けると、神の言葉よつく考へて申し上げるがよい。」と云ひすてゝ消へてしまいましたが、婆さんは妙な聲を出して「あゝ喉が渴く葡萄を食いたい／＼。」と口をもがつかせて居ると、不思議や、天井から、葡萄が三房落ちて來ました喜んだのは、婆さん。すぐ二房平げてしまいました。これを見た爺さんは、怒るまい事か、「この馬鹿め！折角神樣の下すつた願を二つにしてしまやあがつた！そんなに葡萄が食いたいなら鼻の先へぶらさげて貰ふがいいと云つたと思ふと、不思議や、葡萄の一房が鼻の先へぶら下がつてしまいました。婆さんは大變に悲んで、泣き出しましたが、「こんな顏して、世間へ出られよう、生きて居る甲斐がない。とやがて細帶を出して首を括らうとするので、爺さん氣が氣でない。そこでどうか取れるようにと願ひました。すると今まで鼻の先にあつた葡萄は、バッタリ下へ落ちました。其の途端上の

方で「この馬鹿共！折角の願を、つまらぬ事で玉無しにしてしまつたのか？三ケ條は聞き屆けたぞ。」と云いすてゝ立ち去られたのは以前の使。二人は怒るやら、悲しむやらで、とう〳〵夜をあかしてしまいました。其の翌朝、家の前に、一人の男の子が棄ててあるのでこれこそ天の惠みと其の子を大切に育て家は、段々榮へて、果ては樂隱居になり濟ましましたとさ。めでたしめでたし。

（評）韓國の口碑とならば仕方がありませんが末段がやゝ不自然のやうです、

人 ○金の着物

高知市入新町　此原白ばら

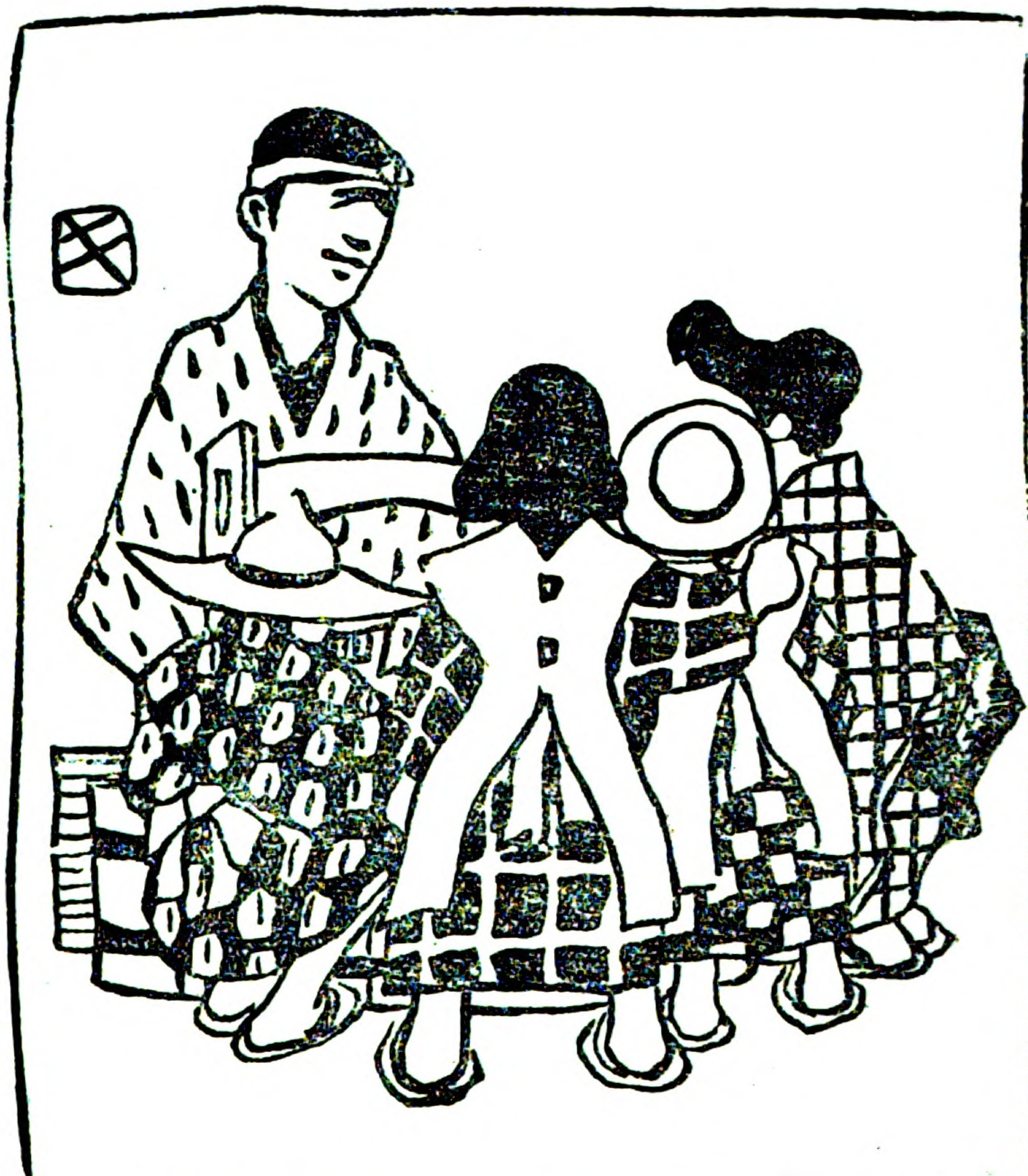
美ちやんは十になる女の子で、色の白い目のパッチリした髪の黑い、それは〳〵愛らしい子です。お母さんは三つの時に亡くなつて、お父さんと二人暮してです、お父さんは薪を取つて町へ賣りに行くのが職業ですが少し前から病氣で働けなくなつたので、可愛そうに、美ちやんは毎日薪を取つて、お父さんにお藥まで擧げて居ます。一夜町から歸つて休んで居ましたが、向ふの山の上の星がお母さんの樣に思はれてならないから瞬きもせず見ておりますと、星も笑つて居る樣です。

そう思うとなつかしくつて〳〵「お母さん〳〵」と云ひましたが、星は唯笑つて居るばかりです。美ちやんはもう夢中になつて庭に下り、梅の木に上りましたが高い大きな杉に上つたら、なほ星に近くなると思つて、渡らうとすると、足場を失つて落ちましたが、其のまゝ何も知らなくなつて了ひました。しばらくすると、「美代子美代子」と呼びますから目を開けると、懐しいお母さんが星を抱いて立つて居らつしやるのです。美ちやんは嬉しくて抱きつきました。お母さんは頭を撫て「大きくなつたね！」と喜んで居ましたが。「お前に金の着物を拵へて上るから、金の羊の毛を取つておいて」と云つて消えて了ひました。美ちやんはハッと思つて氣がつくと、梅の木の下で臥て居ました夜はもうあけて日が杉の間からさして居ました。

美ちやんは驚いてお母さんの事は誰にも云はず、いつもの樣に山へ行きました。薪を取る間も金の羊の事ばかり思つて居ましたが、不圖あの牧場を思ひ出して、キットあの中に居るだらうと思つて行きました。番人の女に、「姉さん今日も羊を見せて頂戴よ」と云ひますと、「マー美ちやんなの、澤山見ておいて」と云ひましたから中に入つて、あつちこつち探しましたが、皆白

い羊ばかりて金色のは一つも居ません、仕方なく番人の所に來て「姉さん金の羊は居なくつて」と云ひますと、番人は目をまるくして「金の羊なんか居ないわ」と云ひます。「そんならどこに居るの」「そんな物どこにも居ないわ、ホヽヽヽ美ちやんどうかしてるの羊は皆白いのばかりよ」「マー、ソー妾困つて了つたわ」と美ちやんはがつかりして歸りました、其の晩薪を賣つて歸りにも、金の羊は居ないだらうか、居ないならどうしようなどゝ

金魚賣　名古屋　きよし



黙つて、いつもの小川に來ますと上で優しい鳥の聲が聞こえるので立つて聞きました。

金の羊はどこに
居る・金の羊は
どこに居る。
山をこえて谷こ
えて、遠い／＼
奥山に、
紫の百合が咲
いて居る、
金の羊はその側
て、甘い草を食
べて居る、

鳥はこんなに唱ひましたので美ちやんは、大喜びに、喜んで家に歸りました。翌朝早くから山に行つて、奥へ奥へと行きましたが、紫の百合は一つも咲いて居な

いので、困つて立つて居ると、人のよさそうなお翁さんがトボ〳〵來ましたので、側へ行つて「この邊に、紫の百合は咲いて居ませんか」ときくと、お翁さんはニコ〳〵笑つて「あつちの方に咲いて居るのだよ」と杖で指して敎へて呉れましたから、其の方に急いで行くと、なる程美しい百合が澤山咲いて居ます。美ちやんは一目見ると美しさに見惚れて立つて居ますと、羊の聲が聞てえるので、其の方を見ると向うにマー金色の羊が居るのです。美ちやんは天にも登る程嬉しく走つて羊の側に寄りましたが、一時は恐ろしく立ち留りました、雖も羊のおとなしそうなのに安心して、背を撫て丶「ねー羊、お前の毛を少し頂戴よ」と云ひますと、羊は諾しと云はぬばかりになきました、それて毛を一摘み程貰つて羊には何度もお禮を云つて歸りました。其の夕庭の梅に上つておると奇麗な小鳥が來て「妾はお母さんのお使ひです金の羊の毛を貰ひに來ました」と云ひますから、さきの毛を與ると鳥は美しい歌を唄つて飛んで行きました。
翌朝早く目を覺して見ると、星の樣な色の金の着物がピカ〳〵光つて枕元に置いてありました、美ちやんはもう嬉しくて〳〵跳ねたり轉んだりして喜びましたがすぐそれを着て出て行きました。誰も美しいのに驚いて羨まぬ者はありません。間もなくお父さんの病氣も全り快くなつて美ちやんが薪を取らなくてもよい樣になりましたから、今は毎日〳〵あの金の着物を着て、山の奥に行つて、毛を貰つた羊と歌を唄つて、仲よく遊んで居ります。めでたし〳〵。

（評）これも又面白いですが末節の所を何とかしたいものです。

〔秀逸〕

○稲の評議

岡山縣　奥山千代野

或田舎に千町田と申しまして、それは〳〵千町もあらふと思はれます樣な廣々とした大きい稲田が有りました、或夏の朝まだ人家には戸が締つて何の音も聞こゑず只しんとして居る時どこともなく聲が有ります、よく〳〵見ますれば一人の稲で「皆さん吾々は實に拙らん事では有りませんか、折角此樣に花を咲かして實れば綺麗になりますから雀などは遠くから見つけて來て穗をつばみ、又人間は直ぐ刈り採つて仕舞います、其上長く生きて居れば死んでも極樂と云ひまして、皆んに年中春の樣なよい所に行けます由、どうです皆さん何とかして雀や人間に採られん樣にして極樂へ行つた見ようては有りませんか？」…

是れを聞いて居まして諸々の稲は、もとより雀や人間の所爲を憎んで居る所ですから、成程そうです〱そんな所が有るなら行つて見たいわチと口々に云ひまして皆賛成しました、

それで今度はどの樣な計略を用ひたら他の物に採られん樣に出來るて有りましようかと云ふ相談にかゝりましたが其結果、如何に實が熟しても靑色になつて居る事と定まりました、

折から、お寺の鐘がゴーン……ゴーン、と夜明を報じましたので晝は相談が出來ませんから又今夜の事としまして水を打つた如く一時にしづまりました、

それから大分立ちますと農夫等は左右の稲の出來を見ながら思はず浮ぶ片笑窪と云ふ風で來りました、

稲は夜の疲につかされて、うつら〱早や極樂へ行つた夢ばかり見て居ます、

もう午後六時と思います頃、彼方此方に勞動して居ました農夫は各鍬をかついて歸り始め、同時に今迄極樂の夢ばかり見て居ました稲も眼を醒まして、そろ〱頭を動かし始めました、

先づ第一に相談が纒まつたもので有りますから諸方の稲へ手紙やら飛脚やらで通知しましたが一人として不賛成のものは有りませんでした、

其後二ヶ月ばかり立ちまして、とう〱待ちに待つて居ました秋が來ました、

こゝに驚いたのはお百姓、今年は暴風も吹かず、洪水も出ず、まことに豐年と思いの外、秋末になりましてもまだ稲が熟せないので大騷ぎ、遂には國中總御祈禱まだ〱終りには神樣の所爲であると云ひまして全國の神社は悉く廢して仕舞ましたと云ふ事であります、

斯樣に騷いて居ます内に冬も早や半ばとなりました、

稲の方にありましては初めの程は人々が騷ぐのを見てくす〱笑つて居ましたが、今は寒さに堪へられませんので遂に大部分はくさつて極樂に行けんばかりてなく地獄とも申すべき雪の中に埋められて仕舞いました只幸にくさらなかつたのが、所々に殘つて居ました、

それが明る年になりまして去年のが誤解であつた事をさとり今度は相談を改めて以前の通りに早く熟して黄金色となる樣にしました、

それで人間樣には去年の事を深くおわび申して以後は二度とせん事を約し、其かはりに雀や其他の害虫などを捕へて下さる樣に願いましたとさ、めでたし〱。

(評) 教訓的お伽噺として先づ無難の作

和歌

與謝野晶子先生選



▲規定　新興の短詩と称せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は丙種に據る。

天　静岡縣庵原郡庵原村　天野白藤

琴ひきて物を思はぬ君なればわが泣く涙えこそ拭はね

地　四谷　河野槇子

願はくは虹の七彩胸に描き我はねむらむ嵐の中に

人　讃岐高松市西通町三九九　香川育江

灰色の小さき皿も自らは喜ぶなりき酒みてる時

秀逸

○　神戸市　山本みどり

そことなくかの天上の花の香のほのめくおぼえ君と語りぬ

○　麹町　銀杏庵

かへりくれば今年も咲きぬ古里の池のめぐりの山吹の花

○　佐賀縣　吉田千代

嬉びを盛りし器の片破れをいだきてあはれ暗き世に泣く

○　静岡市　根岸良子

照りさゆる月に向へば泣かれぬる月見草咲く美しき夜

○　鹿兒島市　山下敏枝

我が心焰の海からくれなゐにからくれなゐに君をしぞ思ふ

○　京都　綿引眞砂

にび色の衣きし人の數多く立つとぞ見ゆる古枯の森

○　大阪市　田中れん子

天地にひとりの友と我は思ひ人も思ふと思ひしものを

○　群馬縣　森下花子

湖や撫子咲ける百合咲ける汀に立ちて夏の月見る

○　山口　田中美子

紫の小さき花をふと見出でかなしき心和ごみけるかな

○　下總　若杉とり子

ほの〲とあけゆく空を眺むれば羅召せる若人の如

○　失名

悲みの滿ちしこゝろをあはれとも思ひ玉はゞ百合など玉へ

○　山形縣　工藤きく子

海の宮玉をたづねにいでてたちしあはれ緑の黒髮の君

○　加賀　琴庵

うたげする海の宮殿のつかさびとはたの狹物やはたのひろもの

◎海の月黄金白金珠ぞちるみをたどらば宮居なるべし　下谷　田方小夜子

◎美しき萩の花見る少女等は皆絵日傘をさしにけるかな　信濃　小林いち子

◎消えもせず燃へむともせずいたづらに年を経にけり吾が戀の火は　坂井郡　片山千里

◎やはらかく手をうちかさね君と我かたらふまへの紫陽のはな　神田　神谷てる子

◎嶺きや白百合あまたあかつきの霧にうねりて咲けりほのかに　印旛郡　すみ子

◎こゝちよく袂ふかせてむさし野のあけゆく野路を一人行くかな　和歌山　貞子

京　娘　　神戸　山本美社環



◎雨霽り川辺をこむる夕霧の中に夜の浮べるが見ゆ　福島縣　笠置きの

◎紅のふりのたもとの美しき少女なげきぬ初秋の野に　日本橋　吉田さく

◎ゆあみして窓の子に立てば白百合の香ほのかに身に迫りくる　千葉縣　素勝花

◎三日月の上る山影山寺の鐘の音響き木草の散る　下野　下河邊なみ子

◎何故と思ひもわかぬ悲しさを秋の風吹きたそがれにけり　茨城　坂本百合子

◎涼盛京の小女の友染のながき袖ふくかも川のかぜ　若狭　山田綾葉

◎山の渦に渦橋にうつる月を見て立てばいつくか蟬のなく　牛込　長谷川花子

◎山深く蔭につゝまれもの思ひおもひ傾く白百合の花　失名

◎ある夕べ悪魔の軍攻め来り取り囲まれし我が胸の城　大阪市　沖野英子

◎わが心われより外に誰か知る知れていますはあるいは君か　香川縣　藤井靜子

◎ほゝ笑みの姿映しつ芝生なるいさゝ小川に燥ぐ少女　田中えつ子

○　大分縣　阿南のぶ子
何んとなく淋しきものは庭の邊に紅葉散りしく秋の夕暮れ

○　長門　吉津よし子
大風は潮のさまに覆ひ來ぬのぼる煤煙はただ龍卷と見ゆ

○　但馬　秋菜婦美子
眼閉づれば心の奥に森ありて戀を語るよ幻の影

○　若狹　津田汐汀女
高笑ひ春の夕べを興じゆく三つの人影野にかすみけり

○　備中　安原豐子
玉だれの小簾卷く人の黑髮の芳ひ亂れぬ朝かぜの宮

○　下總　下河邊なみ子
小雨して萩散る宵に逝きませし妹戀ふかれに雁なき渡る

○　尾張　岡田信子
有明の月も照りそふ撫子の花にねむれる小猫の姿

○　澁谷　益美留里子
千代八千代かはらじものと誓てしことばに生くる二十の少女

○　高知縣　姫野々萩
山犬の吠ゆる音聞え古寺のくづれし垣に萩の花散る

○　大阪市　はな子
秋風やうなだれ歩む河添の葦の枯葉のかさこそとなる

○　芝　篠崎きみ子
漁火も今宵は涼しかじ枕涙かきわけて秋や來ぬらむ

○　岐阜縣　山北よし子
大夏の白き熱氣に喘ぎては森の鳥みな瞳うるめる

○　若狹　片岡はる子
小女子は苗代小田をたがやすとはだしして行く朝露のみち

○　石川縣　鹿江能子
とぶ蝶の疲れしはれも安らかにやさしき花にそと口つけぬ

○　伯耆　佐伯くに子
待ちわびてふとわがよべの夢思ひ胸安からぬ夕月の戸よ

○　岡山市　河原ます子
ふるさとや九月となれば風げる日の白帆ぞこひし母います島

○　安房　内木やす子
山百合に涼しさおぼえ君による心地して居ぬ初夏の朝

○　筑前　田中とよ子
よき風は米洗ふ子の髮撫でぬ卯の花月に栗する夜の

○　阿波　西野花塋
薄月夜芙蓉みだれて仄白う笛吹く君のかげ朧なり

○　山形縣　後藤敏子
戀に泣く天涯少女の涙かや白百合に置く朝の露は

○　上田あい子
み手とりて夏の夕を濱風に吹かれ吹かれてうたえばたのし

○　茨城縣　阿部弘子
なつかしき友と別れて見返れば見えずなりけり紅葉のかげに

○　三河　宮田梅子
うの花の匂ふまがきに月さえて母屋のかたに琴の音はしぬ

○　上毛　須藤みどり子、
鐘の音の響きのすゑは亡き君が面わとなりて眼にうつるかな

○　由基　川名すみ子
ゆあみして夏によろしき夜雨に芭蕉の七人そよぐ

○　弘子
やわき風ひとたび渡るまたわたる其風さびし秋來る家は

○　靜岡縣　きよし
ゆく寺は霞ハ森につゝまれてほのかに響く夕暮の鐘

○　根室　白[illegible]
白魚のごとき手琴に打ちふれて絃の音妙にかきならす君

○　京都府　松のみどり
故里に歸りて鍬をわれとらむ兄はいくさにうせたまひけり

○　西茨城　田村波津子
月影や汀十里は浪白く船歌のみぞほのかにきこゆ

○　熊本市　近野春子
笑くしき少女ながら生けることおもかげ面がきわれ微笑みぬ

○　四谷　笹原清子
雲と見し刹那よ小さき雲むれはあやしく打ちぬはげしき波を
○　神田　三橋素子
小夜更けて一人書よむ淋しさにおもひぬむかしほの見し人を
○　大阪府　寺部君子
美しくみどりの中にしろたへのひる顔の花ただひとつ咲く
○　呉市　碓井清濱
水いろの袂ふかせて眺めけり水面にうつる夏の夜の月
○　釜山港　富永清子
百々度もわれ耳あてぬ此花に君の声得きかましものと
○　岩手　富士根小枝子
桂かざし天馬に召してきよき人來ますと思ふしのゝめの海
○　函館　岩崎弘子
ほととぎす眞玉くだきぬ霧のなか山川の瀬に髪すくあした
○　上毛　伏島直子
ねがはくは思のまゝの一日あれよ夜毎の夢のなどかかなしき
○　備後　安保盛子
ひるがほの籬をつたひとぼとぼと海人の父子の網をさげてゆく
○　三重縣　川原みさを
森陰は黄昏早し我が家の垣にひらきぬ夕顔の花
○　大和　岡本はま子
物思ひひたすら人の晴れやらぬ心のうちをおもふばかりに
○　伊豫　福井白百合
いとゞ我につれなかりける戀人のかへるが如く飛び行く螢
○　神戸市　近野ただ
春の海海の女神よ百合をもてみ髪を飾りいてて來給へ
○　下野　黒須輝子
青葉山夕越え來れば時鳥ここだに鳴きて椎の花ちる
○　千葉縣　今井なを子
わが胸のやまとなでしこめかれては君をうらみぬ小雨ふる夜
○　西多摩　岸野靜江

野に立ちて君の姿を思ふ時雲の峰さへ崩れけるかな
○　宮古町　熊谷文子
田の畔に立ちて眺むる遠近や暮れ行く空を暗く杜鵑
○　安房　川名すみ子
うらぶれの身を川のべによこたへて流るゝ螢のゆくへみまもる
○　茨城縣　貝塚峯子
われはたゞ空のあなたに憧れぬ春は暮れど花は匂へど
○　京都市　大井順子
幾萬の亡者の群の一時に呻くに似たる潮の響
○　南葛飾　松　操子
戸をおせば花たちばなの香りしてきよらに明けぬ初夏の朝
○　美濃　傍島敏子
長良川かじかなくなる夕月夜橋の上にて風をよろこぶ
○　茨城縣　靜子
濱の上照る月かげをはたつみのかさしの玉のちるかとぞみる
○　美濃　傍島敏子
君が家に通ふ小路は草も木も花を飾りて吾れを迎へぬ
○　下野　三浦梅香
何所よりか笛の音もするたそがれはものをおもふにふさはしきかな
○　東葛飾　横井春子
春ゆく日鐘樓に登り鐘うてば遲櫻散る寺のきざはし
○　埼玉縣　會川千代子
しげ山の木の間に出てし月かげをうつしてすずし山の井の水
○　長崎市　天ケ瀬さだ子
幸うすき我身あはれむ人あらばまづたびたまへやはらかき手を
○　常陸　高木濱子
別れ行く君の姿の見へずなりて山の峰の上に月仄めきぬ
○　紀伊　鷹木蒼生子
生垣の中に琴の音すみわたる白萩くづれ月細ふして
○　京都市　柳川英子
森かげの蘭の香含み朝風は池の藻の花ゆるがして來る

和歌

○　神戸市　小谷たま子

我が乳の乳頭ほどの無花果に小雨そぼふるなつかしきかな

○　神田　森川壽賀子

宵月夜すだれかゝげてさやかに歌よみ給ふ君なつかしき

○　周防　貞子

風吹く日友のみ墓に詣でむと草むら中を辿り行くなり

○　大阪　鎌田春枝

鐘の音の響く方より暮れそめてあなたに火影ほのめく

○　失名

戀しさに立ちいでて見れど君はなし垂穂の稲に秋風ぞ吹く

○　名古屋　横地寛子

廬の戸を深く閉して幽暗の神ぞ淵なる夕暮の森

○　神戸市　みなしご

亡き人の靈魂や宿りてうつくしくここに咲きけむコスモスの花

○　南總　齋藤秀子

君のふく尺八の音は秋の夜をあまねくてらす望月に似る

○　滋賀　朝緑子

夕煙たちてのぼりて天雲となるにやあらむ山の家より

○　島根縣　胡蝶

星一つ東の空に消え行けば山の端あかく塔の影見ゆ

○　相模　柏原美奈子

千萬の星爛として初秋の空新しく風たかく吹く

○　福井縣　吉田梅子

星一つまたゝきつかれふと我の瞳と合ひぬさびしき夜かな

○　大阪　新家順子

古里はいとど淋しく雨降りぬ隣の友は琴を彈けども

○　大阪市　沖野英子

湖ぞひの青葉茂れる木の下に歌詠じて居ぬ初夏の風

○　大阪　梅村愛子

むらさきの羅きたる美き人の思にしづむ面やつれかな

○　府下　町田たけ子

夕月のかげほの白き谷川にかほりたゞよふ山百合の花

○　上總　峯島星華子

夕雲は三日月のせてたゞよひぬひと山白き百合の香の上

○　上毛　岩田やす子

思ふことつひに語らであなあはれむなしく月日過す悲しさ

○　芝　たみ子

我が君よ君は露なく野べの花胡蝶となりてわれおとなはむ

○　相模　山本ひろ子

神祭る大鼓の音は夕ぐれの霧をぬいつゝひびき來りぬ

○　遠州　井口増子

水車絶えず踊りぬ花に舞ふ胡蝶もねむるながき夏の日

○　近江　梅女

寂寥の住むといふなる山の奥の木の間に鳴きぬ山時鳥

○　姫路市　坂田かな子

風涼しつとたちよれば百合の花我にかをりぬなつかしき香に

○　京都　北村はな

祇園會や金屏はゆる奥どのにいこはせ給ふおん稚兒の君

○　香川縣　神津あき子

奇しき夜半おほわだつみのふところに星一ついりわれは生れぬ

○　福岡市　兒島八重子

のきはなる籠にかはるる螢の子いざ水かはんひさごもてこよ

○　豐後　菅原芳子

紫の桔梗の花の露の色さきぬ朝の初秋の庭

○　大阪市　大江花江

秋ふけて小雨そぼふる夕まぐれ蟲泣く兄の御墓のほとり

○　赤阪　西戸政江子

白やいな紅やあらんと爭ひし朝顔咲けど君はいまさず

○　南豐　藤の家瑠璃子

慕はしの君をしぞ思ふ夕まぐれ秋にさむき初秋の風

○　下總　津梶川しん子

紫の色濃く茂げる芋の葉の上に置きたる白露の玉

○ 千葉縣 金子夢見る子

霙ゆきて拾ひし貝を海知らぬ妹にとて送りやるかな

○ 下總 戸倉ふか子

胸の海ふかくかくせる大火山爆音を聞く日をおそれ泣く

○ 伊豆 加藤爲子

野にあひし雉見失しく見えければつみし撫子わかちやるかな

虫の聲 下野 黒須菊子

狂はしき思ひに堪へて野に立てばあまりかなしき虫の聲かな

○ 豊後 田原秀

夕まぐれ稲田の上を吹く風は玉を散らしぬわが足もとに

○ 常陸 村野春子

黄昏れや秋の野末に君と居て夕焼雲をたたへけるかな

○ 茨城縣 宮本楓子

夏の雲空も汗ばむ眞晝時人は眠りぬ山下かげに

○ 茨城縣 國華子

罪と云ふやあらずといふや我が戀は花に露おくそのごときもの

○ 水戸 更月

わだの原波路はるかに行く舟の帆影は霧に見えかくれして

○ 若狭 瀧本なみ子

春姫のかづきたまへるうすもののそれかあらじか霞して

○ 陸前 谷間百合子

君ならで誰をか待たむ我が心語らふ日より戀しきはなし

○ 相模 鍋田美代子

我夢は遂に破れぬ大空に群がる雲の消えてゆく如

○ 神奈川縣 岩澤玉江



胡蝶蘭　（鼓子寫）

ほろほろと山へ詣づる逕路の小笠に散りぬ銀杏の黄葉

○ 埼玉縣 尾花子

あまりにも靜けき夜半とまどおせば光りつと入る秋の夜の月

○ 本所區 橋田倭文

雨あがり片破月の花やかににほへる空うつくしきかな

○ 沼津 渡邊とよを

夢に見し天の使の住むらしき百合花さきにほふ谷にきたりぬ

○ 青森縣 馬場ちよ子

果ても無き大野が原の夕暮を二人たどりぬ物がたりして

○ 備後 澄江

露しげき道の小草を分け行けば枝もたわわに萩の花咲く

○ 上總 松崎かつ子

こは夢かあらずまぼろし目をとぢて見るは美しあけぼののそら

○ 新潟縣 靜江子

夕風の來てはたゞよふ庭芒そのかげにしも虫は死ぬらむ

○ 若狭 柿本房子

蟬のなく森下影にをさな子はうたうたひつゝ遊びくらしぬ

○ 若狭 前川蝶夢子

佐保姫の裳裾のはしやふれにけむ庭の緋牡丹風なきに散る

○ 岐阜縣 日野歌子

秋の姫舞ふとおもひぬ七草の花さく野邊を秋風吹けば

○ 三河 天野清子

秋の月すみ渡りたる砂原をさまよふ少女かなしき少女

○ 常陸 大久保てる子

夏野ゆく土人の群におぼろ／＼霧たち罩ぬ太古のさまに

○　横濱　千秋子
我心夢より夢をただよひてたゞいたづらに人の戀しき
○　隱岐　文世子
朝日和漕ぎいづる舟のあなたこなたしろがれの魚いしく飛ぶかな
○　佐渡　谷川桂月子
花かざす島の少女がゝろ惑をうすき衣をなぶる春風
○　上毛　富代子
秋の風暗くつめたき岩むろの口に香れる白百合の花
○　岡山縣　奥山千代野
幼な子らあやうく垣に寄りそひて朝顔一つ二つ三つ摘む
○　能登　且田曉風
吾が庭をめでに來たまへ小さけれど白き萩さき鈴虫のなく
○　福井縣　池上小芳
彩雲の匂ふ夕や白き帆のほのかに走しる青海の國
○　越後國　草女
うるはしき天つ御空のはなぞのに香をかぐこゝち君とかたれば
○　大阪市　山内溪子
月を見てもの語りつつ君とわれ萩と萩との中の道ゆく
○　德島縣　吉田紫花
華やかに笑めどかた頬にいつもいつもいつも寂しき影のひそむ君かな
○　石見　八杉都志子
大闇の中に眞白き花一つ咲くと見しとき君はきましぬ
○　信濃　駒澤ひろ子
くれないに黄に紫にいろどりて畫をかく君の樂しきかな
○　信濃　山越悅子
野の家や夕餉つくるとわらな焚く烟のすゑに蝙蝠のとぶ
○　靜岡市　杉山潤子
繭あまたとり散らしたる六疊に狼藉するなり故郷にきて
○　茨城縣　橋本小春
まど押せば紫匂ふ筑波山峯よりおくる風の涼しさ
○　伊勢　大原しづ子

一道の光明もあらず哀愁の波ひた〳〵に寄するなる胸
○　安藤　谷関の白梅
そよ風の吹く畔道を一人行けばおりし昔ぞ偲ばれにける
○　東京　高田秀子
渺か浦磯吹く風に波の花ちりこそまされ月の清きに
○　福井市　手塚けい子
くれないの日を浴みて我たてば犬も馴れ來ぬ野分の夕
○　上總　山口芳子
父母と別れて遠し海のはて雲よ朝夕のおもかげにさけ
○　土佐　高橋白ばら
むらさきの朝の女神の霧の宮もやこもりたる白蓮の花
○　鹿兒島市　山下敏枝
秋風のかなしき今宵死ぬ蝶のありやと思ひ野に立つ夕
○　信濃　太田喜志子
手枕や神をはなれてわが心人戀ふべくなりにけるかな
○　宇都宮市　新井みよ子
我物と誇りて見たき心地するほのかにうかぶ夏の遠山
○　鳥取縣　桑本きま子
我胸に君のなき日は寂寥のしらべと聞きぬ春の夜の雨
○　福岡縣　建部夏久子
夕立に水かさまさりし池の面にいとどうるはし紅蓮白蓮
○　下野　栗原くに子
わかき血の冷えまさり行く刻々を嘲る如く鳴る時計かな
○　府下　森田しま子
露おける萩の茂りを分け行けば羽弱の蝶のひら〳〵とぶ
○　伊豫　曉子
わが誇り色も香りも君故に老にとられし花をあはれめ
○　松江市　高城夏子
とく起きてみ親のしろの水くみぬ梅吉山の霧白き朝
○　廣島　君子
露姫のみめぐみ深く朝顔の色様々に咲き出でしかな

短篇小説

小栗風葉先生選



◎規定　純潔清新なる短篇小説を望む、凡て擬假名つき二十四字詰八十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

天

○惡魔

田中久子

秋だつた。どんよりとうす曇りのした朝、私は又姉様のお家へ行くと姉様はうす暗い茶の間で友染もの、長繻袢を縫ひ直してゐらしつた。障子が五寸許りあいてゐて椽側には田口さんが腰掛けてゐらつしやる。「まあ久濶ねえ、田口さんは此節ちつとも私ン所へは遊びにゐらしつちや下さらないのね」と姿を見るより行成聲をかけると、田口さんは慌てたやうにポケットへ手を突き込んで「なあに、きいちやんが虐めるからさ、此通り逢へば直もう」と姉様の方へ向き「ねえ玉枝さん此通りなんだから」と云つてハヽヽヽと例の快活な調子でわらつた。「うそばつかり被仰るわ、ねえ姉様」姉様は夫てもだまり込むでゐらつしやる。「僕はもうお暇だ、菊ちやんが來たから逃げ出すんだハヽヽヽ」とそは〳〵立つて呆れてゐる間にさつさと歸り仕度をなさる、姉様のあとから玄關へ出て行つた時にはもうお姿が見えなかつた。

今日は姉様はなぜか何日のやうに餘り口をお利きなさらない。「姉様どうかなすつて?」椽に腰かけて足元へ散つて來る銀杏の葉を拾つては裂き、裂いては捨て乍ら硝子からそつと伺うと「いゝえ」と許りで其儘に裁縫を膝へ置いてぼんやりと空を見詰めてゐらつしやる、私もだまつて了つた。平日なら一言私が云へば姉様は直もう十言もお話なさるに、と思ひ乍らちよいちよい顔色をうかゞふと時々詰らなさゝうにそつと吐息を吐いてゐらつしやる容子だ。餘り淋しいので「兄様は?」と伺ふと「兄様はもう柴田様のお集りがあつてゐらしつてよ」「さう、さう云へば姉様、明晩の婦人會には是非ゐらつしやいね、此前にも姉様は入被らないんですもの」「えゝ行かれたら」と矢張り氣の無い返事、以前は集會さへあればすぐとう飛で行つてやつたのにと思ふと何だか此頃の姉様の態度が私には受取ない。

其内兄様が歸つて入被つた。お髯の多いこわい顔の方だけれどもお心はやさしい。夙から父さんの敎會へ

求てゐらしつたので私等は十位の時分から知つてゐる以前から菊ちやん〳〵と云つては可愛がつて下すつた。其代り不だんは無闇と眞面目な方である。

「柴田の奧樣がね、なぜお汝に來て下さらないんだなんて云つてなすつたよ、今日は非常な盛會だつた」「さうでしたか」と云つて姉樣は鏝の燒加減を見て入被る、「何だそれは、菊ちやんのか」と派手な友染を見て被仰つた、「いゝえ」と云たぎり姉樣は素氣ない。私は此麼風な姉樣を見た事は無かつた。小さい時から父樣にも母樣にも敎へられてみ旨に適ふやうないゝ人になると、彼麼に二人て誓つた



のにと思ふと何だか姉樣が腹立たしく思はれて、私は其日直に家へ歸つて了つた、そして獨て散々考へて淚のこぼれる程お祈りをした。

夫から六日許りたつての晚に又行くと姉樣はひとりて椽の柱に靠れて聖書を讀むでゐらしつた。吃驚してあはてた樣に開いてた所をピタンと伏せて「菊ちやんにまで捨てられちまつてね」と何とも云へない淋しい顏でお笑ひなすつた、「あら姉樣ひどいわ、父樣が長野の傳道會へゐらしつたお留守番ぢやありませんか」「さうだつたね、ぢや勘忍よ」と云つてそれからしんみり「菊ちやん、お母樣はお偉らかつたと思ふわ」と聖書の上へひつたり手をのせて被仰

る。私はなぜか母樣の事を云はれると直もう悲しくなるのでだまつてゐると「どんなに滿足してお亡く成なすつたんだらう、ほんとに私なんぞは……」と云つて吐息を吐いて聖書をポンとランプのある方へお投げなすつた、吃驚して顏を上げると姉樣は兩手で顏を抑へて入被る、ハラ〳〵しながら私はだまつて俯向いてゐた。

姉樣の御病氣は此頃からであつた。病院へは私が每日行くといつも手擦れのした聖書をしつかり握つたまま眠つてゐらつしやるので、目をあけばさつと「菊ちやん、姉さんは馬鹿よ、ホヽ自分のまはりの糸を皆切つちまつたの、だけど鋏を呉れたから切る氣にも成つたんだわね、其鋏を呉れた人、其人は奈良へ……奈良へ……」ともう終ひには夢中に成つてお了ひなさる、姉樣、しつかりして頂戴よ」といつももう淚聲に成つて私が云ふと「あいよあいよ、夫でもね、其糸が、まはりの糸が苦しかつたから、それでつひ切つたの、勘忍をし、お汝とも離れるんだ、お母樣とも……」と了ひには泣き出して了ふ。

いよ〳〵いけなからうといふ晩、病室のドアを閉め切つて父樣も兄樣も私も心からのお祈りを捧げて、さあ姉樣の番になると姉樣は聲まで出して泣いてどうしてもお祈りなさらない。「父樣許して下さい」と許り、どうしても〳〵祈らなかつた。

* * * * * *

姉樣の大切にしてゐらしつた聖書は今私の手に大切にしまつてある。姉樣の秘密はすつかり此聖書に依つて知られたのであつた。

上や下や餘白へ鉛筆で書いた細い文字、夫はたしかに三月迄敎會員であつた田口さんの筆蹟であつた、田口さんは快活なよく話す面白い畫家だけれど私も惡魔だと思つてゐる。姉樣が御病氣に成る前から奈良へ行つて今ではふつつりとも便りがない。

（評）技巧の圓熟したる事、名ある作家の作と比べても恐らく遜色無からう。精緻なる描寫と氣の利きたる言葉と相待つて全篇が緊張してゐる。人物も個性とまでは行かぬが、兎に角其人が見えるやうで、讀む者をホロリとさせる。田口の惡魔は露骨に過ぐ

人　○かへり路

麻布區霞町廿三　森　とよ子

私は每日神田の女學校に通ふので、何時でも電車の便を借りる。今日も小川町から靑山行きに乘り換へた時には、滿員といふ程でも無いが大分混雜して居た。

それでも女と見ると直ぐ席を讓つて與れるもので、私の這入つて行くのを見ると、今も入口に近く腰を掛けて居た。二十六七の洋服を着て居る人が立つた。

私は會釋して腰を下さうとすると、私の後ろに孫らしい五つ六つの男の子の手を引いてる爺さんの居るのに氣がついた。五十四五だらうが、年の割合に弱り方が激しい。身長は私よりも低かつた。

「あなた。お掛け遊ばせ。」

と恁う言ひながら私は爺さんの顏を能く見ると、何處か見覺えのあるやうな氣がする。爺さんは嬉し相に禮を言つて腰を下した。

釣革にぶら下りながら私は種々想像して見た。そしてやつと彼の人だなと氣がついた。

最早六七年以前にもならうか、私が未だ小學校の高等科になりたての時分、能く受持だつた安藤先生の家に遊びに行つた。田舍によく有る小學校の先生然とした人で、奥さんには既に死に別れたとかで兄さんと一緒に同居して居られた。今眼の前に居る爺さんが即ち安藤先生の兄さんだと思ひついたのだ。

爺さんと言つてもその頃は未だ四十八九で先生よりは二つか三つ上。矢張り先生と同じ樣にも一つの小學校の——私の田舍には二つ小學校があつたので——敎師をして居られた。その頃十六七の奇麗な娘が居たから、今手を引かれてる孫らしいのはその娘の子であらう。能く記憶に殘つては居ないが奥さんは病身で始終寢て居たやうだつた。

私が友達と「先生！」と言ひながら、勝手を知つて居るので裏から這入つて庭に面した六疊の先生の居間の所に行くと、何時でもその娘さんが出て來て、「まあよく入らつしたはね。」と優しく美しく微笑む。何んだか懷しくて慕はしくて、私達は姉さんのやうな氣がして居た。やがて先生が出て來られる。兄さんも出て來られる。奥では輕い咳が聞えて來る。恁う思ふと何んとなく懷しくなつて堪らぬ程になつたが、若し違ふと不可いと思ふので、言葉をかけるのは止した。

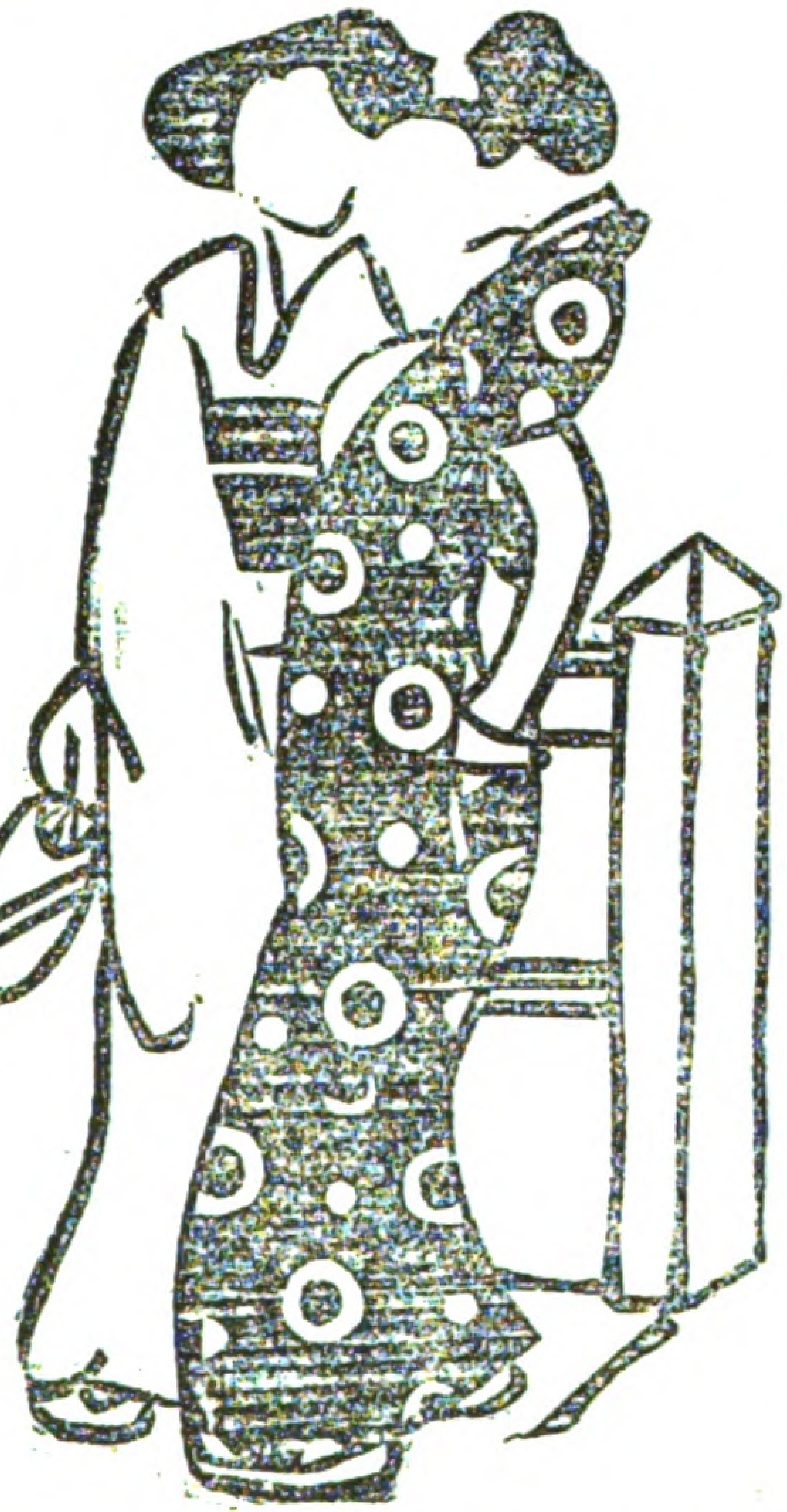
併し恁んなに老ぼれなさつたかと思ふと、譬へ同じ人でもあの時分の先生の兄さんと、今の此の爺さんとは別の人のやうな氣がする。私などは昔の未だ少しはお若かつた時代を知つて居るから其樣事はないが、全然知らない人の眼からは、これでも昔は若い時分があつたのかと思ふやうな、しなび爺さんに見えるに相違ない。私は人の老い行く樣を考へて寂しい氣がした。

「せい坊、もつと此方にお寄りよ。」

先生の兄さん――爺さん――はさも可愛くてならぬやうに孫の肩に手をかけて、自分の方に引きよせられた。

先生も先生の兄さんも、極く活氣のある方ではなかつたけれども、何方かと言へば未だ先生の方がお若い丈けに幾らか元氣があつた。お二人てよく碁を打たれる。その時は遊びに行つてる私達に見向きもなされないので、仕方なしに娘さんと遊ぶ。先生と先生の兄さんと何方が碁がお上手なんだか其樣事は知らなかつた。併し何時行つても奥さんの咳は絶えなかつた。

恁うして見ると、先生も隨分最早年を取られたらう。今遇つて私を存知て居られるかしら。先生の兄さんの娘さんも最早二十四五、お子さんは未だ一人だらうか。咳をされて居た奥さんは亡くなられたかも知れない。



夕すゞみ　松山市　若葉

何だか頭が妙になつて來た。

丁度その時電車が搖れたので、私は前にのめつて、爺さん――否安藤先生の兄さんの足を踏んだ。

「御免遊ばせ。」

「いゑ、どう致しまして。」

平氣な顏して笑はれた。

私は又何か話しかけやうと思つたが矢張り止めた。

三宅坂に來た時に先生の兄さんは降りた。降りしなに私の方を向いて、

「難有ふございました。」と言つて出て行かれた。後姿など見すぼらしい程瘠せて居る。

私はその後に腰を下しながら、

「隨分お變りになつた。」と呟いた。そして再び人の老行く有樣を考へて淋しい悲しい思ひに心は滿された。

（評）是も寫生文式の作だ、小説としては少々飽氣無い。けれど其追想を描くあたり、文章に無駄が無く、何所までも素直な筆て厭味が無い。

秀逸

○驛夫

井上笹波

混合列車の下り五番が○○驛に着くと暫くは物鳴りも聞へなかつた。大きな菰包其他五六箇の荷物を荷車から下すのを覺束ない手付で受取つた山田速夫は箱車へ不格好にのせ終ると車上の驛夫が「終りッハヽヽ、妙に沈んでござるね」後は何かの地口でごま化して車内へ身を隱すが早いか鼻歌交りで次の驛に下すのを整頓し初めた。速夫は聞へないのかニヤリともせず上のぐらぐらする車を引いて少し羞み乍ら倉庫の入口で止めた。夫れも其の筈○○驛の見習驛夫として出勤し初めてから漸く今日で六日目だもの。昨日頃から客車の前で顏を赤める事も少くなつた。

帶革で締めた新しい行李を無意識に擔ぎ上げて中へ積み込もうとすると後から「オイ君、其の札を見給へ、そりや直ぐに渡すんぢやないかね、もう少し氣を付けて呉れなくちや困る」これで三度目だ。額に青い筋は立つたが目先に發車の合圖の旗を見て一瞥を殘したのみ靴音高く助役は立去つた。速夫は明瞭した答が出ない形容のできない顏付で擔いだ其のまゝ小走りに取扱所へ渡して來た。

未だ何か用がありさうだ。二三度頭をふつて見たが次の列車迄別に成る事はない。少し上り坂の悽い火炎を吐いた列車の餘韻はどうかすると風並で聞えるが構内は寂として所謂嵐の後と云つたやうだ。驛夫の仲間は向側の椅子に腰を下して猥りがましい女の話をしてさざめいて居たがそれも硝子戸へ映つた驛長の姿にパッタリ止んで止舞つた。

其人柄を知らない者は眼の色を見て第一不快の念を起す。どんな細かな微かなものでも腦理に運ばなければと云つた——然し疑惑に富んだ——目を力なく足下に落した速夫は倉庫の壁際に積んである炭俵の格好なのを見付けていらぬ物でも投げ出す樣にどつさり腰をかけた。其拍子にフト自分の洋服の胸を見た。先代から渡された油光りのする小倉服に今更氣付いたてはないが不快げに眉をひそめて向ふの青い山を見た。臀の下へ一寸手をやつたのは洋袴の切れ目へ炭の角が當つたからである。深翠の間へ點々たる白百合の配合が好きなんだ。けれど物の色彩——自然の風美——そんなものは眼に入らない。力のある先刻の助役の聲。出勤

し初めた日に驛長が一勤め人が澤山あるが其中で成るべく良いのを撰ぶ方針を取るのが私の主義なんだから其處をのみ込んでシッカリやつて呉れ給へ」と明瞭云つた顏色。夫等に何の解決をつけるでもないが不安の念は甚だしく頭を壓迫する。當方から先んじて身の窮狀を驛長に訴へて見やうかと思つても同僚にでも見られた後の羞恥は矢張りだめだ。何がなしにイラ／＼する心の隙から何處となくしまりのない――別て此頃は一層見惡くなつたぶざまな身重の妻の姿が目の前にちらつく。心の底の叫びに「俺もこの仕事でなくちや飯が食へんと云ふぢやあるまい、馬鹿々々しい日給三十五錢位でたまる事あない。よしッ今直ぐ辭表を出して同僚にも吃驚させてやらう男子はこの位の意氣がなくつちや」と帽子をアミダに被り直した。フト廢學する前の中學二年の春を思ひ出した「あゝ弱い／＼」と獨語いて空を見た一面に靑い上へ薄赤い雲がたゞよつて居る。「あの頃はこんな油服を着てホツテントツトみたやうな女房を持たうとは思はなかつた……今からだつて遲くはない四十四で大學を出た人もある俺はまだ二十七だ、これから豪くなつて今迄後指をさした人に鼻をあかせてやらなくちやあ」心臟がおどつて妙に血が逆流して來た。然し肝要の學費がない――苦學――遠からず生れる子と妻とをどうする。

「俺も今少し豪くなつてお前にも樂をさせてやりたい」と云へば「イヽエ、貴夫好い加減でいゝわ、貴夫がずつと出世なされば私みたいな者は御氣に入らなくなるから……」己が權威を振ふ上に於ての唯一の服從者――妻の殊勝な言葉をきいた或夜の事を思出して微笑した。速夫は三四年前試驗を受けて首尾よく劍を下げる身となつた×村の駐在所在勤を命ぜられて赴任したが山村に似合ぬ風儀の惡い所で靑年の間には博奕が流行る小窃盜が行はれる。其等の輩からは良い巡査樣など云はれるだけ警察側の受けが惡く一年計りの間に三度轉任したが遂に何かの理由の下に免の字となつた。元より不正の事があつたではないが自ら其の理由を正すこともしなかつた。巡査になる前一寸關係した女を柄にもない男氣を出して「ウン俺が妻にしてやる」と夜に乘じて連れ出したのが今の妻である。其の妻の義兄の世話で今度當驛へ勤める事になつたのだ。

空はいつか雨催ひになつて濕り氣の多い風がサッと速夫の襟元をかすめた。目前の柱にはもう電燈がついて居る。年若の水野と云ふのが洋袴のかくしへ手を入れ

て妙に體をゆすり乍ら
「オイ山田君、もうシグナルが下つたぜ」
山田は重い身を起して倉庫の入口に立つた
「水野樣、明晩の夜勤は私の番てしたね！」
（評）觀察描寫共に無難の作て、筆もシッカリしてゐる、無論男の筆だらう。從波と云ふ號以外、實名の方にもます子と云ふ女名前が用ゐてある。男なら何故正直に男の名て寄來さぬのだらう、態々女名前を用ゐる作者の心事を卑しむ

○お婆樣

伊藤芳枝子

姉樣が結び了へた帶を後ろてポンと一つ叩く時、私はふつと目が覺めた。新らしい蚊帳ごしに、くつきりした白い顏、お納戸色の明石の着物に胸高に帶をしめた姿が夢の樣に透いて見える、座敷の窓の障子が一枚開けてあるので、城山や堤が茫然と朝霧に霞んて、空が淡紅に染まつて居ると見える。
姉樣はこれから、琴の稽古に行く所だ「姉樣お早いのねえ、どうも感心！」と寢たまゝ顏を見守つて云ふと、急がし想に帶しめをカチャンと止めて、「えゝ、もうお前もお起きなさい、日が出るよ」机の上の白いハンカチーフを手早く疊んて、懷ろに押し込み乍ら「明日は七夕樣だから早く起きて、表そふかないと、きつとお隣りのお婆樣が何とかかんとか云ふだらうから、ホ、、、」と寂しく笑つた、私も笑つた、
「毎朝々々あんなにブラ〳〵と何處へ行くんだらうなどと思つてるに違ひ無い」「そうよ、姉樣きつと何とか厭に思つて居てよ」
爪箱と帛紗に包んだ花守日記とを持つて、無言つて襖を閉てゝ行つてしまつた。
早障子にはウッスラと格子の影がうつつて居る、お隣りの勝手からは下駄の音が急がし想「葉！早く起きんか、漬物でも出さないか」とお婆樣の錆び聲、お婆樣は今年五十いくつ白髮はその大半を占めて居る、夫には若い時死に別れて、女手一つて育てたのが今のお葉と醫者の內へ書生になつてる息子の廣次、お葉は今年廿三てある、今は二人とも仕立物をして奇麗にして居るが、お葉が小さい時は困りきつて、煙草專賣局の女工にも出したとか。
姉樣が廿才にもなつて勉强してるのが氣に食はないお婆樣は、「大きいお孃樣に學校を止めさせて、手傳つて貰つたら、如何なに安氣てせうものを」と母樣に話してそのしまひはいつも「如何な宜いお內ても此の頃は賃仕事をせない內は無い位ひなんてすからねえ」と笑

つて居るが、心ではきつと母樣を意氣地のない女だと思つてるに違ひない。
苦しくなつて寢返り打つと「早く持つて來んかい、葉!」とお婆樣のせき立てる聲がして、未だコッコッとお葉は漬物を刻んで居るらしい。

點燈夫　愛知縣　八重子

（評）今年十七才の人にして、小說と云ふものは是が始めての試作だと云ふお斷り付き。それにしては比較的好く出來てゐる。無論未だ幼稚の二字は免かれぬけれど、觀察の正しいのが頼もし

○墓參　草村瑩子

暗らい佛間から母のお貞が出て來た。お佛壇には細い燈明が明つてゐた。お咲は次の間て、新らしくこしらへた帯を念入れて締めてゐた。



「早くおしよ――不斷着ても好いんだに」
お貞は勝手の方へゆく。勝手では嫂がお團子を拵らへてゐた。お咲は母の言葉をきくと、ぶつくさと何か口の中で云つてゐたが、自棄氣味に帯を解いて了つて、また結びかへる。
そしてやつと仕度の出來たころ、お貞が手を拭きふき勝手から這入つて來た。お貞は、立派に着かざつたお咲を見ると、チッと眉をひそめたが、仕方がないと云つたやうに、背後へまはつて襟などなほしてやる。
お咲も眉をひそめてゐた――今朝早や一度、母子は口

論つた。

お貞は不斷着物だつて好い位ゐだからと云ふし、お咲は出來るだけ好いものを着てゆかうとした。

墓所は今住んでゐる町から半里ばかりの町にあつた。その町は以前、お貞等が榮燿に日を送つた町である。失敗して今の町に來てからは、お貞は昔の榮華と今の零落とを思ひくらべてはづかしく思つた。墓參も目立たぬやうにしようとした。けれどお咲は、昔、自分らの親達の富裕に暮らした町へゆくのを、非常に誇りと思つた。町の人に出來るだけ見せつけてやりたかつたのであつた。

町を出ると、かすかな埃の立つ中を、裾をかゝげてせかせかと歩るいた。稻の花はもうすんで、空はよく晴れた。黄葉した櫨の木で百舌鳥がせわしく鳴く。黍畑に鳴子がたれて、道ばたには野菊など咲いた。からからと晴れてゐた。

燈は寺に頼んだし、花筒も昨日寺までとゞけてある、小僧には手土産の包をもたせてゐた。

ゆく／＼お咲は、よく母から聞かされた昔のことを思つた。北海廻りの大きい船が幾艘もあつたことや、それの出るとき歸つたときの賑ひや、幾つも立つてゐた大きな倉のことや、廣い屋敷や、お盆には町中の人々を呼んで馳走をしたと云ふことや、それらがどんなに誇りに感じられたか知れぬ。町の人は今も、あの時分のことを忘れないでゐるだらうかと思つた。

町へ近くなるにつれて、見知つた人々は昔叮嚀に母にお辭儀をして行つた。お貞はそれがどんなに恥かしく辛らかつたか知れぬ。お咲はすましてゐた。偶に禮をしないでゆき過ぎるものがあると、自分の忘れられてゆくと云ふことが哀しくもあつたけれど、むしろ安心なやうに思はれた。

お咲は町中を通らうと云つた、がお貞は無理に遠いのにも拘はらず、小さい濱ばたの裏道を行つた。

秋蟬の鳴く松林に入つて大きな法念寺の門をくゞつた

お住寺は昔からのその人で、面白い話好きの人だつた

お茶をのみながら昔話をした。殊にお寺の話が多かつた。

お盆には町から寺までの間、幾百張の提灯が、みな油屋様一家でつけて下さツたことの、寺の庭でする盆踊りの娘ッ子に、みんな揃の手拭を下さつたことの、はては秋參だけのお布施が米一斗になつてゐたことの、法事の馳走が何々だつたことまで、はてしなく話し合

つて笑つた。お咲は默つて聞いてゐたが一言も云はなかつた。お貞は昔話がいかにもなつかしかつた。自分を忘れないで呉れる人と、得意であつた昔話をするのがうれしかつた。お咲のうれしさはまた異つてゐた。どうして今もそんなでゐないことか、どうして失敗などしたらう、どうにかなつたどらうにと思つた。町の人々の噂も出た。誰もまだあのやうな大きなお屋敷に住めるものはないと云つたのが、お貞にはせめてもの慰めだつた。お咲は自分の肩身のせばめられないことを思つた。誇りだつた。

やがて花もいかつたから墓男が云つて來たので、和尚と三人墓地へ出た。

一段高く石崖をついて、低い塀をめぐらした、定紋のついた扉の、立派な自分の家の菩提所を見たとき、お咲はいかにも誇りかに感じた。

（評） 一時全盛を極めし人の零落したる心持が能く出てゐる。親と子の心持の違つてゐるのも面白い、之も簡明にして整つてゐる、今少し複雑な材を取つて書いて貰ひたい。

○火鉢

伊賀 伏見貞子

少し歇むで居た風が、また夕方から一しきり烈しくなつて、チラ、、と白いものさへ誘ふて來た。

炬燵に、もぐり込んで居ても妙にゾク、、寒氣がする嘉吉は、蒲團を撥ねて起き上つて、トロンと醉つた眼を据ゑて、黒く煤ぼつた雨洩りの汚點のある天井や、暦や引札を貼り交ぜた汚ない壁や、それから、處々猫の爪の痕のある破れた押入れの襖等を、凝と、睨め廻した、そうして、フ――と酒臭い吐息を吐く。

勝手の方で、妻が夕飯の、後片附けをしてるのであう、ゴト、、皿や小鉢の觸れる音がしてゐる、それが何となく、佗しく響いて來る。

嘉吉は、頭を兩手に抱えて蒲團の上に俯伏した。渠の醉つて、コンガラガツた、頭にも、もう二三日の間に假差押への執行を、受けねばならぬと、定つた其日の苦痛を、どうして平氣で思ひ浮べずに居られよう?。あの眼のギロ、、した苦い顏の、いつも鼠の中折れを被つた厭な、債權者と、薄汚ない洋服の、古つぼけた鞄のあの、執達吏とが横柄な面で遣つて來る事だらうそれから、喫驚して騒ぎ出す親父や妻の顏――店の物から疊に建具に……と思ひ出すと果てしもなく恐ろしく不安な思ひが、胸を襲つて來るのである。

「もう大變な事になつて來てるのだ、思ひ切つて、叔父に頼まう……叔父だつて、他の場合とは違ふから

キッと何とか口を開いて呉れるだらう、行う、行う、思ひ切つて行くとしやう……」と、グイと帶を締め直して起き上つた、頭が痛い、身躰がフラ／＼する。

一しきり風が烈しくなつた、ゴーと吹き付ける風が、木の枝を、雨戸へ擲き付けて、僅かな、障子の隙間から、粉雪が吹き込む、と仄暗い二分ランプの灯が、ゆらついて、油煙がドス黒う、ホヤに渦を捲いた。

嘉吉は、情なさうに顔をしかめた。それでも、帽子とトンビとを、小脇に抱えて、澁々店の間迄出て來た、だん／＼醉が醒めて來て、肩先から背中の方迄、ゾクゾクする、蒼い顔をしてペッタリ、火鉢の傍へ坐はつて了つた。

「貴方、何處へ入らつしやるのです？」中仕切の格子戸を半分開けて、そこから妻が顔を出してゐる、また飲みに行くのだらう！と云ふ意味がアリ／＼讀まれるのだ、嘉吉は背後の妻を振り返つて見た、急に眼の色を變えた、が、いつもの樣に、怒鳴らうともしないで其儘またグタリとする。

暫くしても、何とも、云はないので、妻は又勝手の方へすつ込んで了つた、

嘉吉は、暗い電燈の、隅々迄光の屆かぬ程の廣い店を見廻して、今更の樣に、疊表や蓆や柳行李や、菅笠等の商品を、山の樣に積んであつた今迄の、盛大に商賣をしてゐた頃の事を、思ひ浮べるのであつた。あゝそれが僅か二三年の間に、こうも寂れて來るものか、と澁々情無く感じるのだ。

しばらく凝固と首垂れてゐた渠は、思ひ出した樣に、立ち上つた。そうして勢よく、店の大戸を引き開けてぷいと出て行つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其晩もう二時を過ぎてから、渠は戻つて來た。勿論醉つてゐる、ヨロ／＼と店の大きな火鉢に凭れかゝつて火の氣の無い冷たい火鉢に、熱した頰を押し當てゝ、ホロ／＼大きな淚をこぼした。

外にはまだ風が烈しく吹いてゐる。

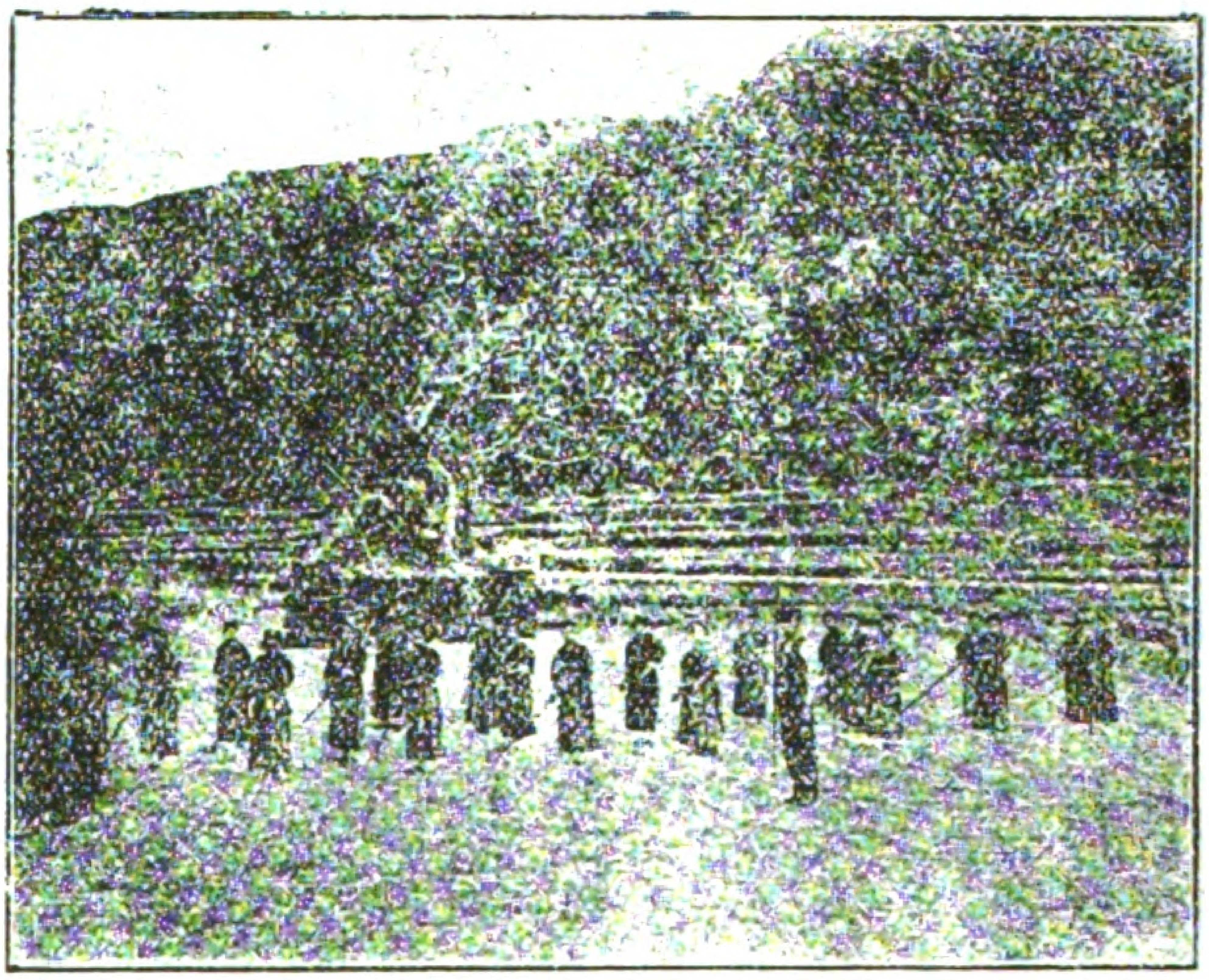
（評）書き方は黑つぽいものだが、何だか尻切蜻蛉の感がある。スメー以下に今少し何かありさうに思はれる。

○廢校　　麻おいと萩

「先生、先生」聲は一時止んだが更に窓近く、

「先生々々」と一齊に長く曳いて、坊主頭が陸續若楓の蔭へ集つた。校長と何か話して居た山岸訓導は、

「何ですか」と向直つて吸さしの巻煙草を捨てる。
「松崎さんは毛虫を付けるんです」二三人の聲が入亂れて言つたが、續いて何やら喧しく號く、山岸氏が立つて行くと、兒童等は優勢の味方を得た思で、一度に鯨波を上げた。吉井校長は水澤女教師と面を見交して淋しい笑を洩らしたのである。頓て思出た様に、
「何にしても兒童が可愛想です」と少し猫脊の身をひいて、眼を眠つた、白髭交りの髭も淋しい。
「殊に一年は眞の學校狎れた計ですのに……路は遠くなりますし」と水澤女史は教授案を兩手になぶつて居たが、天晴頭を惱して作つた案も細目も水の泡となつたのを思つては、何とも言はれぬ無念さが上衝げて來る。女史は實に眞弓尋常小學校が初めて迎へた女教師て、この四月に女子師範を卒業して赴任したのである、年齢は廿歳の上を一つ二つ出たが、眼は初々しい光に耀き、只すると十五六の少女としか見えぬ振幼ない振舞をする。女史が來られてから學校の空氣は一變した、今迄無かつた唱歌も科目に加へられ、遊戯も賑やかになる、女史が手なれのヴアイオリンを奏する時、山中の村は新らしい氣に溢れ、山のたゝずまゐ雲の往來も色添ふ心地がする、谷から谷を廻り、木暗に呼き魑魅を呼ぶ妙なる調には、無心の杣も斧の手をゆるべ、流に晒す少女も少頃胸を靜めて聞ほれるのであつた、峠に喘ぐ旅人の耳には、天人の樂とも響いたのてある。



龍南小學校の薙刀體操（岡山縣の女寄）

雨の日風の日女史の姿の見えるや否や、先づ起る朝の曲は今朝に限つて聞えなかつた、校長以下教員の眉は愁の雲に閉されて居る。
「水澤さん貴姉原町へ御轉任ださうですね」一番後れて出勤した前島といふ教師が話頭を向ける。女心のせめては形見にとの思であらう、水澤女師は生徒の清書や作文を選分けて居たが、

「ハイ」と上げた面には不安の影が見える。

「宜いてすなあ」と只理も無く言ふ、

「私少しも」と周章た樣に口籠つたが、左の臂を付いた儘、ほつれ毛をかいて蟀谷ををさへた。

年々の不作續きに加へて、去年の秋は猛烈な山燒に村の財產の何分といふ程を灰燼にして仕舞つた。天は尙是に飽足らずか、北牧川の雪解水は十數年に無い暴虐を逞し、橋梁を落し堤坡を破つて麥を浸し蔬菜を流して、田畑の多くを砂原と化したのである。村は遂に自治の力をさへ失ひ村會の解散と共に、我眞弓尋常小學校は同村內とは言へ、一里近く離れた新淵尋常高等小學校に合併される事に決し、吉井校長以下は旣に他へ轉任の辭令を受けて居る。

水澤女敎師は廊下傳へに受持の敎室へ這入り、一人亢然と敎壇に立つて見たが、言ひ知らぬ恐怖と悲哀とが滿身に湧いて來て、いつか袖を顏へ當て卓へ突伏して仕舞つた。少頃して赤くはれた眶を拭ひ、怖しい場所にても臨む如く昇降口の段に立つた。

庭の半ばを領して山際に接した花園は、小粉團麒麟草石竹等が咲亂れて居る、定めたともなく此處は女生徒の遊場なので、時折取鬼に追詰られた男の子が息せき切つて走り拔ける外、四邊は靜寂して、校僕が飼ふ鷄が花圃の砂を浴びて居る。竹に埒つた柵の下から屈み加減に少さな手を差延べては、紅紫の零れを拾ひ溜めて花輪を造つて居た女の兒は、敎師の姿を見るや掌の砂をはたいて一禮し、ポッと頰を紅くニッコリした今迄藤棚の蔭に石蹴遊をして居たのも氣付いて、

「先生、盲目鬼致しませう、先生々々」と云合した樣に敎師の許に走しる。

「御話して下さい先生、何日の樣に冠の中から色々お寶の出る面白い、」小ましやくれた下げ髮の兒が跳ねて敎師の手に釣下らぬ計りてある。

「さうねー」と沈んだ答をしたが「一寸拜借」と一人の子の蝶々髷から、紅い護謨の櫛を拔取つて、鳥の巢の樣に亂れた一人の髮をかきつけてやるのであつた。藤の若葉の影がさす故か、透通る程其面が蒼褪めて見えた。

眞弓尋常小學校の歷史の終は刻々に迫つて來る。振鈴が鳴り出した。

水澤女史は激しい胸の鼓動を抑へて立つた、取卷て居た兒童は其れ〴〵列を作り始める、生徒達には寢耳に水の廢校の告別式が今擧行されるのである。（をはり）

（評）文章の整つてゐるのを採る。趣向は恐らく作者の實際其まゝか書いたのだらう、是だけては一種の敍事文に過ぎない。

日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以内、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切毎月十五日、懸賞品は乙種規定に據る。

天　○日記

柴川戸崎町五番地　三宅恒子

五月廿四日。美しき光あびつゝ姉上の御荷物は出て行きぬ。御勝手に差圖せるばあやの聲さへ若やぎ、何處も幸あふるゝ樣かな。さはれ姉妹打寄り泣くも笑ふも今日限りと思ひては氣も沈みぬ。遊びに學びに何につけても只姉君達を便りまつりし身の、愚や睦しう手引き合ひて、とはに〳〵同じ道行くものとばかり、別れ參すべき日を思はざりしが。去年萩さく頃、大姉樣嫁き給ひて幼き我夢は破れぬ。一人へりし淋しさに馴れし今、小姉樣もとは。兄樣ふへし嬉しさと姉樣のみ幸福をおもはざるにあらねど、名殘の日と成りては寂しさに華かなる影は打消されつ。此三つきは取まぎれて姉樣と落ち付きて御話も成さゞりし樣思はれ、何やら申上げ殘しゝ如く物足らぬ心地す。姉樣奪はん時は容赦なく迫り來る恨めしさ。我手に止め得るものならば！「美しい御嫁樣で」——誰の聲にか？冥想より覺めて椽に出づれば、紅糴粟の露さらめきてルビーの如し。十疊に行く。御仕度終りし處。常よりは厚化粧の上氣遊ばされし面の、水や垂るゝと疑はるゝ御髮にはえて、更に白う——二尺八寸の袖重げに裾長う引き給ふを美しと飽ず見上げぬ。前に立ち後に廻り、御ばあ樣のお笑顏とけなん許り。車が——仲人の君也。夢見心に杯終へぬ。いよゝ浮世の荒海に船出し給ふ姉上のみ胸やいかならん。いざ御立——人々のぞめき、せめて左らばと別れまつらんと思へど、胸せまりてたゞ御手取りぬ。姉上も言なくて面伏せます。兩家の仲人、父母、君、淸と八臺の車は勢よく花嫁みんと集ふ人浪かき分け行く。今宵銀燭の下一しほ美しかるべき御姿浮べてほゝ笑みしも、歸るべき君ならずと氣づきては、得知らぬ涙ぞあふれぬる。嬉しき日、悲しき日、人問はゞ何れ答へん。

（評）才筆。

地　○おしろい日記

水戸市上市鷹匠町　千石さだえ

七月二十九日晴。黄やむらさきに、咲みだれたる、おしろいの花の下に蓆ろしきて、お隣の八重ちやん、繁ちやん、音もなう並び居ぬ、「おや面白そうね……お飯事？」「お花屋ごとね、つーちやん」と顔見合せて、莞爾、『姉ちやんお客ちやまでなきヤアいや』『はい〳〵てはお花頂戴』つゆ子は嬉しげに『どれをあげまちゆ』取り澄して云ふ、敎へられつゝ求むれば錢をとの事、石ころ拾ふて出せば、おつりなりとて小石二つばかり、おかしさにおもはず失笑しぬ。

八月七日曇り。午後妹たへ子と戸外に出づ、浮びけるまゝ琴爪を見る、あれやこれと、撰りて、中なるを求む、價六十八錢也、もゆる如き緋の爪皮、細き指にはめ、『恰度よいからこれにして』と笑む横顔一入いぢらし、又しても逝きし季妹を忍びて、熱き涙を押かくす苦しさ。

歸途、あてやかに裝へる婦人にすれちがひさまよき馨のするに、たへ子我が袖を引きて『姉さん藝者つてあんな人？』とて恐ろし氣なり。杓子も御園ならでは、すまぬとや、白粉を求むれば御園おしろいをいだして、これ今の流行なりといふ。

夜、暴風雨に雷さへ加はりていよゝ物凄し、よもすがらまくらの冷めたかりき、鐘聲五つ、あゝつゆ子も五歳なりしが。

八月八日晴。朝より南風强し、昨夜のあらしに、手向し花の色やあせたらんと氣遣はる。土にまみれし桐の落葉をふみつゝ、想出多き、おしろいの花を訪ひぬ、無慘!!! 咲匂ひし花は老朽ちてとび散り幹は折られて見る影だになし、この花の側へに莚しきのべて、樂しく遊びし日も淺きに今は早や、……なき人を偲ぶ思ひ草も、しほれんとするを……。

（評）佳。

【人】

○一日の日記

埼玉　幽香子

八月八日。朝早く髮結來る。あまりいつも束髮だから今日は、お島田にしてもらふ。また口惡の兄樣に、何とかいはれるかしら？前の碧梧桐て、みん〳〵蟬が、頻になく。裏の花園の檜扇が、よく咲いた。

こんな暑いのに殊勝らしく、お裁縫を始め樣とすると、「幽さんよく似合つたよ」と、萩戸を開けて、兄樣が入つて被來つた、「アラ嫌だわ」と、一方被ふまねをすると、髷が、がく〳〵とゆれる。何だか座りがわるい。

夕方靜子樣から、お手紙が來る。

夜、今宵はわけて天の川が美しい。斯麽な晩に、あの涼しい尺八の音を聞たら、此儘死んで終つてもよい、等と思ふ。

八月九日。四邊は未だ仄暗い。寢衣のまゝて庭に下りた。山百合の花が、曉闇の中にくつきりと、白く見え

る。昨日とたおぐしが、少しほつれて、惡くすると髪の毛が頬にかゝるが、却つて此の方が、風情があると思ふ。午後徒然のまゝに、兄様から依頼まれた、チクタイを編む。階下のお茶の間では、大層お賑やかの樣だ、大園の叔母様が、被成つたのだらう、私大園の叔母様大好き。何だかあの近眼鏡まてが、氣に入つて居る。何所かで、プラチナ線を振る樣な、カナカナの聲がする。雲の峯がによきによき立つ。庭の芙蓉漸く凋んで、柿の葉かげうす暗くなる。兄様は、葡萄棚の下へ、ハンモックを吊つて、小形の聖書を、讀んで被在つた。兄様は耶蘇敎徒。そつと忍び寄つて「兄様」と肩をたゝくと「ウム」と、喫驚なさる。仰ぐ葉がくれに、夕月の蔭が見えた。

（評）淸爽。

村はづれ　陸奥　松尾ちよ子



秀逸

○一日の記

熊本市　江添ちじ子

七月三十日。暑さ烈しき日なれど風少し吹きていと心地よき日なり。朝未明きに起き出て松、銀杏の植木に水やりてより汗ばみし襦袢一枚洗ひ淸めぬ。朝食後お茶の稽古に行く。通町をすぎ上林町の方へ曲らむとせし時、向ふの方より紫、海老茶などの袴、とりどりに穿きし女學生六七人、いそぎ來るあり。何處の學舍にや通ふ人ならむとは思ひしも、さまで氣にも止めず、行すぎむとせしに彼人たちは云ひ合せし如くヒタと止まりて、いと丁寧なる挨拶をなし給ひぬ。

驚き見れば去る彌生の頃まで同じ學舍に文學び居し友の君と顔のみはおぼえあれど誰樣なるかは知る能はず。同窓會の折には再び相見む事を約して別れぬ。年こそ妹なれ、一級だにも上級たりし頃を忘れもせで、斯はなし給ひしかと、いと／＼嬉しく思はず面誇り度き心地せられぬ。午後花子樣を訪ひ暮れすぐる頃まで打興じて歸りぬ。床に入りて今日の事ども顧みれば心に懸る曇りとてもなく。願くば明日の日もかくあれと祈られぬ。

七月三十一日。霧深き朝なりき。久々に萱村の叔母樣の宅を訪ひまゐらせぬ。いつもながらお化粧薄しと仰せ給ふにいと耻かしかりき。其歸るさ、海軍兵學校の生徒二三人に逢ふ。陸軍兵のみ見馴れし眼には短き上服、短き劍のあたりいと可愛らしう。さるにても亡きお兄樣も此の短き服、短き劍こそ幼少よりの御目的なりしをとそゞろ悲しく床の御面影さへ深く霞みて見得ず。午後お母樣より銀杏返しに髮結びて戴きぬ。嬉しかりき。夜に入りてお靜を伴ひ女子文壇求めに行く。いそぎ歸りて開き見れば和歌入賞にお姉樣のお作。倘くり開けば針の穴よりまだ少さき活字に妾の作あり。初めて素養なくてはと思ひ當りては己が心のうら恥かしうなりぬ。

（評）たのもしき筆つきなり。

○七夕日記　備後　澄江

朝起きると私は寢卷のまゝ壜を持つて前の芋畑へ行きました。大きな芋の葉へ銀のやうなつゆの玉がころころとして居ます、其れを一つ一つびんへ取つてかへりました。そして其れを持つて墨をすり、色紙の短冊へ和歌や俳句等兄さんと二人で書いて、私が其れを一々笹の葉につけて背戶のお椽先へ立てゝ戴きました。お母樣や姉さまは今お備へ物の仕度で御忙し相。

お午の二三時間は中々暑うございましたけれど、日がくれてからは涼しく、始終そよ／＼と風が通ひます。私は先づ盆燈籠に灯を付けて、今日は皆御椽へ出て御飯をたべる事にしました。美しう光つて居るお星さまを眺めながら御飯をたべて居ますと笹の葉がさら／＼と動いて白や紫のたんざくがひら／＼します。

（評）あどけなき處を取る。

○事務員日記　尾張　成田いし子

七月廿五日。晴、寒暖計八十八度、（土曜日）

曉、四時、枕下のベルがけたゝましく鳴る。終夜暑さに悶へて、今やつと寢ついた妾、此時丈はほんとに嫌だと思つた。眠い目をこすり／＼、機械の前に立つたもの丶、眠い事は矢張り眠い、兩の瞼が自ら塞がる。ふと、振り返ると富田さんが、今日は非番だ、と言はぬ計りに、おちついて、然かも何だか嫌に笑顔で寢て居

る憎くらしさ、いや〳〵受信した、電報は、「ニモッスグヲタレ」嗚呼亦今日は一日忙しいさう＝と呟やく、時間前から起された其日は乾度多數に有るので、案の定、夕べの計算。

發信三十八。受信廿五。隨分忙しい日であつた。

廿六日。晴、寒暖計、九十度、(日曜日)
早朝から兵士の影がちらりほらり窓に映る。
大方、僅かな暇にも歸鄕の樂しみを味ふ爲ならん、嬉しい心は其飛ぶやうな足元でもうなづかれる。
八時。例に依つて擔當機械についたもの丶どうしたものか、十時迄にやつと受信が二つ。好きな雜誌が讀めて嬉しい。
午後一時。燒くやうな眞晝の暑さに堪へかねて、郵便課の三木さんが團扇の手を忙しげに動かしながら顏をしかめて上つて來られる。立つて南窓を明けると、凉しい川風がずうつと流れ込む。階下とは確に五度から違ふと、三木さんがさも羨しそうに。
半身だして下を見ると、黑ん坊のやうな裸躰の男の兒が四五人、蛙のやうな手付、足付してどぶん〳〵と水泳するさまのお可笑しさ、二人共思はず失笑す。目を上げると、向河岸を海老色と、鼠色の洋傘が二つ、押並んで北へ行く。白絣の袖が風に飜つて帶の赤いのが目に付く。顏は覗いて見たが分らない。
午後は可なり、忙しかつた。

發信二十一。受信二十三。

（評）平凡なる事務の日記としては趣味に富む、凡手にあらじ。

○歸省日記

伯耆　湖濱貞子

八月一日。日本晴。今夏からは、必ず必ず續けやうと、固い決心して、井戸端で冷水摩擦する。驚いた顏して飛んでゐらしつたお祖母さん、「お前まアそんな事して―いつかな夏だて風引くよ」、「噓よお祖母さん冷水摩擦すると第一風なんか……」と云ひかけたが、とても妾の云つた位の事で得心を行かせるやうなお祖母さんでない。それに、此れも妾を大切と思つて下さればこそ。「さうでご座いませうかネ……」と從順にやめかける。「お前東京に居てもそんな事お爲でないよ、大切な身躰、風でも引いて御覽」、いやなお祖母さんだよ、始めからこんな景氣では又續きアしない。
午後、うらの菜園から増(下女)が一抱もありさうな西瓜を取つて來て冷たいのを食べさせる。
八月四日。今夜から明日にかけて、戀しい父母の御法事お父さんの三年で、お母さんの七年一日違ひだが一處にするとか。今更ながら悲しい。そろひもそろつて三年と七年、情けないなぜ人間は死ぬるのか？。十時頃佛さんの御馳走に果實林へ何か取りに行かうと籠を持つてお祖母さんの後からついて行く。五町歩の廣い所に、梨がおもて、林檎、桃、すもゝ、色々樣々な木が列んで居る其間を、くゞり〳〵「來たか」と、出て

ゐらしつたお祖父さんの姿が何となくおかしかつた。「今年の桃は案外よかつた、こゝいらのは小さいがあつちの隅に一本美事ながある、行つて食つて見い、美味いぞ、番小屋に松つあんが居る筈だ、なんぼなりと取つてもらへ。それからな、東京に行く時にあれ一本は殘して置くから、持てるだけ持つて行くがいゝ、東京なんどにあんなのはないからな」。さうすれば花田さんや池本さんに自慢しながら御馳走するわと思つた。午後から分家の叔父さんと叔母さんが法事の手傳にいらつしやる。美ちやんは邪魔しに來た。

夜に入つてお經もすむ村の手傳ひに來て居た人達もたいがい踊つて、後は內わ同士に和尙さんと。話は三年前と七年前「早いものだ」とお祖父さん叔父さん皆しんみりする。と沈み調子に和尙さんがはなを一ッかむだ。

（評）結末よし。

○盆踊日記　茨城縣　永井誠子

七月十三日、まちにまちたる盆踊もいよ〳〵今宵より始まるなれば何處ともなく聞こゆる太皷の音に浮かされて夕餉もそこ〳〵にすまし花笠被むり紅の襷に雪駄といふいでたちにて踊場さして急ぎぬ、踊場にはもはや數多の踊子眞白き手を打ち合せ平和なる鄙唄うたひゐたり、吾等も交りて日頃蓄へし謠を唄ふは今宵なりと唄ふ折しもあやにくなる空摸樣、雨となりたれば皆々名殘惜しくも家に歸りたり。

十五日、晝間の摸樣にては今宵も雨かと思はれ氣遣ひゐたりしに宵になりて雨止み雲晴れたれば嬉しきことこの上もなし、例の花笠かむりてお隣のつやちやんの家に立寄りこゝにて數多の友と一所になり踊場さしていて行きたり、踊場にいたれば一昨夜より賑やかにて手ばたきの音も太皷の拍子も鎭守樣の森に響き、皆の謠ふ美聲は小野の流れに合して心地よきこと限りなし、折しも三五の月は吾が村里をはなれ數多の踊子の花笠を照し眞白き手は尙眞白に見えたればみごとなることもいはれぬ程なりき。踊酣なるころ誰のお謠かしかとはわかねど、年が年中鍬鎌とつて……野良の務めもこれがため……あとの願は只一つ……！と妾の耳にはいや高く響きたればすぐさま返しの謠を唄ひぬ、二度目の踊終りたるとき祖母樣に促されて名殘をのこし明晩を約して歸りぬ。

○學校日記　大阪　月野照代

今日は各級長の撰る日、今度は誰方だらう、あの星樣人望はあるけど能くお休みなさるから如何かしら、藤山樣は大層先生に見込まれてゐらつしやるから、不圖するとあの方かも知れない等、考へつゝ登校すると、早、始まりの鐘がけたゝましく鳴つてる。お包み解くもそこ〳〵大急ぎに皆集場へ列を正した。ところが料らず我級で其任を命ぜられたのは私。餘りの意外に夢じやないかと疑つた。嬉しい樣で嫌な樣な、そして恐ろしくて矢張り嬉しい、何だか妙な〳〵氣がする。始

めが算術今日も秋野様と二人無失。二時間目作文。食品の調理てふ題淸書す。體操を卅分、ダンスを敎はる。

遊び時間又、雪様オルガンに寄りかゝつて優しく唱つてゐらつしやる。岡様が「ホヽ又オルガンにひつつついて」と仰やると振り返つて莞爾なすつた風情、寫眞てよく見た今のモルガン夫人お雪にそつくり、あゝいつもながらお美いと思ふは度毎だが、……それにお名迄が同じだから、誰云ふとなく直オルガンをモレガンになぞらへて、からかふ。……今日は其可愛いお口から大變な御氣焔。「妾オルガンとは夫婦よ、人になんか便らない、オルガンやピヤノを杖とも柱とも思つて、自分の職に勢出すの」つて力んでゐらつしやる。晝から裁縫、御召の袷仕上る。

谷様には實際困る、云はねば好い事に先生がお出て遊ばさぬと、八釜敷く人様の悪口ばかりなのだし、何か一口いへば直ぐ級長だと思つて威張つてるなんど、仕方ない。前の池田様など私と違つて內氣な性だつた故。萬事遠慮勝にひかへていらした丈、尙お困りなすつた

晴著　茨城縣　小堀みどり



らう。お氣の毒なことゝ思ふ。

○看病日記　丹後國　さいふね

十二月三十一日水曜雪。歸郷してからまだ七日目「ようう歸つた寒むかつたらう」と湯まで取つて下さつた母上は、何んな病魔に誘はれなすつたらう晝夜なしに御床の中。早や酷くお窶れなすつた。朝の九時頃醫者が來た。後で體熱表を見たら少し下つて居た嬉しかつた。午後母は微かな聲で「今年のお正月はどうか妾に貸して御呉れよ」等と早や兩眼に白露、何んだか前から考へて被居つた樣子、どうか熱が上つて呉れねば佳いがと醫者を待つて居ると果して昨日と同じ處に上つた。心配なんかよして下さればよいに。山田のお伯母さんから御見舞を貰つた。思へば今年も今日限り妾は十九になる。

四十一年正月元旦、水、朝晴、午後雨。

新玉の日の始めとは成つたが心は少しも病母から離れない。流石に天氣はよくなつた。門の方て人々が樂しそうに云ふ聲が聞えると若しやお母樣が御氣をもまれはしないかと其の度毎に身がヒヤリとする。お父樣と姉さんとは店、私は獨り病母の側てみとりの役。十時頃さきが端書を持つて來た。見ると學友からの新年狀が五六通、皆お腹の立つ程呑氣な事許り書いて被居る。其れも其の筈病氣の事は少しもお知りて無いから。午後は少し熱が下つた。體熱表程心配て而も樂みなものはない。夜は早くから眠んで下さつた。

正月二日、木、曇。何うも容體がよろしう無いから今日は山下院長に見てもらう樣に使を立てた。氷の冷袋を又用ひる事になつた。

午後院長さんに見て貰うと幸ひ前の醫者の見立てと大差は無かつた。そして「受け合うた」と口をきらしたから先安心!。

日記文原稿總數。　百六篇

内規定卌行以上、　十二篇

掲載外の佳作者左の如し。

水谷みさを、鹿兒島　智潮子、阪田鼓子、谷間の白梅、大阪　花子

小林英子、熊本　埋木、大津　入千代、加藤爲子、大阪　入千代子

規定外の爲め惜しくも捨てし佳作者は

下野　節子、秋山欣子、西戸政江、近野はる子、加藤時惠子

新體詩

横瀬夜雨先生選



凡て振假名をつくること
懸賞は乙種の規定に據る

地 ○愛の絲巻

岩代 梨花

吾が胸裡に、もつれ合ふ
不平の絲にはてしなく
たぐつても／＼、
女の弱いちからでは
巻きつくせぬ、忌まはしや
髪と、容姿と
顔のかざりにばかり
慣れて居て
紫のうれしい絲をやは胸に
巻いた昔がこいしさに
浅黄色なる不平の絲の
亂れみだるゝ今の苦しさ
君のみ胸にこつそりと
愛の絲巻き、秘めてあれど
浅黄の絲はよも免さじ
ああ是非もない
運命のままに従ひて
あさぎの絲を——
赤き血に染めて
君がみ胸に巻いて見ようか

不平をあさぎの色にたとへたるはよし。初戀を紫とすれば、悔ての後の戀は赤き色ぞげにふさはしかるべき。

人 ○白木の柩

牛込 野村光子

祭壇にかざられし
白百合はたわ／＼と
香をふいてうなだれぬ
吊鐘の音は殷々と
壁にひゞき窓に反響る
人々は悲みて
つと耳をふたぎしが
見よ楚楚として伶人の
ピアノの前にたち寄れば
やがてぞ起るひくき調
か黒き布におほはれて
舁き入れらるゝ棺あり
調はいよゝおごそかに
白き羽さす天使も
棺の前につどふごと
静に終る吊鐘の音
壇の上に据ゑられて
覆たる布を除らるゝ刹那
罪の骸をかくしたる
白木の棺は現はれぬ
くれなゐや、紫や
焼かば烟となりぬべし
聖きもの愛少女よ
君死してこゝに生く

床上に臥てゐらしたまま、お友達に口授して書いて貰うたさうです。『昨日から大へん快くなりましたがわづかの中に毛が随分抜けました、まだ起きかへることを禁じられてをります』ともあるし『先生私はなほり

ましようか、嫉妬をするのがいやで〳〵なりません」とも書いてある。ねがふは我をして君がために挽歌を作らしむる勿れ。

秀逸

○女のゆめ

下總　若杉とり子

よろこびの扉は此胸の底なれど
十七年の閉鎖に錆れ
開くべきすべなくて
血眼を見張り据ゑ
鍵！鍵！と叫ぶ瞬間
黄光一線！
胸を射しかと思へば
またつと消えて塔そびゆる
後影顧みもせて
裳裾ふまへまろび寄り
細き手を階にからめつけ
登らんと悶ゆる足を
引き摺り下すと
荒くれ男ども鷲づかむと
鍵！鍵！とあがきさして
大地にまろぶ
泥まみれあさまし姿
ああそは夢
新しき時の廻り來
運命の扉の開かんとも
靜かに待てる我なるを

夢に驚いて跳れ起きたやうな詩だ、「十七年のとざしに錆れ」もよく、「鷲掴む」も、「足掻して」もうまく調うてゐる、故ありてこの君のおいたちを知つてる自分は、この詩を作つた動機もほゞ知つてゐるけれど、それは言ふを欲しない、所詮人は運命のまにまに生きればならないのであらう、悲しいけれども仕方がない。

○よしのへ

大和　木村春江子

七月、夏は雲多き
よしのへ姉を發足しむと
橋の曲りに手をはなてば
水ぞ南へ流れ行く。
吉野といへば古里は
みどりの山となりぬらむ

母にすら秘めし或る時の
二人の夢もこめたるを。
たしなめど湧く涙をば
重たき丸髷の根痛しと
面背けてはそと拭ひつ、
君が瞳に見るほゝゑみに。

女同士のつきあひにいつはりの多いとは爭はれないが、女のきようだいはどんな心もちて姉に對し妹に接するか、われ〳〵には丸きりあてがない。これは吉野の山へかへる姉さんと違うて浪速に留まる妹君のしをらしき丸髷姿が目に見える。

○牡牛

阿波　長曾我部菊子

今、赤き日入りぬ。
草原の綠色にいねし牝の牛の
身をまろばして長嘶きすれば、
木蔭なる草の家よりつと出づる
女子は足のかろがろと
馳せ來りて綱をばとりぬ。
大海の深きがごとく澄める瞳に、
輝やくものの見ゆれども

さはうなだれず。
鬼百合の花一つ
蔓草の這ひ回ふ路のべに
そむいて咲ける
側に來て哀愁の目ざし。はらはらと
墮つる涙を袖にして
たちとどまりつ。
牝の牛は
青草をふみにじり
ふみしだいて草の家の
窓をしたひて
二度を啼く

くり色の髪を眉へふり亂して、足には細い靴か穿いた十三ばかりの女の子が草の上を走つて來る、遠い方にはこはれかかつた古い家の窓が見えて、こちらにはあめ牛の肥えたのが草の上へれそべつてもう／＼と鳴いてる……これはどうしてもミレーの風景畫であらう。

○暮　科野　小野つかさ

あゝ今日も亦暮れて了うのか。
何故日は明けたり暮れたりするのだらう、
其の度に若い人は生につかれて、
年がよつてゆくのだ。
あゝいやだ、寂しい。
孤つきりて、暗くなつてく
山や森やを見て居る——と
墓の中へ這入てくような氣がする。


銚子犬岩　（富山白菊子寄）

（暗い／＼洞穴へ引き込まれるのぢやないか知ら——
廣／＼とした大野の原へ、
捨てられて了つたのではなからうか——）
あゝなぜ日は暮れるのだらう。
『時』の力は私の魂を、
黑暗の底の底迄引いてつて、
さうして如何するつもりだらう。
おゝうす暗い野のはてに、
私の心を吸ひ込むような、
怪しいものかげがぼんやりと、
あら——、雲だらうか、墓だらうか。

君はたして痛切にこれをおもへりや、空行く雲をみる前に何ぞ内を省みざる。墓をおもふよりはまづ生の意義をおもへ。

○戀の花　靜岡縣　岸　つぎ子

君が賜びしは淡紅色の

そよ小さなる亂れ咲。
眞紅に燃ゆる我花の
たゞ大きうて端しきに、
似合はしからずと思ひしが
中々に濃きは人にもうとまれむと
命もなどの愛てしらに
二つ並べて培ひし、
ともすれば花は淡きが負かされて
あるかなきかのそが色は
日に異にかはりはてけれは
さらでも濃かる我が花の
ひとり日増に匂へるを
並べて見ざる花ならば
なくもがなとぞ泪こぼるゝ。

無くもがなと思ふなり、思ひ切つて引つこぬいてしまつた方がいゝてせう。

○落髮　和歌山　岡崎さゝ子

殘照に紅らなる、病葉の桃の梢をじ
するごと、
はら／＼と――落髮の、千筋八千筋
黄楊櫛の――
　　間目もれてわが膝に。
封じて置かん白紙に、よし虚僞の男
に嫁き、
生血は吸はれ肉は煮られ、愛の形骸
の消失すも、
　色あせじ、光澤や消えじ黑
　髮のみは――。
綰になして紙屑籠になげぬれば――
市に鬻がれ塲末なる、天井ひくき古
家の
　庭につまれて撰りゑられ
　――。
機關のひとき轟ろなる會社へと送ら
れて、
銹あかき大釜や煮られ晒され俳優の
――
女男の鬘や、少なき黑髮の女々の
こび賣る美を助けんも心憂し――
　さらは封ぜん少女のかたみ
と――芙蓉明るき暮方を。

長曾我部菊子に『木の葉髮』あり、生田さくらに『落ち毛』あり、髮を愛し毛を惜む婦人の感想は歌ひつくされたりとも見えず。願はくば百尺竿頭なほ一歩をすゝめよ。

○姫百合　莎城　大久保てる子

日は暮れはてぬ
萬象は、そが色を脱ぎ
眞裸の眠りにつきぬ。
かゝる日を、罪の化身か――
毒蛇の、息吹にたへて
美しき百合は散りぬ。
美しき花は、あゝ脆かりき。
惡戯かも、魔の子が振れる
斧の前――（命數ぞ謎か）
果敢なけれ、人世、宛ら
消し炭の、その一瞬時の
爛火の如く――
やがて冷き黑き屍骸。
戀、希望あらゆるものは
胸深く、封ぜられしか――
永久に寂しき日かな。

日は暮れはてぬ。
姫百合の
（魂の別離）ぞかなしき。

日、罪、蛇、花、寛の子、命、火、永久。おきまりの道具立だ、いつになつたら止むかとつくづくいやになる。

○夕の街　青森　馬場ちよ子

力なき秋の太陽は
夕のまちをあかあかとてらしぬ
かゝるとき、世を漂ふ二人の乞食
「愛慾」の思ひにつかれ
蒼ざめて、戸ごと物乞ふけはひ、
古き帽、やぶれし上衣
夫婦なれど、かくなりては
あしもたどたど日は天神山に落ちぬ
何處よりか來る黒き犬、跡追うて
吼えぬ、男はふりむきてにらめど
犬は尚吼えぬ
にらみし刹那「くゐ」の涙はらはらと
頰を流れぬ、夕の街にして
さまざまの人走る、
若き男女、手をとりて『散歩』
乞食の二人それを見て、あやしき眼
を
光らし、破れし帽を示しぬ。

若い男女の散歩を見て怪しき眼を光らしたのはどういふわけか、人毛無厭母有勝吾妹子與携行而副而將座、二人は戀の勝利者ではないのか。

○君と知りし日　福井　手塚けい子

きさらぎの、雪まだ消えぬ寒き日よ。
林の中の、いと細きひともとの木は、
鉞の刃に倒されて、杣小屋の
爐にくべられぬ。――火の熱に、暖
まり行く
枝のうら、――うまし香りのうす烟
り、
やゝにほぐれて時ならぬ芽をふき出
てぬ。
さもあれな、そは蜃氣樓たまゆらの
夢よ、あへなく燒かれぬる。――あ
あ我れ君と
知りし日は、すでに切られて爐のな
かに、
はかなき夢のうす烟り、うまし香り
に
醉ひつゝも、枝芽ふきたる時なりし。

伽羅か何かぢやあるまいし雪の林に立つてゐるほどの木で火にくべられてうまし香りを發する筈はない、それとも御前の方ではなま枯れの木の枝のいぶる煙を珍重するのだらうか、要くべし。

○失戀　和泉　幸枝子

腹立つた、泣いた、くづれた、
かみさいた、絹の手帕、
男とは　こんな者か、
女こそ　情ないよ――恨めしき
世よ。
其名さへ　滿願寺の
小亭に　二人抱き合ひ
ま心を　語つた……あの時
あの人は　捨てる氣で――腹が立
つ

一生一生、男に觸れまい
おそろしい。受けたこの傷手
どうして　愈そう十八の
少女は　盛りぢやーどうせう。

「こひしさはおなじ心にあらずともこよひの月を君見ざらめや」泣くのはあなたばかりてはなからう、おあきらめなさい。

○手巾に

上總　松崎かつ子

白き絹、紅き臙脂
其は君が賜ひし絹に、亡き姉の染めたる臙脂よ。
小さき胸に、湧く血汐。
「章さま」と夢にうつゝに、君が名を繰り返しつゝ。
はしき魂、世を去りぬ、
いとほしや寫眞肌に、此の絹を口に啣みて。
眞白きは、くれないは、
亡き君が濁らぬ心よ、色に出し燃ゆる思ひよ。
今こゝに、かへしまつる、
白絹に、あえかの臙脂に、逝きし姉を偲び給へと。

原作「姉」を「男」に作る、男がべになつけたのも滑稽なら、女の名が「章さま」といふのも馬鹿〳〵しい。千葉縣は剽窃作家の巣窟だが、これもさうぢやあるまいか。

○流星

香川縣　松永茂子

秋の夜園に下り立ちて、
ひとり御空を望みしに、
晴れて連る綺羅星は、
數ふれどたゞ多きかな。
あはれ如何なる折見けん、
悠ち流るゝ星一つ、
借も一つは消えたれど、
御空の星は減りもせず、
友の果敢なき運命を、
知らで閃く數の星、
實にや土なる人の子も、
かくの如くに消えゆかん、
流れし星の迹とめて、
嗚呼我涙堰きあへぬ。

○朧夜

大阪府　金田香雲子

春におごれる十八の
花は香もなき裾模樣
袖にかくれて耻かしく
我人妻となりにけり
銀燭匂ふ夜に入れば
互に交す祝盃に
現し心のなくなりて
胸の小琴は亂れ行く

○くるゝ秋

相摸　鍋田靜子

パタ〳〵と音こそすれ
窓そと押せば
隣の雞と我家の雞と
激しう鬪ひ起したり。
睨みあひ餌拾ふ眞似て
またパタ〳〵と羽音す
かくして暫時鬪へば
我雞敗けて逃げにけり。
勝ちたる雞の羽ばたきや
庭の白萩ほろゝと散りて
いよ〳〵秋もくるゝなり。

○ひとやの吟

備後　八千代

暗き宵、冷たき鐵の窓により
ふら〳〵と立ち上り、
叫びにき、あゝかの國は亡びぬと、
瑞穗たる、かのうまし國亡びぬと。
春の宵、玉のむしろに酒宴して、
うと〳〵と假寐せし
其膝は、かの美しき妃の膝は、
夢なりき、美しき妃は今いづこ。
今日や夢、昔やうつゝ、
高樓に玉履ふみし朝、

今日あると思ひきや、
あゝかくて、我は逝かん、
とらはれの、うつし此身。

○摘草

越後　横山文枝

庭に梅散る其日なり
末の妹にせがまれて摘草しよと
野に出てぬ

風暖やかに肌のひは燃ぬ
行來人見ればはと面伏せぬかさ
のうち

つくしなづなや嫁菜中
とき色リボンひら〳〵と見ゆる
は蝶やら妹やら

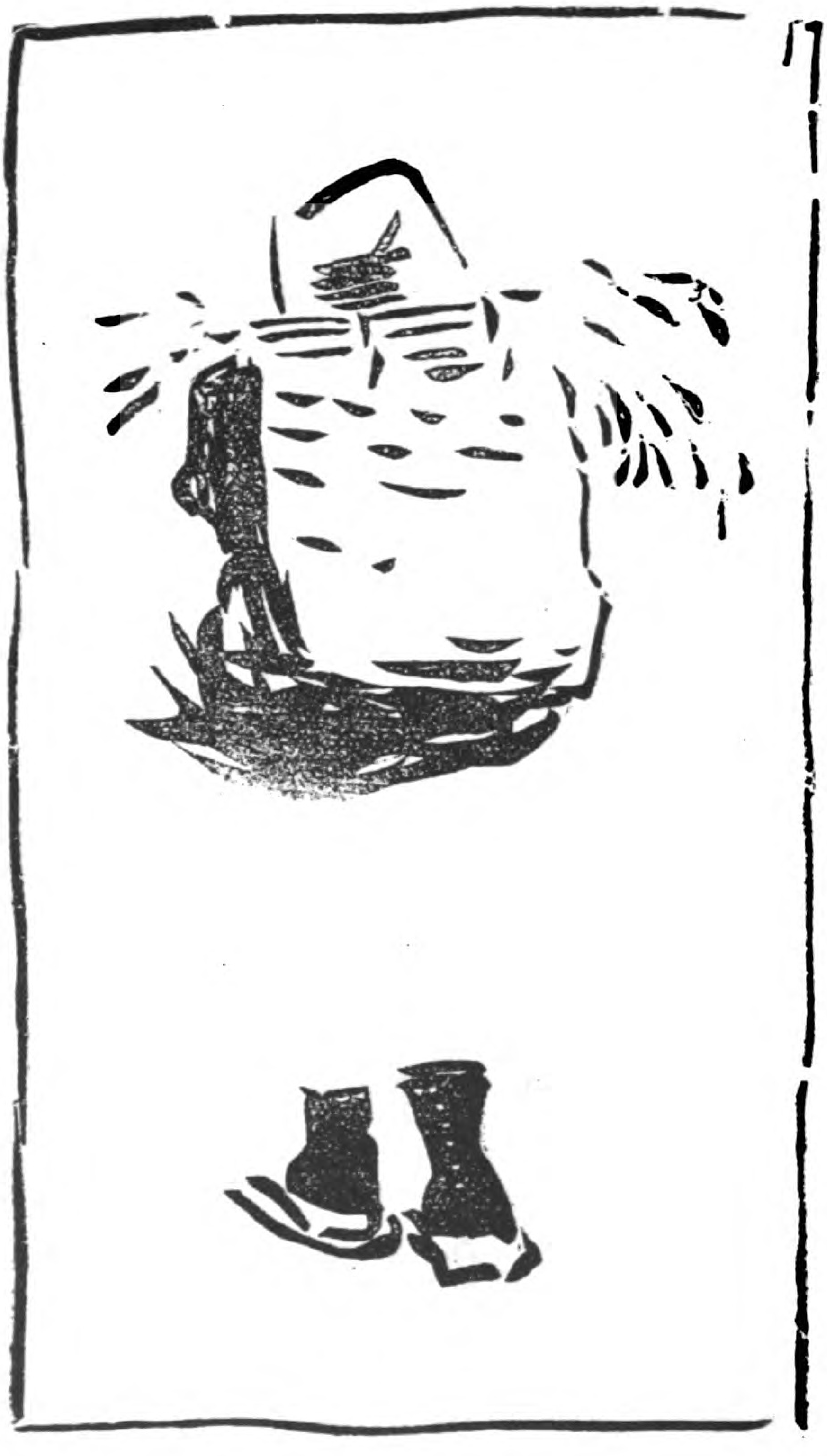
○病める身

下野　金田きん

しよぼ〳〵と雨降る音に
ふと目をあけば――
はやたそがれて
窓のまくほの白く
ふわり〳〵と風にうごきぬ
花たてのバラも見あきぬ
掛てある繪も見つくしぬ
室にあるあらゆるものは
皆見つくして――
天上のふしあなまでも
數へそして兩手をば
くみ合せてちのうせし

胸にあつればトキ〳〵と――
目をとぢてまた目をあけば
紅ゐのバラのつぼみの
「ポツタリ」とまくらにちりぬ。

花實　栃木縣　栗原とみ子



土の香奇しき先斗路
加茂の流れの河しもに
汝よ河原の白げんげ
素絹の衾蓐としや。
見よ祇園橋春は花

○日げんげ

京都　岩淵國子

優しき者よ白げんげ
名なき醜草おひしげり

紅友禪の振袖に
繪日がさかざす月の眉
ゑくぼ可愛ゆき舞姫が
心の愛はさめやすく

榮えのゆめは永久ならじ
見よ大野原月すみて
虫の音さゆる夕まぐれ
明日は町々も花うりの
花野に立ちて紅だすき
かいまさぐりの物おもふ
なやみは深し情あり

○嫁入り　山形縣　工藤さく子

嫁入すると誰が言うたやら
今夜はさぞ樂しいてしやう
銀の盃に黄金の波
うれしいわれと云つて
慰めもせず冷笑かして往く
風にもあてられない此の身
今日の荒波の冷味に
身は計れるばかり
神は何故此の苦しい波を
渡すやら

○ふる島田　伊豫　野間曉子

桃の姿か、雛子輪のかみを、
銀のひらゝて品よく結び、
泣いて貰つた羽子花に、
やさしい息をほと吹き入れて、
いくつ寐たらと日に〳〵まつた、
梅の盛りのお正月は、
いまならいやよ、ふるしま田。
花が咲いたら見に行きませうと、
心まちには待つけれど、
さて、眞心を云ふならば、
年をとるのは否なこと、
オヽ、何時までも美しい、
花の姿で居たいもの、

○夕涼み　松本　矢口貞子

行水あびて衣かへて
樂しき夕飯もはやすみぬ。
空はま白う晴れわたり
三日月姿かげあはく
月は地にもおちてゐる
姿は乳兒を背におひて
寢む氣をそひてむつがるを
節面白き守歌に
なだめすかして……ゆら〳〵と
歩むともなく
いつか川邊につきました
いざやすゞまん夕涼み
母の御用のをはるまで。

○磯の夕暮　石狩　小林きよの子

うす紫の山の眉
ほの〳〵と早や暮れはてゝ
波は霞の磯がくれ
響く小琴にしらべよき
水や空なる走り帆に
夕映あかき姿かな
磯頭の松に袖しきて
それと見下す沖の方
禮文島山霧こめて
かゞり火遠し霧の中

○君ちやん　丹波　松本とみ子

林檎の様な頬の色
そよ〳〵とふく夕風に
振分小髪をなぶらせて
今年七ツの君ちやんは
姉のたもとにすがりつき
浪ちやんの様な白りぼん
私にも買つて頂戴な
えゝまた明日よと答ふれば
一ぱんすきなは姉さんと
よろこぶ笑がほの愛らしさ

○秋草　茨城縣　今泉磯千鳥

春去にて夏は逝けども
秋の世になほも戀あり。
山の端をめぐり〳〵て
微笑める——七草花に。
あゝされどはかなかりけり。
秋なれば萬象なまめかず
何となく戀冷やけし。
はかなかり、七草の戀。
雨にはた妬みの風に
あるはまた女の嫉に
戀ならず皆窶れたり。
「追憶」の月は皎々
蕭條の秋風沁みむ。
失戀のあゝ秋草よ。

新論文　編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以内、半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は乙種に據る。

地　○勉強の方法

大津市　八千代

すべて物事を爲るには必ず方法と云ふものがあります如何んなに勉めても、方法がなければ無益であります特に、學問をするには、又其方法があらうと思ひますが、その様な六ヶ敷い事は述べられません、只妾が年頃經驗じた二三を御話し致しませう。さて、其妾の經驗に由りますと、第一には勉めて急がずに、それを何時までも續け、第二には其勉强するに趣味を解し、第三には種々の學科を取り交へてするのであります。妾の友達に歌を少しも知らない人がありまして、和歌を作りたいと云ふので、毎日〳〵よい歌を一首宛暗記してその意味を十分にさとつて、それを續けて居なされた爲、今では餘程上手になりましたさてその何時までも續けるには、趣味を解せねばなりません、さうてありますから勉强の時は外の事を考へてはなりません、そればかりに心を注いでしますと、自然趣味がある様になります、おもしろみがあつて毎日毎日する氣になるのであります、けれども人は珍しいものを好んで新しいものを喜ふものでありますから、必ず一つの學科ばかり續けて居ると厭になります、それ故に、各種の學科を取り交へてそれ等を平等に永く續けたらよいのでありますが、妾等は家にあつては種種の用事があります、此等の用事を時々に、はさんでするのも亦一つの方法でありませう。さうてありますから、それに趣味を持つて、種々の學科に互つて何時までも續けて、よく遊んでよく勉めたならば、これが眞の勉强の方法だと存じます、變化があつて趣味があります、趣味があつて長く續きます、永く續いて初めて成功するのであります、勉强の方法は、まだ此外にありませうか。

此通り行へたら何んな勉强でも成功します（評）

人　○青年作家の俤（二）

小石川　よし枝

このお暑さにも御變りがございませんて結構でございます、私は二三日前はちとよわらされておりましたが涼しい故か、けふは大分氣分がよくなりました、それではもう一人二人申あげませう、

白鳥樣、この方のお作はまだあまり多く拜見いたしてをりませぬからあの正月から二三號に渡りて出ました早稻田文學の何所へあれについて申あげませう、あの健治の周圍の人に對する仕打をあまりと思ひながらいつのまにか健治に同情してしまいました、健治は即ち白鳥樣ではないか、拾錢、——或は下足とか露骨とかいはれるかもしれませんが、私には適當な言葉を存じませぬな、この言葉を使はせて下さいませ——な、どうでもいゝと云ふ風な、そして、これを個人主義と云ふのでせうか、自分さへよければ、後は野となれ山となれと云ふた樣な、それでゐて、どこかこう弱い處があるかとおもはれます、ただ一度お目にかゝつたばかりで、よくは存じませねど、無口でゐらつしやる樣に拜見いたしました、そして、意氣なつくりをお好みかと存ぜられます、お躰はおちいさい方、

秋田雨雀樣、御作の二ッ三ッはよみましたが、あまり深い印象をとどめませんてした、お躰はおちいさい方て、ちよこ〳〵してをられます、よくお國なまりがでます、

中村星湖樣、この方のお作は、少年行ばかり、他のは一つも拜見いたしません、あれだけの長編を、學校にゐらつしやる内におかきになつたお腕は實に、大したものと存じます、あの牧雄は何だか、大きな弟の樣な氣がします、あの弟が、もし牧雄の樣にならなければ……と心配いたしてをります、お色は黑、お丈は中、やせてをられます、なか〳〵おちついたお方、

他のお方々のは讀んで印象をとゞめなかつたりその御俤をしらなかつたり、いたします故、一先づこれにて筆おきます、おさらば、貞子樣、御きげんよう。

もう少し聞きたいと思ふもの貞子樣一人てはありますまい（評）

秀逸

○投書と身分　府下　辰女

美文にしろ、小説にしろ、誌上へ投書する人々は一寸考へると、朝も下女に起され、學校から歸て來れば、生花よ、茶よ、琴よ、と自分の好きな事をして、美文を作るにも、やれ誰々先生の著した、何々と云ふ書について作るといゝとか言て、自分がいゝと思ふ本は、どし〳〵買て、兄樣や姉樣に添削をして頂き、私どもが見やうものなら目もくらむ、ばかりのやうな大房具に飾られた、御机に、涼しい氣麗な書齋でこうしやうか、あゝしやうかと、丁度、姫樣の御化粧する時のやうにして、始めて、封じ込て、ポスト入れの御用は下女に仰せつけ、さて、一月もたつ内には何を投書したか忘れてしまい、讀て始めて、「あら私のが出てゝよ」

とこう云ふやうにして、苦なく、投書して居る人ばかりと思ふと、大間違です。或はそう言ふ方々も少くなくないてしやうが、私どもの様に、毎日〳〵學校處てすか、夜學へも參られず、役所や會社に勤め、歸れば家事を手傳ひ、夜は僅かに、近所の物しりの人に教へて頂き、女子文壇を購うにも、父母を、せめて〳〵、他の物を止して、買てもらひ、本屋の手からもぎ取るやうにして、途中て、もしや、私のが、と胸をどき〳〵させて、たとひ一番おしまいても、のつて居ると、其の嬉しさ、こをどりして、用も忘れて、父母に見せて來月號を買て戴く約束をして置き、父母の寢るのを待て、懸命に文を起草するが、ある物は古い文壇ばかり、參考としての本などは、手にしたくもありませんてあるから、ありたけの智を絞り出し、幾度か繰り返して、闇の夜でも風雨烈しき夜でも、人絶えた、町はづれのポストへ入れに行くのであります。

子守　三河　近藤八重子



こんなにはならないまでも、之に近い境遇に居る方もありましやう、前者と後者と誌友に變りはないてしやう。後者に近き、愛讀諸姉がありましたなら、幸ひに屈せず、奮勵して、文壇に花を咲かせて下さい、願ひます。

少し論文と云ふ意味に外れてゐるかも知れませんけれど、其主意が甚だ宜しいから採りました、文に上下の隔てなし、幸いに皆さんも此方の言ふ處に同意あれ（評）

○女學生の體格

茨城縣　靜子

街路を歩いてみると、近頃の女學生は一般に躰格が大きくなつた樣に思はれる、中には西洋婦人にも劣けない程の人もある、是れは我が日本の爲めに喜ぶべき現象である。其の原因はなにゝよるか、云ふまでもない！女學校で體操に重きを置くのが第一の原因である、學校ばかりでない、女子の體育の必要が、社會に認められて來た故である、殊に體育を行ふのに、成るべく面白く、行り良い樣に仕組み、體操といふ難しい名を棄てゝ、遊戯といふ優しい名の下に、運動を爲せ、之れが學校のみでなく、家の庭に遊ぶにも、園遊會で樂しむにも、大變都合の好いものであるが爲である。

以前華族女學校で『扇舞（あふぎまひ）』と名つけて唱歌や樂器を合せて舞の樣な體操を行り初めた時は寧ろ冷嘲を以て世間から迎へられたが、今は何校でも同じ樣な事を行る樣になつたのも、亦時勢の然らしむる處である。

今は體操を又た遊戯を專門とする男女の先生があり、亦た之が爲めに態々外國に留學した人もある、學校としては、體育會附屬の體操學校を初め、女子高等師範、附屬學校、華族女學校、音樂學校、女子大學など、何れも專門の教師を聘し、盛んに體操遊戯を教へて居る、同時に亦、我等女子に適する運動を研究して居る。

靴、袴、筒袖、束髮、室内では腰を掛け、外では立て遊ぶ、今は女學生の體格の立派になつたのは、全く此故である、萬望益々す盛としたいものである。

お説の通り近頃は餘程女學生のスタイルが正しくはなつて來ましたけれど、棒のやうにシヤキ／＼したゞけても困ります、弓のやうに曲つても折れないと云ふ彈力があつて、それて正しい體格を作りたいものです（評）

○氣懸り

岐阜市　篠田とみ子

始めから氣懸りなんて申しますけれども濟んだ事てすから事はどうする事もなりませんが要は生きてるお方に申し度いのです、八月六日の午後二時頃新聞紙を讀んて居りますと、ふと女子文壇と云ふ字が眼に入つたのです、止そうと思つた三面だが女子文壇とあるからには仕方がない一讀しようと讀んて見ると、愛知縣内呼續町邊て妙齡の一婦人が、家に居る時より記臆惡しかりしも未だ直らずとても醫藥の力にては及ばざる故と云ふ遺書を殘し轢死をなしたる旨に、所持品風呂敷包の中に葉書五枚と旅行案内一冊白足袋に本月（八月）發刊の女子文壇とあり何處の者とも知れぬ由が記載せられてありました、ようしたものです文壇の字が無く

ば通り一ぺんですが知らぬ人迄が身内かの樣に思はれてかれ是れ想像するのですが、それ位の事を苦にして死を決行するなんて弱いぢやありませんか、それも文壇を見る位の力ある人が、よしやとりつめた事が出來たとて死ぬ迄には間のある話です、やれる處までやらなくてどうしませう、高が此世で出來た事ですもの、況して若い證しており乍ら、皆樣の中にはそんな馬鹿氣た眞似をする人は無いでしようが、若しも死にたい迄は行かずとも現世が厭になりなぞしたなら、胸に兩手を拱んで閉眼ようお考へなさい、人間と生を受けたからには多少苦痛はあるです亦苦痛の無い人生なら味無いもんですから食べる事は出來ないのであります、劍を拔き合つて戰ふて人を斃すのです、若し斃せなかつたら彼の劍刄に潔く戰死するべしです、是れは即ち立派な死に方ではありませんか、我れと我が生を短かくするやうな事を必ずして下さいますな。

是が美文になつて來たらさぞ死者に同情した哀れな文章であつたでせうに、新論文となつて報告されたゞけに、死者にはお氣の毒ですけれど、一片の理智で解決されました、諸孃も亦此作者の言ふ處を否んではいけません（評）

○雜誌を讀むと

牛込　加藤時惠子

或日、文壇を見てゐました處が、雜誌を見ると生意氣になる。と云つて下さつた方がありました、私は聞いた時に其人を可哀そうだと思ひました、自分こそ生意氣云つてるんぢやないでせうか、いさゝか文學の趣味を味つた人ならば、雜誌の種類も見分けないで、むやくやに非認する道理がないと思ひました。得體の知れぬあいまい雜誌ならば兎も角、幾百萬の諸女が信用愛讀して發行期日を待ち詫びる程の好讀書も、雜誌とさへ云へば、何でもかまはず非認する人こそ文學の趣味の趣の字も知らないからで、只世間で云ひはやす、雜誌は生意氣になると云ふ事を、自分が又知つたか振りに、後押しゝてるんぢやないでせうか、このたぐひの人はよくある樣ですが、私は冷笑して、心に尋ねて見ました、自分は生意氣になりますか？、と心は頭を横に振つて、イヽエ、私は雜誌によつて餘力を得て、もの知り、だのと云はれ度い樣な野心家と違ひます、私は眞面目です、と答へました、皆樣野心家を御覽なさい、野心家は狹いものです、ですから雜誌からでも物事を知り得たと思ふと其れを應用する時期まで其の狹い胸に納めて置く事が出來ないでむやみに、やりたがり云ひたがるものです。くだらない事にも知り得たえらい理論をふいてみる、と世間で一寸賛める、御當人大滿足ですけれど理に丈ける人は實にうとい樣です、野心家の成功しないのは、實地よりも理くつで通そうとするからでせうもう一つ、野心に飽が供なつてゐる

のです、野心家は主に短氣て、やる事がバタ〳〵成功しないともう飽きてしまつて又他に事を求めると云ふ風なのも或は不成功の原因かと思ひます、眞面目な方を御覧なさい、名譽などを念頭に置かないから心が落付いてゐます、野心家に比して、其廣胸には幾多の智識が優に納め得られます、一を知つて二考して見る餘ゆうもあります、從つて內心が確個てす、野心家のふわ〳〵と多少異なつてゐるてせう、私は雜誌を讀むのに眞面目をつとめます、空論伏謝。

愛讀者たるもの、斯うなくてはなりません（評）

○服部貞子論　長門　田中花子

一葉女史が亡くなられてから、文壇は優れた閨秀作家を要求しました。それに應じて出た女流作家は決して一二てはありませんてした。けれどもその女の二三を除くの外は作家としての資格が無いのてはあるまいかと、疑はれるのてす。その二三の作家と雖、今後の發展――大成するか否か――は甚だ疑はしいものてす否、大成しないと斷言出來ると信じます。そこて貞子女史てす、私には貞子女史が一葉の化身てないかと思はれてなりません。

決してそれが誇張てなく、過夢てないことを信じます。貞子女史はまだ若い、けれどもその筆致、その着想は到底他の女流作家の及ばない處てす。それに今後の發展が奈邊まで達するかも量の知れないのてあります。田山花袋氏はいはれました「今の閨秀作家が此の作の手腕を持つて居るものは少い。」と。

私は重ねていひませう、「一葉死したりとて憂ふる勿れ、閨秀作家に貞子女史あり。」と。

あゝ貞子女史の前途は有望てす。華やかな白の花（成功の象徵）はその行くさきに亂れ咲いて居ます。そして、女史自身は自分が作家として立つべき使命を帶びて居るのを意識されて居るてせうか。自分は女史が一日も早く中央文壇に打つて出られんことを切望して止まないのてあります。

實に服部貞子さん（水野仙子とも云ふ方）は本誌の皆様も御承知の通り二三年前から引つゞいて其手腕を上げられるやうてす、競爭の烈しい文壇にか弱い女子の身て立つてゆかうと云ふには餘程の决心を要しますけれど、先づ第一に素質の好いと云ふことが力強い、一切の虛榮心を捨てゝ、眞面目に進んてゆけば一かどのものにはなれさうてす、此論甚くさゞる處はあるが、貞子女の爲に知己の言たることを失はない（評）

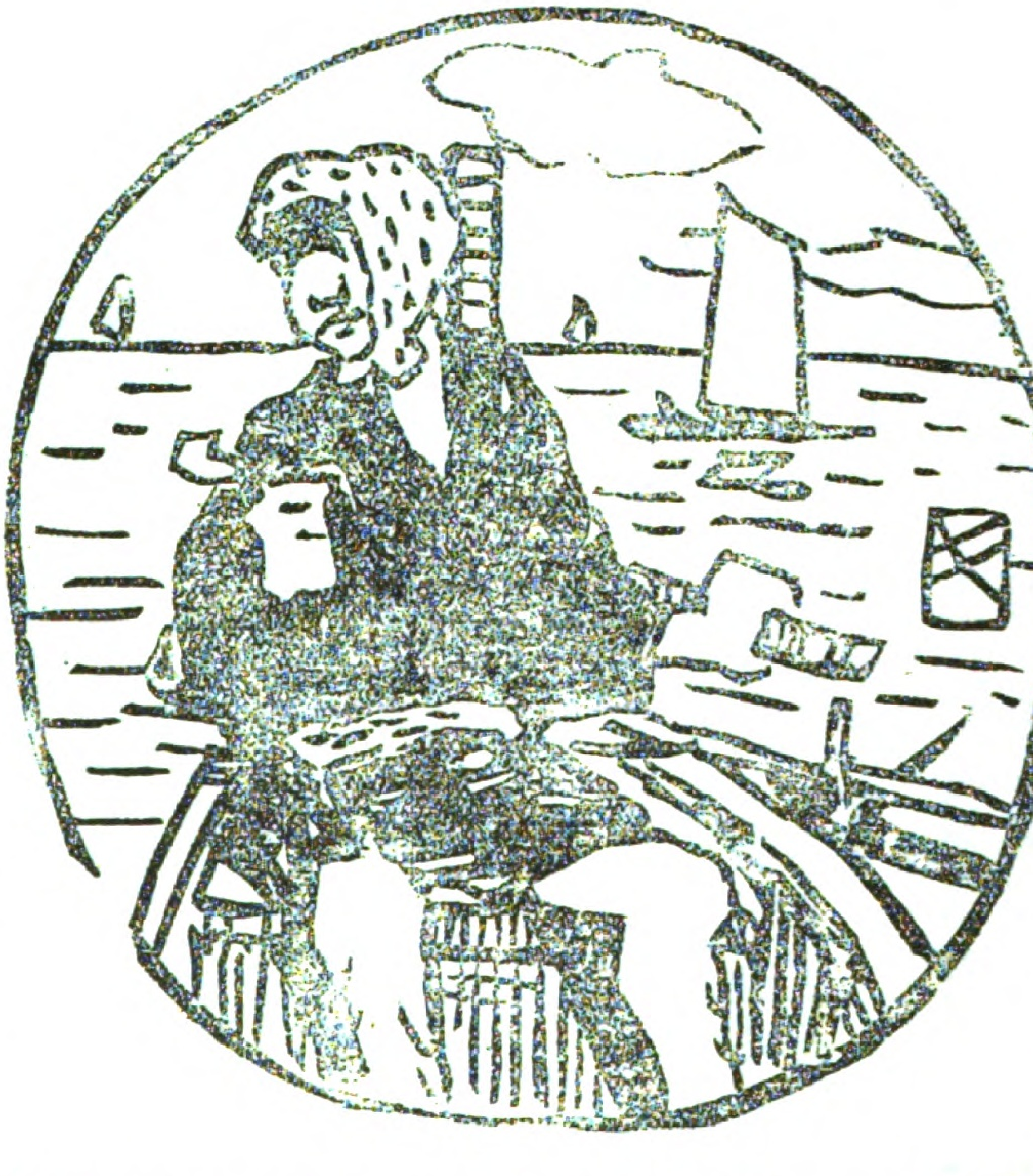
○思ふまゝ　群馬　森下花子

○近頃の新聞雜誌など見ると、女事務員とか何とかいふ記事が、常に吾が囚はれた婦女子の胸を強く打ちます、日に日に激甚な生存競爭の爲に、今迄が弱いもの美しいものとして置かれた女性、殊に新時代の智識に育てられた多くの少女は、漸う生存の意義を解すると共に、愕然として醒めたのです、朝顔がなよ〳〵と垣

にもたれ姫蔦が松の木にからむ如く、唯他を力に男性に頼つてのみゐられぬといふ感じが、汎くゆき渡つてきた、女性の解放とか婦女子の獨立とかいふ問題は、少くとも已に社會の問題になつた、官途にも私人の團隊にも。細心なる事務員として女子の採用は日々見るところて、またその成績によつて女子の才能は何人も否認し得ないまでになつてきた、と同時に女子は最も危險なる淵に望まなければならなくなつた、學識の慾望と生の不安、自覺に伴ふ恐怖、それ等がぐる／＼と渦を捲いて、絶えざる暗鬪に胸は常に亂れてゐる、時代の潮流に押され流されて、最も感情に走り易い青春の時期を、興味乾燥な學校生活に過す中流以上の若き女性が、生理上幽靜な身體となつて、且つ一種病的な思想に捕はれるので、結婚を怖れ異性を忌む様にどうしてもなり易い、小説に描かれ新聞に散見する所謂現代の女性は、一として此典型を外れるものがない、嘆かわしいことと思ふ、私は此の様な女性を憐むと共に、疲れて倦んて而も何の慰藉をも女性から得能はぬ、現代の男性に同情せずには居られない、優柔不斷な男子をみて男らしかれと希ふ私は、現代の女性の多くに慊らないのであります、然しながら我邦の女性は過渡時代にある、今暫し默して醒めた女性を許する時を期待してゐやうと思ふ。

利いた風なことを言ふと叱られるかも知れませんよ、けれども實際時弊に的中してゐる議論です、少しむつかしすぎるのがいけません（評）

海上　　名古屋　きよし



○「美人草」口繪の評

伊藤曉子

オヤマア表紙の畫の美くしい事。美人草の中に立つた少女の全で夢でも見てる樣な恍惚としたまなざし。引き締まつた口許私は何となくなつかしく感じました。そして何時か本詩で當選せられた何誰かの「あゝひなげしの花散ると―」と云ふ新体詩をつと思ひ浮べたのでした外形よりも内容をとはよく云ふ言葉ですが、私は外形の美と云ふ事にも大に氣をつけねばならぬと思ひます（勿論内容が劣つてもいけませぬが）其外形の如何て其物全體に對する感想がちがつて來ますから。私はどうか今後とても美しい表紙をお見せ下さる樣、希望いたすのでございます。

草の花もほんとうに美くしい私が本誌を拜見いたし始めてから此位麗はしいのは今までになかつた樣に記憶いたして居ります。

ページをはねますと、誌友の方々のお寫眞がズラーとならんて居ます。先づ私の目を引いたのが野村光子樣どうしても都のお方は御樣子がいゝ、殊に／＼秀いてたオをお持ちのお方は、優しい中にも何所か高尚な沈着な所があると毎號の御作にてらして、ほと／＼感心いたしました。木村國枝樣はちつと計りすましてゐらつしやる樣てすが、堅林八重子樣はも少し寫りが明瞭てあつたならば如何計りかお美しいだらうと存じました。かく見て行きます程に、私は私が此間當市の三好屋へ買物にいつた時、かつて本誌の誌友の俤に出て居た〇〇樣の御姿が美しい彩色繪端書となりて他の藝妓のそれと並んで店頭にかざられて居た事を、思ひ出した。それらは如何かは存じませんが他人の寫眞に自名を附して雜誌類に出す人もあると云ふ今の世、私は人の心が分らなくなつたのでした。

次は何れも涼し相な水邊の景色、分けてよいと思つたのは觀音瀧と與津（オキツ）の海て、かゝる夕、かの巖頭に立つて海の歌でも口ずさんだならば其愉快さは如何計りてございませう。

次のうつしゑの中て特に面白く感じましたのは渡部るい樣と望月清樣の御姿て、多分山家の風俗てせうと思ひますが、私はハイカラな洋裝やお袴の姿よりも、かゝる特殊の風俗を拜見する事が何よりうれしいのでございます。いろ／＼と妄評ばかりいたしましたがおゆるし下さいませ。

短文

編輯局選

規定　十六字詰七行以内、總て振假名を付くること、締切前同斷、懸賞は丙種に據る。



天 ○伊豫太郎

安藝　手島まさ子

暑いと不思筆を投げると、「暑い暑い筈だよ見なさい伊豫太郎の高い事」と母様が仰る、松の隙間から向を見ると眞白ら綿を積んだように伊豫太郎が遙中天にかゝつて居る、伊豫太郎とは吾が町から伊豫の方面の動かぬ白い雲を云ふのである、此れが高い程暑さが烈しいと昔から云ひ傳へてゐる。

安藝の女、伊豫の雲、空、海、夏。

地 ○土窟

和歌山市附近岡崎村字寺内　岡崎さき子

妾の家の裏山は草計りて、四季可愛い花が咲いて澤山の蟲が住つて居ます、其南向の崖の中程に自然にできた大きな土穴があつて平常は色々の種子をいれたり。お蠶卵紙をつるしたりして居ますが、秋になつて身長に餘る花芒が石の扉に亂れかゝる時分は肥て丸々した子芋が此穴庫一杯につめられるのであります。

土蜘蛛人種絶えて幾千年。

人 ○お化粧

京　楠胡蝶

大きい鏡臺の前へすはつてぬれ手ぬぐひて顔をふいた。クリームを一面にぬつて御園の雪を手に取つてうすくして襟から顔へ……かみをかき上げて白のリボンをさしてやつと首から上のお化粧はできました。

印象派も自然派も入賞異議なし〱

秀逸

○スケツチ日

熊本縣　渚江

今日はどんよりと薄曇、好い寫生日だと午後の四時に家を出る、彦岳の旋を寫す、輪廓はとれた、色彩にかゝると雲が中々六敷いて後廻として木から畫く、まだ地面までも終ないのに夕の鐘が鳴る、風が出た。

明日の光線は又變るであらう

○三十日旱

福井縣　吉田梅子

二十三日前から人も燒け死ぬ程の夏の日が赫々と照り附て、下界の水氣を一滴なしに天が吸ひ取つたので、村一番の大きな池、春日池も太田池も空になつた、幾百丁てふ田地の命の池と云ふ、其の池の水は十日前から

なくなつた、がまだ雨は降て來ぬ、あゝ！。

出てよ文壇小町

○夕立雨　徳島縣　西野　花菱

「何だか暗いね」と、向合うて裁縫によねんなき妹に話掛て居ると「夕立だよ早く洗濯物を」との母樣の大きなお聲に、二人は大いそぎに、下ておいた着物を取入、南の窓から桃割と島田をすれ合して見て居ると、一人の男が頭をかゝえて走つて居たがピカリと光ろや、すそをクルリ顔に似合はぬ白い足を出して。

眼が早い

○寂寞　神戸市　近野ただ子

沼の汀の葦がザワザワと涼しい夕風に揺られ出すと。鶩が悠々と歸つて來るのてす。而して妾の家ではお風呂が沸いて吉や（老僕）がお孃さまと怒鳴り出すのてす。妾は此時に得も云へぬ程うら寂しうなつて、大膽て

御座いますが詩的と云ふ樣な戀がして見たくなるのてす。

想ふだけにして

○海　岩代　梨花

私は、未だ、海を知りません。只想像で見て居る斗りてす。川の水より濁て居て、池の水より青く、果てしなく廣いとは思て居りますが、水や空、空や水よりほかに陸が見へぬと曰ふ事丈けは、想像て分りませむ。

想像の海の方が深い

○罪の朝　下野　節子

培ひも遣水も、手一ッに生し立てた朝顔。窓を頼りと蔓はのびて、朝の風に涼しい。色に出た蕾の咲よくと願た今朝、紺靑の濃き一輪、枕かいやりし目に映た時。其時‥‥‥不思議接吻した。此世に生を得て美しく咲た露の命に。村雨ならぬ熱い涙が、無慘にも破れた其花に、ハラハラと降つた。

冷たい雷、温かい雷

○雷　愛知縣　永田舞鶴子

私の土地の人は、北國の雷は鳴り音ばかりて七日過ぎねば來ぬと云つて北の雷には餘り氣にかけず仕事をして居りますが、若しも伊勢地の方で鳴り出し升と、伊勢地の雷と叔父樣の牡丹餅は何時ても來ると云つて逃げ出し升。

雷の方がおもしろい

○我が文園の花　茨城縣　金塚ひと子

晶子先生が紅梅、小栗先生が山櫻、巖谷先生が花菖蒲とすれば、中村先生は白牡丹、夜雨先生が萩の花で、江風先生は菊の花。夫れから鳴雪先生は水仙の花てある。

諸嬢は野の花

○女神の船　福井縣　池上　小芳

野に咲く白百合の花に蘭の香を含ま

せ其の美しい花辨には詩を書きつけて御船を作り花に薫る佐保姫や綾の裳の秋姫水色の薄絹に雨をつゝむ夏姫に白き御衣の雪姫等をおのせ申して紫に匂ふ浪の上に楫を取りて見度う御座ます。

美くしいお御噺

○福紙　福島縣　野の花

私今年になつてから求めた本誌は、近所の本屋から買ふのも直接文壇社から送つて戴くのも、一冊として福紙のついてない本はありませんの、私の方では福紙があるときつとよいことがあります、私にはどんな好事があるでせう。

旅行、縁談、待人皆よし



お稽古　伊野文華とう

○姉妹の名　沼津　入代美代子

宅では苗字が數字で表はせ舛し、また姉妹の名が皆そうですの、まづ大きい姉が七三四、次が二三四て、末つ子の私は只の三四ですわ、それて此の姓名を悉皆よせた數は私が一番少數ですもの、私何だか眞とに殘念よ。

面白い發見

○繪端書　大阪府　寺部君子

繪端書の中でも、風俗や名所が一等好きな物ですから、澤山集めまして先日お友達をお招き申て、居乍ら日本の名所回りを致しまして誠に面白う御座いましたから、此度は世界の繪端書を集めまして、世界一週を仕様と思ふて居り舛。

少々時間がかゝります

○花立　山形縣　後藤敏子

坂本から最上に越ゆる山道の傍に花

立と云ひて昔或旅人が吹雪の爲に死だ所で今でも其處通る人は皆美しい花を澤山手向てやります妾も先日通りまして桔梗と女郎花を手向けたが其旅人が死ぬ時は如何に悲しかつたであろうと思ふと涙がこぼれました

無線の珠

○喇叭の音　伊豫　芳枝子

西の空が夕燒雲に染まつて、外濠に河骨の白い花がそよぐ頃、私はいつも二階の柱にもたれて、營所から響いて來る夕の喇叭の音を聞いて居ます。

いまましき夕、かなしき夕

○妙な心地　美濃　長良少女

もう向ふ岸は白く見えなくなつて、湯氣の樣な風が顔を舐める。空は常より奥深く、お星樣は遠く遠く薄つすりと見え若布の好い薫りが水垢の臭に雜つて來るんでしよう、搖らなく妙な氣になつて、目に見えぬ大きな人が居て、死ぬと妾を面白い所へ連れて行く樣にも思はれました。

誘はれてはいけません

○姉樣の御嫁仕度　ひさし

上着が黒に、秋田蕗の、裾模樣、下はお定り紅白の、紋綸子、藤紫に、枝垂れ櫻の長襦袢、帶は、厚板、光琳風、しごきのときもうつりよく、みんな三越の御仕立。

絹夜具、絹行燈

○不足税　小野つかさ

今日、或都の友から女學世界を送られました、處が、雜誌の表紙へ「暑中御見舞」と書いてあつたばかりで第一種郵便物になつたとて五十四錢取られましたの、頂きながら少々迷惑ですわね、姉樣方もお氣をおつけ遊ばせ。

飛んだお見舞でした

○夕涼み　愛媛縣　志女

味噌醤油の造り込みも終つたし、蒲團の洗濯もして了つた。狹い庭乍ら朝顔夕顔の眺めもあれば桔梗女郎花等も咲いてゐる。暑い〳〵午後の日かげも漸て西に傾けば打水に雫滴る樹下陰に一同打集ふての夕涼み、山や海濱へ避暑旅行などせずともそこに自然の涼味は湧くのである。

衣食足つて山河みな涼し

○瀑布　上野　大沼素女子

高さ三十丈、御影石を削つた樣な瀑布が落ちると、天然蓍然な白雲が持上つて來て、皆呑んで了ふ、忍草や金雀枝の生へた班の岩の中で、何う變化されるのか、躑躅の根を洗つて出て來る水は碧い…。四邊の老木が頻に語けれど少しも辨らぬ…

初はどう〳〵、後はさら〳〵

○試驗問題

本所　秋山　欣子

お櫃を洗ふ時、落し米をどう始末するか、が母様から目見え女中へ出る試驗問題です、始め來た辰といふのは水をしたんてぬかみそ樽へ入れました、次の芳は綺麗に洗つて屋根へ撒きました、お皿へ取つて鐵瓶へのせたのが今居る清、私は二番目のを好きましたわ。

其次の問題は

○私の町　備中　天の子

私の町はほんとに山の中で俗に摺鉢の底と云ふ稱へがある、新たに入來した先生が仰言いました五里先のステーションから來る時は何處に町があるのか知らあちらを見てもこちらを見ても山ばかりてと思つた、來て見ると實に好い處だ信州の輕井澤そつくりそこに崇高の念を起させる、而し慾を云へばも少し四方の山を向ふに寄しのけたいやうだと。

先生、評眼あり

○水もぐり　伊豫　福井白百合

ザブン、平和な海の面に白波をたゝせて眞逆樣に飛び込んだ、七八間向ふへ黑い頭がヌッと現はれると、後ろを振り向ひてにこ〳〵笑つて居る何んにも言はずに？

怪しや、人魚になつたか　評

○馬　北米羅府　合屋　岐子

私は渡米してまだ一年あまりです此一年の間に隨分に變りました、馬の一切の手入も致します、又馬にも自轉車にも乘ります外出の時には十八形の金側時計を兵隊さんの金鵄勳章の樣に胸に輝かして大股に歩みますがまだハイカラてはなくてよ。

マア何處まで行くとアメリカハイカラになるのてせう

○田舍の郵便脚夫　岡山縣　戸田　梢風

「御免下さい、郵便です」

毎朝八時頃になると赤の丁字の袖章を付た老年の脚夫が流れる汗を拭ながら云ふのです、妾は鞄の中から出す葉書や封書を撰分てやる、脚夫は涼みながら四方山の話をして必ず次の言葉を殘してトボ〳〵と門を出ます。

「左樣なら、有難う御座いました」

日に一便

○花　下總　越川津根子

妾は花が大好きであります、妾の庭には十五坪餘りの花園があります、妾は花なら何んな花でも好みます、妾は花氣狂であります、妾は每年種々の花を買つて植ゑます、妾は人に種子や苗を進上します、妾の花園には何時でも花が咲いて居ます、妾は野良に蝶々が居る時は、蝶々に花を見せて花園へ連れてきます。

花道樂の者なきを憾む

○女子の必要品

大阪市　春野秋子

高襟女子の必要品は。綾錦の御晴衣金時計金鎖、ルビーの指輪にダイヤの襟止、香油に大學白粉、洋傘に小間使、眞個の女子の必要品は、貞節の衣に沈着の時計、溫和の襟止に誠意の白粉、愛國の洋傘に自助の御召使だらうと思ひます。

後の品々を早くお買ひなさい

○森の奥　小石川　吉田　春子

護國寺の森の奥からさら〳〵と水晶の樣に清らかな水草の根元を洗って水が流れて行く一寸目を上げると合歡の太い幹にぶん〳〵虻が羽を摺り合せて居る蛙が一匹ぽちやんと飛び込んだ後は又ひつそりとして蟬が心地よげに鳴出しました。

○山　中津町　やま川

東に豐後富士があり西に英彥山がある、晉齋の窓から白雲の去來する樣、朝日に夕日に變る色を見ると神代ながらの心にかへる。

○起くら　宇都宮　木村孤村女

玉枝さんは筋向ふの下宿屋、私と栄興子さんは同じ下宿屋にゐます。何方も路に面した室、每朝起くらをするのです。それで早く起きた方では印をするために、大きな字で書いた俳句を障子に貼っておくのです、先日は玉枝さんに負けましたが、今日は負けないつもりです。

○夕ぐれ　麻布　幽子

何となく人なつかしい夕たゞ一人門にたゝずんで居りますと淡い淡い三日月樣が鎭守の御社の上に垣の夕顏と私の浴衣とが薄黑い中に白くはつきりと見えますお寺の鐘が夕暮の靜けさを破つて餘韻長く消へ、背田には蛙が鳴出しました。

○霧の中　廣島　美都子

籠で流したやうな細かい霧の中を私は每朝の樣に籠を脊負て裏山へと出かけるのです、けふは草を刈つて、桔梗、女郎花と色々取つて籠の上につけ胡蝶に送られながら歸つて來ます。そうして夕方には妹の君ちやんをつれて亡き母上の御墓へと。

○色黑　群馬縣　須藤みどり子

妾のお友達は皆お顏の色が白い。妾の顏のみは淺黑い。どうした譯でせうか？お友達の部屋へ行つて見ると机の上や箪笥の上が香水や化粧水の瓶で一杯に飾られてあつて佳い香がプン〳〵する。妾の部屋は本や雜誌の叢と墨と藍インキの香がするばかり、化粧水の瓶なんか見えた事ありません。

○實戰談　東京　朝倉　笑兒

日露の戰爭に名譽の負傷てふ額に紀念を有つて歸鄕した決死隊勇士の一人、集ふ村人の爲めに語り出した實戰談に夜は更けて日本武士の爲めに氣焰を吐く萬丈、激氣激して額の創痕ヒリツと動いた。

○好と嫌ひ　或一小女

髮を結ふのとお湯へ入るのが最も嫌ひで髮を結つてお湯へ浴した後は身も心もさつぱりして最も好きです

滿開の花を見るのと悲哀小說を讀むのが大好きで花の散つた後は陰氣で小說の讀み終へた後は何だか飽き足らぬまだよみ度い樣な氣がして眞實に嫌ひです。

○つばめ　宇都宮　文女

何日も暗い中からチユチユ喧しい燕が今日に限つて靜かなのに、少なからず疑を懷いて、梯子を掛けて其の巢を覗いて見れば子供達の影は少しも見えませずたゞお名殘として尾羽が一葉落ちてゐました。

○故鄕の夜　靜岡市　根岸　良子

涼しさうな新月が、繁り合ふた林檎の葉陰を洩れて、其中からさら〳〵こ噴水の音が靜かな夜の平和を破つて、不斷の樂を奏てゝゐる。と、白百合の幾莖、露と散く噴水を浴びてゆら〳〵と左右にゆれ、綠の葉から ふるい落ちる露は月に銀色に光る。

○懐かしい　肥後　蓮園　女史

みやーみやは妾の守をした女だ。既う子供の二三人もある齡だに、何所へ嫁に行つてゐるのやら。

靈咲く野っ鎭守の杜陰に、負さつて聞いた、子守唄はまだ耳に殘つてゐる。あゝ懷かしみや、其のみやは非常に妾を可愛がつてくれたに、怎うしてゐるのやら、會て昔の話がして見たい。

○小さき滿足　根室　白雪

だいてやつても負つてやつても居ても立つても

泣きやまない、余程お腹がすいたのであらう。いよ／＼持て餘してしまふが一度母親の手に渡ると夕立の上つた様にぴたと泣きやんでさも滿足したといふ樣に別に乳を飲まうともせず、膝の上でにこにこいたずらしてゐる。

○病氣の色々

神戸　高橋　紫峰

お父樣は常に私の病氣は黄金丹を一服も飲めば忽ち直るとおつしやる、兄樣は食たい病氣、私のは女子文壇に投稿した文が沒書になるのもかまはず駄作をして見たいのが病氣、さて姉樣のは青白い顏して物思ひに耽つていらつしやるが何の病氣か?。

○化粧水

大連市　林　正子

母樣はキメチンキを兄樣は美顏水進兄樣はゼームス水を去年いらつしつた嫂樣と横須賀へ嫁らつしつた姉樣は四季の花を大阪へ嫁らつした濃姉樣は二八水を大學にいらつしやるハイカラの久姉樣はレートを使つて居られます、私は何がいゝでせう。

○好きな景色

四谷　綱野田都子

私の一年中で一番好きな景色は春にありますの!太陽が西の海に沈むで西の空一面赤と紫で色取られて丁度油繪の樣な處に遠くてお寺の鐘のなるのと一緒に櫻の花が露と間違られる程散つて來る其の景色を見ると心がほ——として妥りますの!!!

盆踊り　陸奥　松尾ちよ子



○かへり道　福島縣　光　子

夏の夕方お使から歸る時です雨上りなので道は惡し、空中には蚊がワア／＼居るし、大きな犬に吠へられたり、なか／＼困難でした。暖い我家迄には未だ危い丸木橋が渡られねば行かれないのです。

○菜豆

上毛　納　尾　子

叔母樣から菜豆の種を五つ戴きましたすぐ蒔いて二度肥料を與へましたら一月後の今日つるがくもの巣のやうになつてずらりと實が下りました明日は郡農會長の視察だからそれを料理して御賞露を上げるやうにと父上に命ぜられました上手にしたいが。

○白茄子

土　佐　萬　佐　子

毎年母樣を助けて作る茄子も今年は意外によき出來て隣の翁にもうらやまるゝことである昨日も大きなる白茄子二十餘を或る翁に贈りしに其うつりにとて掌大の赤鯛數尾をくれた白茄子が赤鯛に化したと母樣はほゝ笑まれた。

○皆米國

宮城縣　小野寺りよ子

妾の兄妹は三人であります大い兄樣は今年二十八歳米國に行かれまして より八年になります小い兄樣は二十四歳昨年の八月米國に行かれました大い義姉樣も小い兄樣と一所に米國へ行かれました家に居るのは九十になるおばー樣とお父樣と二人の小供と妾ばかり誠に淋しうございます。

○湖畔の涙

陸　奥　葛卷りさ子

夕暮、靜なる湖畔に立つて、湖心に映る雲の變化を見詰めてゐた自分は、何となく物悲しい感が簇々と涌いて來て、思はず玉のやうな涙がほ

ろり、鏡のやうな水に落ちた。

○お友達　山口縣　深山鶯

私の居ります處に同年のお友達が三人ありましたが、其内で島子さんは昨年秋の酒家へ、鶴子さんは今年太田の農家へ何れもお嫁にゆかれましたので、後には菊子さんと私と只の二人限りになりましたが、菊子さんも私も何うしても家を出る事の出來ない者許りなんであります。

○夕顔　神戸市　久野のゑ

夕顔の花が三つあるので今日こそはきつと、開くのを見ようと思て、見ゝ居てもなか〳〵開かないそれでも餘念なく見て居ると、母様がおよびになつた、御用をすまして來て見るともうすでに開いてしまつた。

○私の樂　韓國　東内よしの

私は一つの箱を作つて之に一錢及三錢切手や繪葉書の立派なのを買つて來て入れ、偶にはお金を入れ、時には和歌等作つて紙切に書いて入れ等して月末に其を出し、切手やお金は郵便貯金に、繪葉書を册に、和歌等は文壇に皆それ〳〵投ずるのです。

○夏の朝　攝津　壽賀子

餘程早く起きて南北の雨戸も障子も明つぱなして、南のゝ椽柱にもたれて涼しい風に吹かれ吹かれして居ますと、青い〳〵稻の上を吹き流れる朝の風は、かすかにいとかすかに山寺の明の鐘を傳へて來ます。

○男學生　土佐　初雪

私の國の男學生は、小學より中學の生徒にいたるまで、冬は紺の着物に紺袴夏は白き麻布に紺袴之を膝より凡そ七寸位あがりたるところまではいてゐるのです。それでよく揃い又實に活潑です。

○鳥　相模　鍋田美代子

私の家内がまだ寢てゐる内に、裏で鳥が鳴いて起してくれるのです。實は毎晩背戸でお米を研ぐ時、わざとこぼしておくのです。そして毎朝早起をするのです。

○私が宿　下谷　田代小夜子

前は鏡川を距てゝ一面の青田、眞中に眞白い道路が只一筋見えてゐます、後方は仙人瀧に續いた嵯山で、到る所湧出る清水は小川になつて瀨戸を流れてゐます、魚類はないが野菜物なら何でも、胡瓜が欲ければ西の畑に、茄子が欲ければ東の畑に、而かも清鮮きものばかりです。

○畑作り　徳島　ゆかり子

父が病氣で一月計り入院しましたので、其後を弟と相談して瀬山ある盆栽はいためない様萬端の世話を二人の弟が受持ちました。私は少し計り茄子や胡瓜を植ゑてある畑を草一本生やすまいと日日つとめて居ます。

○今ですよ　京都府　向井美津

嬉しさに轟く胸をヂツト抑へて美くしい卓子の横に立つた、寫眞師が「サア今ですよ」と聲をかけた時何思つたのかニツコリ笑つた眞面目になつた時にはもう撮られた後であつた嗚殘念。

○花の中の花　府下　森田きよ子

私は小學校の夏季家庭週覽の圖畫帖を見ましたが、取り分けてお隣りの芳子様の桔梗の花がよく出來て居ました故私は「帖中の見物や美くし桔梗花」「うるはしとゝへば答へん週覽の帖に咲くなる紫の花」「胡蝶愛らし圖畫とも知らず止りましたよ桔梗花」此三つを芳子様の許へ屆けてやりました。

○白菊の池　下谷　太田はま子

妾の故郷は嵯峨ですが家の後に小さな池がありまず昔し白菊と云ふ孝女が沈む父を救はうとして共に溺れた處といゝますが此夏久振で歸省して見たら池を埋めて家を建てゝしまいましたあゝ懷かしい白菊の池今は地の下で泣いて居るでせう。

○露　神戸市　みなしご

嗚今夜は何故、此様に亡母様が戀しいのでしやう。庭のアカシヤがみ空高う聳えて、露を含んだ葉がそよ吹く風にゆらいで居ます。何處からともなく、死の美を讃ずる歌が聞えて參ります「嗚私も天國へ……」ふと空を仰げば星が瞬いて、アカシヤの露がほろ〳〵と私の髪にこぼれかゝりました。嗚露？

○靨　土佐　葉村

靨とは顔面の或る筋肉と或る筋肉との隙へ空氣の壓力により皮膚が陷入つたものだ、又云ふ、微笑めば頬に溢るゝ片靨、花と云はんか、月とたとへんか、實に乙女の命は靨なりと、前のは醫學生、後のは詩人。

○夏の夜　堺市　京谷薫子

奇麗な一片の雲もない涼しい涼しい夜である月は滿月風は緑葉を渡て來る心地がよくて「これ

お宣ておればえ」と弟の聲「圖畫や水の必要はないと」笑つた宅より「早く寢なさいと」母の聲

○臼搗　　紀伊　木下　操子

私は昨晩夜業に臼搗をしながら偶然此樣なことを思ひました、人の成功は丁度此臼搗をする樣なものてはあるまいか、遲くとも絕えず飽かず撓まず搗いてこそ始めて米が甘く白むのてす、激しく一時に搗いて遊んて居つて又激しく搗いたりすると米は碎けたり、臼が破れたりして甘く白まないと、

○待遠い事　岡山縣　奥山千代野

本誌の發行、暑中休暇、試驗の成績發表の日、旅行に出掛ける夜明方、急病に醫者を待つ間、便の遲い時、それから……下手の長談議の終る迄と芝居の幕の間、

○うれし　下總　大和田勢津子

家の母樣はいつも下手な文學なんかするより裁縫を〳〵と申されますので母樣の御出ての時は成る丈致さない樣にして居りますの夕べは用達にと妹をつれて出掛けましたので、一晩机を友と致しましたほんとうにうれしゆうございました

○野の人　熊本市　江添ちじ子

枕摩野の古つぼけた冠木門の一軒家に可愛いゝ人が居る。阿蘇子ちやんと云て今年五ツ。濃藍メレンスの單衣に黃色縮緬のシゴキ。眞紅の巾廣いリボンて黑髮を束ねてある。七十路の坂を越た白髯の老人に手引かれて時折白銀の月下に逍遙するのである。

○桔梗　靜岡縣　天野さん子

桔梗！何といふ優しい花てせう　すら〳〵と伸びた梢にふくよやかな蕾。中には小さき〳〵蝦のおはすかと思はず蕾の蝦を排けても見たうございます。私は靜然と开の蕾を眺めてゐましたするとふつと仄かな音がして花は開きました。秋の晨てす。

○晝寢　京都市　よし尾

暑くて寢られぬ儘に、姿は又寢反りをした、ふと河原の方を見ると、此炎暑をも物かはと、甲斐〳〵しく働いて居る人々、こなたて石をわけているのは男、女は其を運んて居るらしい。

○私の住居より　下野　黑須輝子

那須溫泉へ四里、鹽原溫泉へ六里、日光へ十九里。そして一日の往復は日光が一番らくなのよ。

○我が故鄕の愁　宮城縣　大町はな子

北上川が8字形にうねつて居る處とて、一すした出水にも直ぐ堤防が壞れて海の樣、それも今年て七年、疲弊に疲弊を重ねた細民は、南京米ても煙が立たず、親子兄弟散り散りに、涙ながらの旅稼ぎ、ひた降り續くなが雨の、梅雨の此の頃、殊更に、約千人は吐息片息。

○寄宿舍の夕　石見　中村富江

夕食がすむといつも秀子樣と運動場に出て「故鄕の空」を歌ふのが常て有ました。私は今病の身となつてそのなつかしい故里に歸つて居ます。今となつては反て二人て歌つた時がこひしくあります、昨日も秀子樣の御手紙に今は共に歌はむ友もないと。

○水　越後　あこがれ女

清き流堀拔井戶、水を自慢の我町にわけて金剛谷に湧く淸水は名高い。土用に入つて此二三日めつきりくみに來る人が多くなつて、殊に宵は騷騷しい鶴の湯に近ひせいもあらうが愛らしい悲色りボンやら、艶めく上浴衣やら、さては洋杖の書生、印半纏の哥兄など。中々に興はある。

○夏の海　石川縣　岡田とく子

私の村は日本海に望んて居ります非常に恐ろしい荒波も夏になると急に優しいおとなしい小波に變りますてすから夏になりますと袴穿いた書生樣や廂髮の女學生風の人が澤山海水を浴びに來ます。

○釣瓶の花　愛媛縣　富永屋壽榮

私の家には草木を植る地がありませぬ故、古釣瓶へ江戶菊を植えて、屋根の上の干場て育てました、花實の簇の中にもまだ見えぬ此頃釣瓶の中には美しい藤色の花が咲きました、三本の中朝露を含んて殊更艶な二本を去年なくなられた姉上のみ前に供へました。

○忙しい私　神田　森　千代

もう三月ばかりて私も十七になる、今年中て縫入を三四拾枚縫つて、二絃琴も布袋位上げて御花も初許位まて勉强しなくては、そして白木へ二度、白牡丹へ二度、松屋へも二度位は……あゝ忙しい、忙しい、忙しい……

俳句

内藤鳴雪先生選



◉規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は丙種の規定に據る。

天

空高く大星飛んで秋に入る　群馬縣碓氷郡坂本町　藤橋君代

地

泣いた袖笑うた袖や土用干　上毛群馬郡桃井村大字長岡岩田仙五郎方　岩田やす子

人

妹の水まきくれし涼みかな　埼玉縣兒玉郡本泉村太駄　茂木花子

秀逸

開墾の野に茶を煮るや雲の峯　肥後　平瀬榮子

夏の夜は涼む人みな美しき　釜山　富永清子

ほし棹や床しき誰のぬの浴衣　近江　橋村つね子

下京や雪の上來る若菜賣　越後　堀一葉子

筆の穗もうら枯れにけり秋の雨　千葉　深堀輝子

大凧に驚く牧の小牛かな　神戸　山本みどり

酒飮まぬ人もあるなり花の山　千葉　羽山みどり子

百合きつて社前の水を濺ぎけり　播摩　井澤みどり

此池は河鹿もなかず日の暮るゝ　みち子

張板に榎の實こぼるゝ夕日かな　麴町　奥田とよ子

吾妹子がいちごに染みし口凉し　上總　野口菊子

山一つ越え來て桃の畠哉　安房　内木白雲

花すゝき招き出したる今日の月　安藝　西原梅與

明月に迷ひ出たる蜻蛉かな　筑前　田中とよ子

秋の月人なき島を照らしけり　相模　飯島登美子

虫は灯を取らんと廻燈籠かな　岡山市　河原ます子

住みかへて御室の里や冬を待つ　岡田房子

朝寒の音力なや秋の鐘　尾張　岡田信子

背の籠に夕日の映ゆる花野哉　四谷　笹原清子

古杭に水草かれぬ秋の川　備後　井登年子

城の石工默して暑き日や　兵庫縣　田城主計子

青嵐馬の顔ふく麓かな　大阪府　春の家

朝寒や女工百人聲もなし　滋賀縣　ホワイト、メイチレット

鐘撞て暮れゆく秋を惜しみけり　大阪市　田宮濤

行く秋の小箱に古りし戀かな　和歌山　岡崎さき子

三つ二つ唐茄子椽にほされけり　宇都宮　文女

二人してきぬ裁つ人や風薫る　伊豫　曉子

素袷の人は立ちたり梨花の月　伊豫　芳枝子

おとなへばあるじはあらで蚊遣哉　大連市　林正子

青々と草の芽長し夕月夜　新潟縣　川崎良枝子

名月や島へ鳴きゆく山烏　相模　柏原美奈子

雨晴れて南瓜棚の夕日哉　福井縣　吉田梅子

峰入の下れば町の灯かな　岩代　笠間松江

四五日の旅面しろき青田哉　下総　愛花女史
裏の田に友を尋ぬる水鷄かな　佐渡郡　じゆん子
來る秋の男にもろき涙哉　静岡縣　森木つた子
咲きさがる蹊に殘る暑さかな　大阪　宇和島豊子
松風の吹くはうき世の榛かな　千葉縣　山崎とよ
舟上る人暮れにけり枯柳　遠州　井口増子
宵闇の空見上るやほとゝぎす　府下　萬千田
朝顔の心も知らぬあされかな　備後　桁月
蟬鳴くや寺へ詣に行く子守共　大阪府　岡崎文子
七夕に手向けの歌やいものつゆ　熊本縣　高根ちか
館侍奥侍衣ほのめきて青簾　大阪市　春野秋子
つゝがなき蟬の命やかへり花　福岡縣　石川けい
日盛りや木の下影に子守唄　神田　森千代
宵闇の岸につなぎぬ涼み舟　岡山市　今東琴子
水は皆都に入つて温みけり　近江　梅女
松虫は闘鷄の上鳴きに鳴　兵庫縣　石田好枝
柴の戸を叩く小雨のふる夜かな　伊豆　加藤爲子
空晴れて月となりけり芋の露　熊本縣　山下白菊
石ばかりころがる河の暑さかな　富山縣　夏子
やゝ寒き湖上に雲の去來かな　常陸　村野春洋
打そろひ舞妓がかざす扇哉　茨城縣　黒田秋甕子
夕立の水あふれけり籠川　備中　姫美子
草刈の利鎌と涼し秋の月　千葉縣　はつれ女
咲き初るきくや旭の登る下　岐阜縣　山口鈴子
雷や十王堂の遠灯　札幌　蝶蛾忍子
釜狩人の燃笛戀そめぬ　常陸　坂本みき子
亂れ咲く蒲たんぽゝ垣根哉　北海道　小林喜代乃
窓あけて月を友なる蚊帳の中　岩代　泉花枝
花茣蓙濡思はぬ軒の雨やどり　露花
秋立つや風なきに動くくもの網　香川縣　神津あき子
軒風呂に一葉散り込む山家哉　奈良縣　中垣芳子

涼しさや川原に白き月見草　札幌　由子
湯浴して月を明りの化粧哉　牛込　長谷川はな子
秋風や海苔をかこつ明石女郎　本郷　山崎ふく子
山寺の大鐘うなる野分かな　紀伊　今坂やよ子
白牡丹金蝶飛てくづれけり　千葉　金子夢見る子
夕蛙妹の下駄の上に在り　静岡縣　野菊子
山北や流に沿ひて避暑の窓　茨城縣　西野春萩
涼しさは池のあしまの螢かな　川名すみ子
吹きならふ祭の笛や秋ちかし　茨城　貝塚峯子
井戸替へのすみし夕や椎の雨　羽前　加江子
涼しさや月に舘のおき所　神戸市　右田玉人
夏の月青葉の中を出てにけり　南葛飾　松操子
灯の消えて厠てきゝぬ雨の音　大阪市　春せつ
下界なる灯を餘所に星契る　陸奥　葛巻圓七
夏山や千丈の瀧に神遊ぶ　大阪　鎌田春枝
染山や五尺の瀧に風薫る　常陸　村野靜子
薫風や酔ひて其角の欄に倚る　神戸市　小谷たま子
涼しさや眼に月耳に水の音　京都市　大井順子
薫風やうぶすな祭り二十五座　下谷　石井波子
留や行手に高き伊勢の山　東京　横井春子
紅薔薇に狼の手刺しゝ月夜かな　神戸市　みなしご
夏山や山鳩なきて黄昏る　上野　本多美美子
移り住む家新らしき夜寒哉　石川縣　業波とく
上弦の月は卒都婆を照しけり　下關市　新田俊子
草刈の顔にまつはる小あぶ哉　遠江　藤野すん女
はた中にうりころ〳〵と蟋蟀かな　名古屋　横亀女子
朝の雨百合の香蚊帳に迫るなり　安房　吉田やす
稲葉や乳母ゆく坂のなつかしき　神戸　車木愛蓮女
看經の聲女らし秋の寺　大阪　鹿島あやや子
玄海やゆくてに崩る雲の峯　長崎市　松尾かづ子
桐の葉を拾はんとすれば蟬の殼　伊豫　白ばら

實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以内用紙も締切日も前同斷、懸賞は乙種規定に據る。

天

○星祭の日に友に送る

羽後酒田寺町　菊池りう子

ダイヤやルビーなど—そんな貴い寶石は私は見た事もないのですが大方はこんな物だろうかと思ひました、園樣、今年はね、お星樣にあげるフライの番に私があたりましたの、四時と云へばあの花市へ行かなけりやならないでせう、で私は今日は二時すぎに起きましたよ、そして畑に出てね、お茄子や馬鈴薯やさゝげなどをとつて、それから去年根を頂いた粟盛草が盛でしたからそれも手折つてとふれましたら露がホロ〳〵こぼれてそれが淡い沈みがけの月に光つて輝いてね、私は其時まだ見ぬ寶石をみたのです、そしてね何と云つていゝか、虫の音が靜に——。私は其時之ならいつも早起に限ると思ひましたわ、それから家に歸つて市に行く仕度をしてね、お茄子やおいもを洗つてきつて油やメリケン粉などを揃へてる間にだん〳〵明くなるの、そしたら爺やが眠さうな目て起て來て驚いて私を見てました、可笑しかつたの、弟を起して家を出た時には眞赤な雲があちこちに浮いて日が昇る所でした、市は去年より淋しい樣でした、私のかつたのは桔梗、薄、菊、白百合、あぢさいなどです、貴女にお逢ひ申かと人毎に注意致しましたが遂——遂——。後で思ひつきました、昨夜はお兄樣の御歸省の日だつたのを——。どうせ今夜はお願ひ致しても「七夕の曲」は駄目と思ひますから何とも申ません、此フライはね、市から歸るとあの自稱士族の落武者の爺やを相手に作りましたの、ヂリチリ沸えたつ油の音を聞くと只てさへ堪へ難いのをもう自分も油であげられる思でした、突然末の弟が、姉樣石川五右衛門は苦しかつたろうねと申ましたの、それから爺が話し出してね、爺は大の五右衛門贔負でしてね、フライが出來てしまつても爺の話は盡きなかつたの、ホヽ、誠に不出來なのですが何卒お兄樣に差上げて下さいまし左樣なら

（評）冒頭の句先づ力あるインテレストを感ぜしめ、讀みゆくにつれてそれよ殘んの月に輝く露と答ふ何たる妙ぞ何たる才ぞ。全篇才氣横溢し、以て人を醉はしむ。至文といふべし。

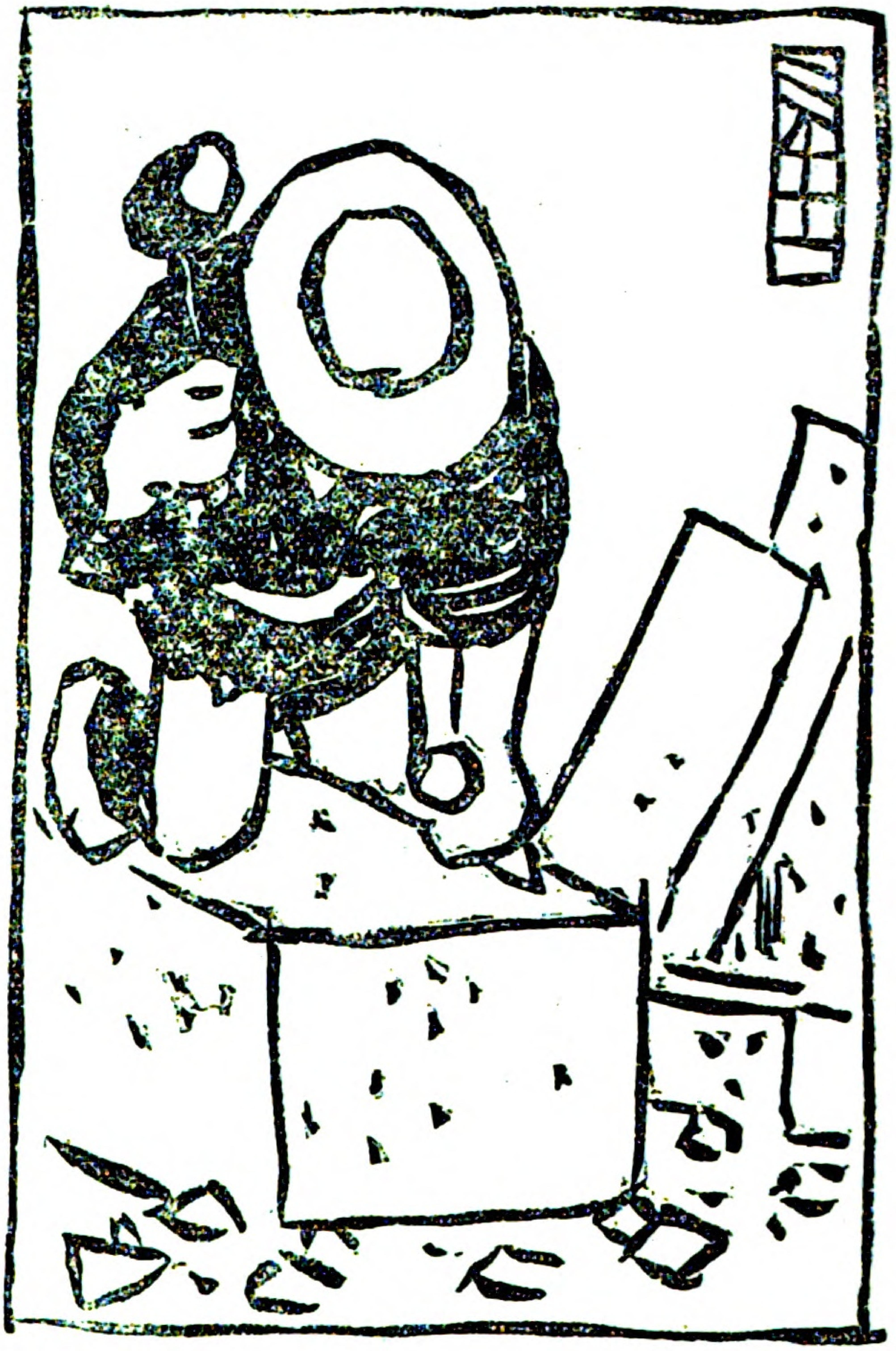
地

○放蕩なる従弟へ

尾道市向島 強子

静夫さん、非常に暑くなりましたねえ、貴方のお宅には、皆樣御無事でゐらつしやいますよ、毎日あなたの、錦をきてお歸りなさる日を、指をり數えて居なさる母上樣を始め、母上樣をお扶けになつて、あなたの學資金を作るに、日夜身を粉にして働いてゐなさる俊子さんも‥‥‥。

あのねえ靜夫さん、妾は、今日、しみじみ世のあじきないのを知りましたのよ、十九歳の今年、今日、始めて知つたのですよ、それはねえ、まアこうなのです、妾が今朝、顔を洗ふて、前の小川の堤をさ迷ふてゐましたらねえ、朝日をあびて、露の瓔珞をひからせて居る一枚の月見草が、月は見ずに、朝日を拜してゐたのですよ、その花の美しさと云つたらねえ靜夫さん。其花の中に、黄羽の蝶が一つねむつて居たのですよ。折々ふく風に、月見草は露を宿したまゝ、ゆらゆらと搖ぐのですけれど、蝶の夢路は、いづこの空を迷ふてゐたのでしようか、容易に、さめようともしないのです月見草の飾りに美しいものですから、書齋の瓶に挿そうと思ひましてねえ、



石屋　岡崎町　近藤道江

手を出したのです、ですのに蝶は、なを、ねむつて居ましたので、あまりのいぢらしさに、接吻をしようと、蝶に近づきました、處がねえ、靜夫さん、其羽根から、黄色の美しい其羽根から、毒粉がとび散りましたのよ。本統に物は、見かけによらぬものですわねえ靜夫さん今の世は、笑ふのも本統に笑ふのではないのですよ、又泣くのも、本統に泣くのでは無いのですよ。口では綺麗な言をならべても、心の内には魔がすんで居るがの當世の人なのです。清く〱見える流れでも、底は濁つてゐる世ですよ。靜夫さん〱注意なさいよ。

（評）美しみもあり、力もあり、情もあり。寧しろ滋味もあり。凡筆にあらず、望むらくは結尾の文今少し深刻なれかし蛇尾に終るの譏あり。

秀逸

○里だより（第一）

大阪　木村素江

花にこそ名は愛でられて候へ水清き早瀬にさゆる月影に秋涼しき初秋の眺はこゝも吉野の里より姉よりの文遣ひ嬉しう思立ちては今朝まだきに夢の都を旅立申候有明月の入る山の端も重なる雲に掩はれてあはれ折角の旅なるにと恨めしう感ぜられ申候ひしが柏原過る頃より雲は次第にちぎれて嬉しき日光の照りそめ申候田の面は實豊に見廻の農夫の面も輝き居候ひき暗峠過るまもなく早乗り替に急ぎ移れば程なく着きし吉野口驛。身はこゝより車上の人と相成申候なれぬ山路の心もとなくともすれば傾く車に魂を冷しては下車せんと迫りて供の者に笑はれ申候峠こゆれど左手はまだ高くそびゆる山續き右手は川沿の藪を隔て、早瀬の音は手にとるばかり行き行けば人もわれも汗しとゞなる眞晝時上市のはづれに着申候久方振の對面にとやいはんかくやと思ひ亂るゝ程にはや車は止まりて候

只夢心地、勸めらるれば浴して欄干ひくき高樓に打寛ぎし時の樂しさは・・・只御察しにまかせ候こゝにも早瀬の音の響きてそゞろ心の押へ難きまゝ打つれてさまよひ出申候

名にし負ふ吉野川を渡るとすれど水清み底の眞砂も落ち行く鮎も數へらるゝ許なるにふと佇めば板橋の巾狹ければゆきこふ人のたゆたふにと姉にせかれて惜しや渡りつくし候渡りしてこゝは飯貝の御坊の門の松蔭に候よ手早く組みてくまなき月にうつせしものは別紙に御座候

危げなるは今し渡りし橋にて、橋の向ふ麓ゆく滊車の如きはわが上市の町に有之候右手に黒く高きは妹山にて淡くしてやゝひくゝ峯ばかり寫るは背山に御座

候。中を流るゝ吉野川せゝらぐ音の寫すよしなきこそ根に御座候へ
明日は吉野の山深く南朝の昔を尋ぬべく以下は第二としてきこえ上べく候第一の里だより先は右のみ
あら〳〵かしこ

(評) 輕快の筆、匆卒簡なれど其の狀をつくす、さるにても第二の御たよりこそ床しけれ

○歸省せぬ都なる妹の許へ

井上從波

荷車の轍にも胸を轟かせて居たが今朝の御手紙を見て少し落付きました。御歸省なさらずに御勉强とは何よりてすが水郷の當地てさへ九十度以上の今日此頃よく注意して病氣になどかゝらぬ樣にして下さい。田舍の堅くるしい話のみきゝ倦きた私は歸つたら珍らしい都の物語に冷した西瓜をかぢり乍ら夜を更さうと弟が取ると云ふのを棚の隅にかくして樂しんで居ましたが：：：口にこそ出さないが母樣も失望して居るらしい「體を惡くしなければいゝが……」と今朝から私の顏を見る度にくり返して居ます。母樣と云へば今度私達に妹か弟が一人ふへるんてすよ、昨日秋元の伯母樣が墓參りにおいてになつて例の口調で「布袋の水入よろしくだ」と云つて皆を大笑させました。美イちやんが冬休て歸る頃はもう笑ふ時分てせう。

先程井戸の水を汲んて居ると不意に訪れたのは新家の辯さんてした昨夕歸つたさうてす。眼鏡をかけて髮をきれいに分けて書生風の去年の姿は影も殘つて居りませんてした。「美代さんが歸らなければ尺八を吹いても相手になつて呉れる人がない」と云つて笑つて居ました今夜は月が良い。今妹をすかして行水させたところてす。「美イ姉樣が歸る時は千代田草履を買つて來るなんて姉樣は嘘ばかり云ふ」と此頃はこんな事を云ふ樣になつて今朝からだゝのこね續けてしたが夕顏棚の下の大盥へとび込むともう忘れて仕舞つて中に映る月を面白さうに眺めて居ます。

美イちやんが去年種を播いた月見草は棚の周圍に繁茂して今も微かな響をさせて月に仄白く咲きました。この一片て今夜の樣を忍んて下さい。

父樣は今朝富士登山の途につきました明後日頃は頂上のスタンプのついた葉書が御手元へもとゞく事とぞんじます。左樣なら。(八月二日)

(評) 團欒の樂しき裡に田園の趣味さへ加ふ都に留れる人いかに歸心を促しけむ

○海水浴場より

京都 濱部風窓女

母さま、當地へ參りましてから早や三日となりました、一同無事愉快に日を送つて居りますから御安心下さいませ、今朝お隣室の大阪から來て被居るお夫婦連れと

私達とて一艘の漁船を雇ひまして鰯釣りに行きました大變面白う御座いましたからお話致しませう、鰯釣りは太陽の出ぬ前でないと取れませんとの事なので丁度五時前に一同起きました、凉しい〳〵朝風を受け乍ら田舎草履の輕いのを穿いて一種の詩的？な香のする白砂を踏んだ時の心地は何とも申されませんでした、列を揃へた幾百の魚船は墨繪の樣に遙か水平線に見えてまだ遲れて漕ぎ行く船はぎい〳〵と威勢の能い音をさせ乍ら活動寫眞のやうに過ぎ行くのです、私共もそれ等に加はつてゆらり〳〵と浪のまに〳〵沖へ沖へと出ました、釣る道具は細い糸に小さい針が七八ツ三尺許り間をおいて付けて餌は無いのです、魚夫に聞くと太陽の出ぬ内だと海中が暗いので鰯はピカ〳〵する針を餌かと思つて喰ひ付くのださうです、船が段々と進んで澤山な群の中へ入ると魚夫がさあ針をお投げなさいと申しましたので先程から今か今かと腕を擦つて待つて居た一行は我一と針を投げました、馴れた者は手答えが有るさうですが私共には迚も解る筈が有りませんもうよかろうかと出鱈目に糸を引き上げると釣れました、三寸位から五寸位なのがピン〳〵と銀色に光つて丁度提灯をつないだ樣に上つて來る嬉しさ、第一番が弟で二番が私、妹は嬉しさに慌てたので糸がこんがらがるやら針が喧嘩するやらで大騷ぎ、お隣りの旦那樣は什麽なすつたのか些つとも釣れ無いので大笑ひ、暫くの間に船中は鰯で足の踏む所も無く成りました、其の中にたつた一匹だけ鯖が取れましたが耻かしい程小さいのです、是は下手な旦那樣がお釣りましたので「俺は違つたものだ、鯖を釣つたよ」と得意然として居らつしやる可笑しさ、偶然暑く成つたので東を眺めると太陽が薄絹に包まれたやうに登り始めましたので船は靜々と岸を指して歸り出しました、他の漁船では舟歌を唱ふと當方では負けずに軍歌を唱つて六時過宿へ歸りました、早速、鰯は食膳に上つて來ましたが其の美味は迚も形容出來ません、母さま、早くゐらつしやい、黒い元氣な顏でお迎へ致します、一同は一日も母さまが早くお越し下さる事を祈つて居ります。

（評）淀みなき筆のゆき〳〵、面白う書かれたり

○妹を失へる人に　よしの

あはれおなげきのほどを推しはかり參らせて聞えあぐべき言葉も御座なく候、承り候へば御妹子樣には厚き御心盡しの御看護も其かひなく父上姉君の御なげきをよそにして遂に亡き數に入らせたまひぬるよし、彼れ先だつは世のならひに候かも、實に定めなきは世の中とは申せあまりに情なき嵐に候はずや、室にはぐまれし夢のはなのまだ咲きあへぬあしたはやくも誘ひ候とは、かなしともかなしくちをしとも口惜しきは此事に御座候、母君在まさぬ後はたゞ御身一つに引き受けて

看護遊ばされ候ひしを、一度は御快ようならせ給ひし御喜びはあだにて今日の御なげきに遇ひたまひし御心の中御痛はしとも何とも申さん樣御座なく候去年の秋訪ひまひらせし折見遂えまつるばかり快ようならせて御手玉などとり居たまひし御姿わ、なほまのあたりなる心地して夢とのみおもはれ候をましてく御許樣今頃はつきぬ思ひ出に御袂かみしめをはすらん、さては老いませし御父君への御孝養今よりはたゞ御一人の肩にかゝる事となりし御つとめ重さにつくぐ御心細さのおもひたどりておはすらん、その御かなしみも御憂ひもさる事ながらいまとなり候ては たゞ只管御身いとはせ給ひて御父上樣の御心安んじたまふこそ、世にましては父君への御孝行、はた逝かせし妹君への御手向、母上樣にも草葉のかげにいかばかりか嬉しう思し召し給ふ事と存じ候。さらぬも永き御みとりに御つかれも候はんにあまり御なみだにくれ給ひては大切なる御身そこなはせ給はんかとかげながら御案じ申し居り候、何とぞあきらめ難きを御あきらめ遊ばされ御身に恙なき樣くれぐれ祈り入り候、御まのあたりよろづ聞えまつり度く候をあまりの事に其勇氣は御座なく候、おぼしやらせたまへ、いづれ其うち御墓參に御供つかまつるべく候かしこ。

(評) さして新らしき趣にあられねどなほこれまでに書きなされたる筆老熟の境に入れるにあらずば能はじ

○仲よき文子樣のもとへ

京都市 武部柳葉女

文子樣御暑くなりました事ねエ御變りなくつて毎日暑い暑いと云ふ事が口ぐせになつて寄ると障ると暑い暑いて持ち切りてすわ早い事ねエ丁度去年の此頃てしたわ文子樣が御病氣て濱寺に御靜養中時々御尋ね申しました時海邊に遊んてゐらつしやる方を見なすつては早く彼の方の樣に成りたいつてネヽ、御手を引いて四五足歩むと青白い御顔から玉の樣な汗を御流しなすつた白砂の中から大きな松の生えて居る根元へ掛けては休みましたね、妾あまり御氣の毒て心の中て泣いて居ましたわ其れて今夏は面白う遊びたいと思つてねエ御母さんに願つたの、したら文子樣と御一しよならと御免しを戴いたの文子樣ゐらつして？兎に角失禮なんてすが手紙て先御伺ひ申して置いて何づれ準備の都合も有りますから其内に御邪魔さして戴く考へなんてすの文子樣考へてゝよ妾文子樣がゐらつしやる樣にと神樣に御祈りしてゝよネヽ、さよなら

(評) 何となく情のこもれる文なり、

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は丙種送呈



天

萎まぬものならあの合歡の花房にしたいよ振袖の

お孃樣が歌ふ

滋賀縣甲賀郡佐山村　林　さだ

地

鳥も歌うし獸も走る私一人に何の罪

女學生が歌ふ

日向南那珂郡吾田村字西弁分　甲斐玉　うた子

人

二百十日で風吹くならば稻のお花が散らぬよに

田舍娘が歌ふ

信濃埴科郡寺尾村柴　小林喜美子

秀逸

下野　手塚たへ

○月にむかへば友達思ふ星にむかへば父母思ふ

横濱　佐藤みき代

○人は可愛とて野の花摘めど私しや可愛くて摘まれない

信濃　太田喜志子

○吹けよふけふけ山越しの風にや海の香りが乘ってこやうに

和歌山　加藤重子

○わしが姉さんお山に御座るお山松かげ地の下に

埼玉　はなその

○野越え山越え湖越えて嫁に行きたい里がある

大阪　きやう

○銀のブローチ落した蝶の羽があるやら飛んだやら

伊豫　白ばら

○天女の盃垣根に落ちて其處に朝顏咲いて出た

東京　花枝子

○山をいくつもいくつも越えて能くも出て來た大都會

西多摩　森田しま子

○月にこがるゝ都の方にお目にかけたや武藏野を

芝　多美子

○昨夜夢見た嬉しい夢を投書したのがみんな出た

長門　藤井顧子

○今日は故鄕のお祭りなれど私しや他國で畑をうつ

若狹　早水その子

○むかふ三人こちらは二人川をはさんでテニスする

◯ 君がこゝろを底まで見るにや月になるより外は無い　岐阜市　篠田とみ子

◯　沼津　渡辺とよを
清いけれども月夜はきらいなぜか私は悲しうなる
◯　下関市　辻本愛子
遺花はなれてお庭の草に蝶も自然が好きらしい
◯　下野　黒須鄰子
なぜか痩せたよ隣りの嫁御田植つかれか夏痩か
◯　豊後　鮫月女
飛んで行きたや更科田毎今宵十五夜月を見に
◯　伊豫　稲井白百合
去年笑ふて着せたる着物今年しや涙の土用干
◯　清國大石橋　菅波鶴子
貫與戴き二人て分けて二人笑合ふ仲のよさ
◯　岩代　泉はなえ
明けりや敵入なぜ夜があけぬ短か夏の夜まだ一睡
◯　大阪府　金田芳子
和泉名物温州蜜柑今は紀州にまけませぬ
◯　大阪　森なら江
勤め終つて踊りの途の橋のたもとて月を見た
◯　東京　赤木よしの
投書するとて鉛筆二本書いたほうぐが四十二枚
◯　成田　すみ子
妾しが自作を色紙に書いて紫家七夕の星祭り
◯　芝　村山文子
うすい嶺のとんれる越へて文の都えひとり旅
◯　備後　椚月
役者／＼と口では云へど銘のまはらぬかなしさに
◯　埋女

草刈る鎌にもしやと想ひ心きはめて折つた百合
◎　熊本縣　高根ちか
天の河原を七夕姫は君と二人て渡ります
◯　伊勢　杉田たか子
蠅が綴いた踏街道も今は樵夫の通ひ路
◯　能登　川岸小百合
螢どこ行く此夜更けて星の使ひかきら／＼と
◯　はぎ
七草よもぎは摘んでもみたがよめ菜ばかりはまだつまぬ
◯　牛込　平塚白百合
薪背負ふて山路を下りや尾花の末から月が出る
◯　駿河　大石みれ子
夢は逆夢ゆふべの夢のさめて今朝見る無事の文
◯　奈良市　清水雪軒
萩の葉末にゆれ合ふ露を風がはら／＼吹きちらす
◯　紀伊　田中文子
ゆきは一尺身丈は二尺今年五歳の子の衣服
◯　伊豆　小澤香芽子
天の河原の七夕姫の舞に見とれて落た星
◯　松江市　高城夏子
散つた櫻で盥の月をそめておきたいいつまでも
◯　上總　松崎かつ子
朧月夜に白百合の花が寂しい姿を呼んで居る
◯　備後　野の花
嫁に行く様な年にもなつてまだに戀しいよ乳母が家
◯　豊後　花園舎栄葉
人の都に花賣る小女かごに草木の花模様
◯　山形縣　後藤敏子
田よく出來田も上作て盆に浴衣も買てもらた
◯　千葉縣　花馨子
妾や夏姫さ絲衣眞白野百合は花髻

滑稽談

編輯局選



十六字詰七行以内締切日は毎月十五日、懸賞は丙種。

天

○御面會　　岐阜縣山縣郡千疋村　中村澪子

彼の口の悪い露子さん、突然妾の耳へ口寄せて、「今チお玄關へそれはそれはハイカラな廿二三の女の方が來てゐらつしやいましたよ、前髪なんか一尺も出してチ何だか厭な方よ」、此時後のドアーを開けて半分顔を出した雪子さん「露子さんお姉様が御面會にゐらつしやいました」、「オヤそう妾後姿見た許りよ」

地

○上手になつてから　　岩代國猪苗代町　宇月すえ

或所に大そう注意深いお母さんが有りました次郎さんが水泳に行かうとするので「又お前此間のようになつたらどうするの上手になつてからお出てよ、」

人

○英語　　大阪　紫泉女

或時小僧主人に向ひ「且那様私大きくなつたら洋行してえらくなりたいと存じてゐますがアメリカの英語とイギリスの英語とどちらが學び安いで御座いませうか？」

○思ひちがひ　　横濱市　千代香

お父様と過る年八丈島へ行きました時旅館でにんぎをなつかはれれば宿は出來ぬと二軒ことわられました最後の家でも同様故父がつかあると申した故私は案じて居りますとやがて下女がさつま芋の煮たのを山盛持つて御飯前ににんぎようを使いなさいと置いて行きました。

○舶來　　澁谷　柳雪

此間私が近所の下駄屋へ買物にまゐりましてあれこれと撰つたあげく「これがいゝけれども、あまりねだんが高すぎる」と申しましたら下駄屋のお婆さん「これはこう見えても舶來品でございます」

○一枚　　和歌山　岡崎さゝ子

甲女「あら貴女の浴衣は美うて柄のよいこと何店でお買なさつて」、乙女「白木屋で十圓で買つたの」甲女「あらそう貴女の御姉様も白木屋で買つたんだつて昨晩此通りなのを召して居てよ」

○お隣り　　伊豫　芳枝子

姉様と二階で裁縫をしてゐますと、下で馬鈴薯を焦がす匂ひがします、又竹やの不注意な「馬鈴薯が焦げくさい」と、つひ大聲で云ひ放ちましたが大變！それは自分とこでは無くて、お隣で焦したのでした。姉様は「感じの強い者は違った物れお隣の迄がわかるのだもの」

○見たまゝを　　香川縣　瀨高やす子

貴女りぼんが落ました傍に居た田舍の年老らしい人をつきのけて恭しく捧ぐるはハイカラ紳士有難う女學生は輕く禮をのべて受取たやがて開札が始るとキップが紛失したとて大騷ぎして居る人は先程の紳士でした。

○下女　　阿波　中村かつ女

私がお友達の家へ、毎日幾度となく下女をお使に遣るので、下女は大層うるさがつて。ある日又遣ると、お手紙を渡した後向ふへ「どうか又幾度も來なくても好いやうなお返事を下さい」

○云ひ方　　小石川　三宅恒子

知人が中學卒業と云ふ時長男を失くなされ二月後に、生れた赤ちやんが男でしたら、出入の大工が「且那、惜しい事なさいましたれ、同じ男でも、丁度丸太流して、コツパ拾つた様なものてさあ」つて。

○地理學　　埼玉　失名子

教師「今度樺太の半分が日本へ附屬した爲め如何なる結果が生じましたか」生徒「日本地理の課程が大きに面倒になりました」



天 紀州蜜柑

紀伊和歌山市久保丁二丁目　加藤　重子

紀州の蜜柑か、蜜柑の紀州か、其紀州ても、殊に有田郡は、本場中ての本場、最盛期になると、滿目たゞ碧毛氈の上に黄金の珠を、數かぎりも無く撒き散らしたよう、其場て喰べるのなら、何人を問はず、サア〳〵お喰りなさいと、無錢て喰べさしてくれる。蜜柑の乏しい土地の人は、定めし嘘のように想はれるてしよう。

以來、紀州へ住みたいと云ふ人が澤山出來るでせう

地 好き〳〵

沼津上土町　八代美代子

柿は澁柿の澁をぬいたのが好き、蜜柑は皮のキチンと付いたのが好き、葡萄は汁だけ吸ふのが好きて海棠は全躰をかんて吐き出すのが好き、そして林檎は赤いのを頰ずりするのが好きて、梨は皮をむいて上るのが好き、桃は木から取るだけが好きて、苺は私熟つてるのを見るのが……、好きてす、

此女、愛すべし

人 桃賣娘

大阪市東區空堀通二丁目高岸つれ方　紅女

「桃、百合が山に咲く頃になりますといらんかい――」と艶かしい聲が處處に聞え升是れは私の古里より三里程山奥から來るのてす其所には澤山の山桃の立木が有り升熟し升と鳥よりも先きに起きて一個づゝ取るのてすそして十一二から二十二三迄の娘達が毎朝二三十人程連れ立つて桃賣に來升斯樣に毎年くりかへして賣たお金は貯金として嫁入時になり升とそれて己の好む物を買ふのてす

秀逸　趣味多き果實賣

○節句前

大阪府　寺部　君子

私の方ては九月のお節句前に成ると少女が樂し相に色々の色糸て、可愛らしい網を編むのてす、そしてお節句に其中へ赤い柿や靑い蜜柑に色の好い柘榴や栗など澤山入れて、小さい弟や妹に提げさすのてす、常なら可笑いてすが、此日は却て持たぬ小供が淋し相てす。そして遊んて居る内に一つ出し二つ出して樂んて喰るのてす。色々の網の中へ、色々の美しい果實を入れて有るのを見ると、さながら繪を見る樣てす。

○聯　想

岐阜市　篠田とみ子

私は何に限らず果實の皮をむく毎に私等人間ずつとの御先祖樣はお猿や熊公と一緒に、こんなものをばいどりあうて、皮もむかずに食べられたのかしら、と思うと云ひ知れぬ感じが起きて參りまして、一人ニコ〳〵微笑むのて御座いま

すそして大いなりてがぶつとかぶりつきますと、其の物々によつて異る味が忘れられません、けれども何はどんな味がするとは人に話した事はありません否よう申ません。

○東京の果實上

總　齋藤　秀子

此の梨一ツ八錢、柿一ツ三錢、栗一合四錢、お、高い高い、故郷ては梨がやつと二錢、柿は八皿位て栗も一合一錢位のものなのが……まあ何んと高い〳〵、梨つたら半分は腐つて居て身持ちが出來ない柿も澁柿て中には虫がうや〳〵してゐる、是れを見ると氣持が惡くなつて御飯が食べられない栗も生なのだか煮たのだか知らぬがまるて三年も溝の中へもぐつて居た様な色艶……。おゝいやな東京の果實。

○栗拾ひ

備後　澄　江

私は朝起きると背戸のお山へ栗拾ひに行くのが例てす、少さなかごを手にさげて着物の裾を一寸からげ露の多い道の草をふみわけながら來て見ますと、大きな〳〵色のよいのがころつ〳〵と二つ三つづゝ草の中にころがつて居ます私は其れを拾ふては入れ拾ふては入れしてかごに一ぱいになる迄は一心に拾ひます、此時が私一番うれしうございます。

○秋を味へ

和歌山　岡崎さき子

秋ぎり流るゝ朝の野に得たる黒露の様な野葡萄、猿に知られぬはて〳〵しい裏山の落栗、大門寺の庭て拾つた三角の銀杏、宅の周圍に果樹園て出來た紅玉の御所柿に大口を開いて笑つて居る様な柘榴の實、そして御好な猿柿も入れてよ。

あらあたし未だわすれて居てよ、寿形山て貰ちやんが採つてきたアケビの曲玉の様な可愛形のを五つ同封してよ、秋な味はつて下さいな。

○天津桃

麻布　幽　子

「ほんに今日のお晷い事風がちつとも御座いませんてれまあこれてもお一ツ」と大きな丸器に赤いてからの澁桜はガラスのお皿に美しく盛つた天津桃を御取上げなさる銀のナイフが動くとすらすら細く長くつゞく紅の皮丁度リボンの様ま白なお手にはお指輪がちらときらめく

○嫌い

横濱　佐藤みさ代

私は天性果實が大嫌ひて何の實ても一切食べません、けれど人に皮をむいて上げるのは大好きてす、そして月のよい晩など家内中お縁側へ集つてお話をしながら、露の流る桃や紅色した美しい林檎など甘味そうに、食つて居らつしやる中て私計は、おいしくない蒸菓子など食べて笑はれて居るんてす

○七本の梨

本所　秋山　欣子

私を非常に可愛がつて下すつたお祖父様は、そろ〳〵秋が近くなると、裏庭の大きな梨の木の下へ立つて、「今年は大分熟したぞ、初ちぎりには俺を新に揮ませやう」なぞと被仰る程の梨好ていらしつたのが、私が七ツの時閻を病んてからは、ついぞ召し上るのを見なくなりました、伺つても只御笑なさる斗てしたが、十の時御亡り遊したので私は七本の梨をお墓へ植えました、年々美事になりますが一ツも手をつけません、大粒な梨がホロ〳〵落ちる下て、私は昔を懐ふのをせめてもの心遣にしてゐます。

○好きな食べ方

兵庫縣　かつえ子

先づ第一が西瓜、大きなのを繩にからんてちよろ〳〵流れる小川へそつと沈めて、午後三時頃に裏の木かげて大きな板の上にぼと〳〵と水のたる西瓜をのせ、やがてざくつとばかりまつ二つ、

次が梨瓜夜の中から水に沈めて、お鉢頭水から上て皮もむかず、氷の様になつたのを口からしづく流しもつて食べるのが一番に好て御座います

○栗の貯へ法

美作　み　ち　子

栗を正月まて生栗にしておかふと思へばよく山や川邊にはへてるセキショウと云ふ植物を刈つて來まして栗をそれに包んてつとゝとしてかわきのよい土地を一尺位ほつていけこむておくのてすそうするとお正月には甘味が多くなつてほんとにおいしくて珍らしいてす

○果物の色

岡山縣　千　代　野

葉の落ちて曲り曲つて居る枝に熟する柿は赤色、谷間を暢げて居る栗はと見れば網て圍まれて其色わからず、畑にある袋をかうむれる梨は狐色、垣に卷きついて居る李は洋紅て染めた様、ことによいのは林檎……ホテルなどの電燈の下に飾られて光澤した綺麗な色を放ちて居る、

○家　族

靜岡　幸　　子

お父樣と私は、西洋風て、林檎が、大好き、お母樣は昔風て、桃がお好き、兄樣は學生上りて、林檎ても桃ても梨ても栗ても柿ても密柑ても何てもおつき合なさる、姉樣は何故だか、蜜柑がお好き、弟の武坊はきらひなものなし、てすけれど木になつて居るのを取つて來て皆なに、見せつけるのが、一番好きてす。

○腐敗した林檎

陸前　谷間百合子

果實と申せばなんても嫌なものはありませんが殊に食べるよりも香が好きてす。それて私はよく熟した林檎を、机の引出へ入れておいて、いつも其香をかぎ乍ら勉强致します。ながく入れて置くと、それが腐敗して一層よい香がしますの、蒸さるゝが如き夏の暑さも知らずに机に向つて居る事がたびたびてす。

○柿

和歌山　岸みどり

私は柿が最も好きてす、五個位は食べられます、秋になつて葉が落ちて黃色いみが七八個古びた木になつて居るのは何ともいはれない興があります、和歌山邊ては五六個なつた盆栽は五六圓も價するそうてす、お死になされた子規先生は非常に果物がお好きてしたとの事、御生前にきれいな柿をお送りして上げませなかつたのは殘念な事と思つて居ります。

○夢にでも

豐後　とみ子

六十餘りにもなつて果實を一切食べた事の無いと云ふ父の娘てありながら、私は果實が大好きてあります。もう其名を聞いてさへ聞きのがしの出來ぬ位て、「よしや三度の御飯は二度てもよいから果實を」と思ひますが、當地は餘り多く御座いませんのて殘念てたまりません。どうぞ、一夜の夢なりとも、ありとあらゆる果實の成つて居る山へ行つて、思ふ存分食べ飽いて見たいのてす。

みとり　熊本縣　本田道子



○賣り聲

磯千鳥

私の國は長崎てすが實に賣聲の面白い處て浦上と云ふ田舍から女が賣に來ますが之等の多くは（クリスチヤン）て日曜には一人も賣に參りません又至て正直てすまづ柿を（カツチユーヲツチユイ）蜜柑（ミカンヒヤイクヤーゴヒヤー）梨（ナシヤナシヤイ）栗りやようござんすか桃はお買いまつせんか葡萄はお入りまつせんかお買いまつせお安——しときますだいの——おかおつさま——奥樣のこと。

○最終の微笑

福島縣　泉花枝

六月の中旬過病むで逝き給へる兄樣の死ぬ十日程前に、頻に鳳梨食べたいと仰る。どうかして上げたいと町から在から他人樣の家迄お尋して見たが遂得られなかつた。其節間も未だか？と幾度かの催促、詮方なくて十里程の市街へ使を頼むだ。漸う翌日の暮頃着いて、鑵の蓋切るももどかしく上げましたら、一口食べて見て、『ああお甘い！』と苦しげな顔色に幽に微笑れた。是が最後の笑顔となつた。今も座敷に鳳梨の香がする？

○嫌な果實

芝　しげとし

去にし年田舍でお友達と山遊びに行きまして桑の未だ熟さないのを取つて食べたら其の翌日急に病み出して五六日の間何を食べても返して隨分苦しい思ひをしました其れからと云ふ者は桑は見るもいやです。

○迷信

岐阜縣　澤子

私の方では、屋敷にビワだのユズだのを植えると、年中病人の絶間がないと云ひ　又、家の表にはカリン、西にはカシの木、裏にはクワの木に、ナシの木を植ると大そう家運が榮へると申して居ります。それはこうゆう故なので？表では金が貸りん、西ゑは貸す、そして裏面には何の苦も無しと云ふのだそうです。

○交換

大阪　西戶政江子

妾の故郷は近江ですが毎年秋になると伊勢の山家からたくさん栗を持つて衣物や足袋のお古と交換しに來ます錢とても換えて與れない事はありませんが衣物や足袋の方を喜びます、妾の十二三の時なんか古足袋を五足もやれば栗の五合もおいて行きましたその又栗の味が大變よろしいので弟などとよく喧嘩したことも御座いました。

○たとへば　牛込　平塚白百合

葡萄が戀にゑひてゐる、乙女とするならリンゴは、世の塵にそみない十四五の少女であろう、栗は山住の女、梨は町家の娘、無花果は失戀の佳人とても、そして柿はいやしい女、色がよくても澁いのがあるから。

○初もの　失名

果物の初物を食れば七十五日長命すと云ふ事を幼な心に聞て居ましたが其時分母が重病にかかり十日の長命も覺束なしと醫師の話を聞き大急ぎて其年初めて結びし柿の實を母に食べさせましたよ何て此位いの事でなき命ののびましよう遂に草葉の露ときえました其後柿の實が熟みますと眞先佛の前にそなへて後たべますのですよ

○秋　熊本市　近野春子

もう落ちる計りに、熟し切つた前庭の大柿の實、一粒毎に紫の玉でも聯れた様な、裏棚の葡萄の房、眞黒いお歯黒つけて、秋を笑ひ顔の小山の栗、あゝ——その甘そうだ事。幾度夜半の風に育ても、此の樂しい秋迄には、れ實に離れて、苦心したてあろうかと思ふと、今の今迄何一つせず、怠けた我身の不甲斐なさが沁み〳〵胸にこたえました。

○發明　神奈川縣　小林英子

寫生なさいと出された林檎あゝ何といふよい色でせう。私は湯上りのお孃さんの頬の色に似てゐると思ひました。この林檎が三百年の昔アーサイサック、ニユートンをしてあの大發明をさせたものかと私はつく〳〵感心しました。

○家の周り　弘子

栗垣隙まばらに、若女の恥らふ頬の様な西林洋檎が有、乳母やの乳の如なのが出る無花果も有、湯殿の窓から梨が飄々顔出す、私の室の外に栗林が有、隣家の嫁さんが「實ても燒いても喰はれぬ奴は姑婆奴と栗の毛毬」と小聲て唄つて居たつけ、葡萄、山梨、石榴、まだ種々有るが最も多いのは柿て屋敷内に四十本餘山に百本、甘柿澁柿さまざま。之が我家の秋の樂園の一部でムいます。

○私の嫌いと好き　豐後　梶原清子

秋風が立つ頃になると町の果實屋には脊熟の柿の山澁い油紙を柿模冠りの栗、厚い皮着るシヤガタロー、薄い皮着る源皮蜜柑、九月九日を待つ栗、皆な嫌な者ばかり。私の好きな極く好きな紀州蜜柑はまだ着かぬ。

○吾家の果實　土佐　初雪

家の後には千坪あまりの果樹園ありて、栗柿蜜柑杏いくり葡萄などが空地なく植えられてあります。其花を見ては美くしひと賞め香を嗅ぎては芳ばしいと思い實を食しては味よきといひ、一家は樂しく日を暮してゐます。

○秋の野　信濃　山越悦子

柿が色づく椋鳥が鳴く、林檎が熟す梨が熟すつく〳〵坊師がなく石榴が醇裂る、葡萄は葡萄色に美くしくなる桃の實が眞赤になる赤蜻蛉が畫地の悪い程飛んで居る秋は田舎が一番よい風の吹く日には栗を拾ひに裏の小山へ暁ちやんと。

○いろ〳〵　常陸　木村那賀子

殘暑い夏の日に井戸へ冷した、マクアは清くして好く、栗は口當りは好いがあとにカスが殘るので閉口、七間四方の棚に、藤の花が咲いた様に房々と下る葡萄は美しく、秋の朝早く起き出て裏の屋敷栗を拾ふのは樂しみ、生れてから食べた事がなくつて嫌ひなのは西瓜、皮が黄色で中が赤、見るからに氣味の悪いのはレイシ、ですが皆果實は知らない方があるでしよう。

○栗の栽植　茨城　大久保てる子

栗はどんな所にも成長しますが、特に赤粘土火山灰土壌粘土に適します、栗は新梢に開花結實するものなれば、枝梢の切斷を忌みます、施肥としては、宅地田畑の周圍等にあるものは與へざるもよけれど、果樹園として栽植したる時は採果後又は寒中一回人糞尿などを施すがよろしい。栗は幼小の時大に伸長するものなれば、移植の時大根を切斷すると同時に、枝梢を剪定するのがよろしい。

學校生活

天 ○三匹の犬

廣島縣備後國沼隈郡赤坂村　佐々木しづか

私が通つて居る學校には赤黑三の三匹の犬が飼つてありますが何時も小使が慘酷な事を致しますのでもう骨と皮計りなの、それで私は毎日御辨當を少し殘して三匹の犬を後の井戸の蔭へ連れて行つて先生にかくして食べさせて居ました處が今日先生に見つかりましたので吃驚して御詫びを申しましたら先生も莞爾々々として何も云はれませんでした。

地 ○雨の日

滋賀縣愛田郡志津村山本　宇野ふき子

あゝ——又嫌な雨の日です、教室は薄暗く丁度夕方のやうで、あちらにもこちらにもポタリと雨がもれます、出口の傘棚は屋根がないので生徒の傘がぬれたまゝ澤山つんでありります、吹降になると下駄箱へも、しぶきがかゝつて下駄がぬれるのです、恁麼日は學校に居ても何だか心が陰氣になります。

人 ○五年の子

安房丸村石堂　岩波櫻子

よく炭の請取り等を書いて貰ひにくる助八爺が、此四月からこないので湯に來た時、聞いて見た、豆絞りの手拭をしぼりながら「へイ助三が五年になりましたのでハ……」と嬉しさう、私も笑つた、嗚呼村の學校は立派な教育家を出さずとも好いと思つた。

○田舍の學校

日本橋　天鳴澄代

尋常二年の時でありました、父は無學の者ですから、やつとしても私に讀め書けと申します、けれども私は村の人の苗字さへ出來ないものですから先生に頼んで名頭を書て貰らへと云ふのです、私は何となく恥かしいので、たのむのはいやでした、或る日の事父が學校に來て先生に頼みました、其時先生は私を呼んて、お父樣はこれ丈けに注意ふて居られるのですから、熱心に勉强して字を覺えなくてはいけませんよ、と云はれた時私は父と先生が何んとも言へない有りがたい樣な氣がしました。

○十年前の月謝

ひさし

十年前郷里の小學校の月謝の定めが變つて居りましたからお話し致します一年級が僅二錢二年級から四年級迄が八錢で高等科が十九錢です一家から三人以上通つて居れば一人が全額を納め次が半額あとは無料で教授して與れる定めとなりました。

○夜の體操

伊藤芳枝子

寄宿舍では冬、炬燵を入れられませんですから其の反動とても申しませうか、就寢前に体操をする事が流行ります、それも消燈の鈴が鳴つて部屋が眞暗になりますと、お月夜などは光の洩れない樣に、窓掛を張つて寢衣に着更へ思ひ〳〵の所に立ます、すると誰かゞ先頭になつて一二と呼稱をかけますと、皆それに和して思ひ〳〵な体操をするのです。そして大變はげしくしますが、疲れますとお休みなさいと早々床に入り込みます。

○行儀が惡い

青山　寺田深雪

私が學校へ行つて三日目修身教授中前の生徒が先生と呼びますから、何ですかと云へば今の話を早速應用して、角谷さんは後なんか向ひてお行儀が惡いと申しますから、あなたは角谷さんより前に居てどうしてお分りですかと云へば、眞面目で僕一寸後向ひて見たのですつて、私思はず吹き出しました。

女醫顧問

東京女醫學校長　鷲山彌生

○窓の使用法　室内には五十名の小供が居り、春夏秋冬寒暖計の温度により如何に窓を使用せば空氣の流通よく、風邪の憂なく學ばし得べきか、華氏寒暖計に依りて説明を乞ふ。（四間に五間の室内て、教壇より向つて左側の外廊下に五個の窓を有せり、同じく内廊下にも五個、右に同じく五個、その上に回轉窓八個あり。（福井、女教師）

『答』　本欄を設けて以來の最も主旨に適ふたる御質問てす如此御質問ありて初めて該欄の價値が現はれるのてす。健全なる人の生活に最も適したる温度は華氏の六十四度てす隨而夏は暑きに過ぎ冬は寒きに失するは申す迄もありません故に窓の開閉も之に應じて行はんければなりません御記載の如き窓を有する造構なれば光綿の射入空氣の流通に最も適したる校堂の樣察せられます夏の日は窓及び回轉窓共盡く開放し置き春秋は回轉窓而已を開き冬の日は單に空氣交換の目的にて授業開始前十五分間正午休課時間に十五分間各々生徒の室外にある間に於て回轉窓而已を開放したきものてす要するに六十四度を標準となし可及的此温度に接する樣の方法を御取りにならるゝのが宜敷のてす。

○引きつけられる樣　私は一月程前から本や新聞を聲立てずによみ又、裁縫など仕て居ると引き付けられる樣に睡くなつて十分もぐつすり眠ると何者に驚いた樣にがばと起き上ります、すると今迄の事がぼうつとして丸てゆめの樣てありますが夫が日に三度もあつて夜はいつまでもはつきりいたします、て別に睡眠不足と言ふのでもなく、身體もごく丈夫てありますがやはり何か病氣てしようか。（夢見娘）

『答』　精神過勞し結果神經衰弱を起し居る樣てす一ケ月間程裁縫をなさるとか新聞を讀むとかを御廢し被成可成立働き而已に從事なさるゝが良いのてす。

○肋膜炎　妾は肋膜炎を病み三ケ月程治療いたし、一時全快しましたが又十日前からこの病に掛つて居ます、肋膜はこれて三度てすがこの病は結核の前兆てすか。（十八歳娘）

『答』　肋膜炎に罹りたる人は多く肺結核若くは腹膜結核に罹り易き傾きがありますが恢復期に際し充分なる攝生法を行へば免がる事が出來ますれば醫師監督の許に食養生と氣候療法とを御續けなされたし。

○沃度鐵舍利別　沃度鐵舍利別とはどんな病に用ゆる藥てすか。（失名）

『答』　沃度鐵舍利別は貧血性の人又は腺病質とて「るいれき」の出來居る人肺結核に罹り易き人等に用ひます然れ共胃を害し易き藥てすから醫師の指揮の許にあらざれば濫りに飲まないのが良いのてす。

○神經痲痺　私は數年前より神經痲痺に罹つて種々療法をしましたが却つて病勢進行の傾があります、今頃は醫師監督の元にレプロールを服して居りますが一向きゝ目がありません。何とかよい療法はありませんか。（半身不隨のお賴女）

『答』　神經痲痺と云ふ御質問にては何れの神經痲痺なるや了解に苦みますが半身不隨女なる御名前なれば之を本題として御答へします然れ共年齡が解かりませんから當惑致します半身不隨にて最も多く來るものは腦溢血と云ひ俗間中風と申す病氣てすが之は四十歲以上の人に多く來ります其他腦「エンボリー」或は「ヘステリー」等に起ります之は比較的若き時に來りま

す甲の脳溢血は治り難い病氣ですがこの「エンボリー」又は「ヘステリー」性のものは適當の療法を加ふれば癒ります其療法攝生法等は此一小欄に掲くる事は出來ません醫師の治療及び監督を受けんければなりませんが何れの原因より來る半身不髓にても相當の時期になれば電氣療法は最も効があります。

○吃逆　私は朝夕ご飯の濟んだ後、よく吃逆が出て困ります、如何言ふ譯でしよう、又止む迄そのまゝ置いても差しつかへないでしようか。（芳枝子）

『答』　吃逆は横隔膜と申して胸部と腹部とを界する膜の痙攣に依りて起るものでして胃病か又神經性に來るものです貴孃は多分胃病ならんと想像します何れにしても捨て置くのは宜敷ありません醫師の診察を御乞ひになり適當の治療を御受けなさるのが良ひのです。

○就寢時の體位　寢る時は右左どちらを下に仕た方がよいでしようか。（浪華女）

『答』　左胸側には血液循環の根本たる心臓を存してありますれば可成右側を下になす方が良いのですが最も衛生に適したるは仰臥です。

○耳だれと創痕　私は小さい時から耳だれが出て、未だに癒りませんで困りますが如何すれば宜う御座ますか、又創痕の黑くなつたのは癒りませんか。（愛讀者）

『答』　みゝだれは慢性症になるときは容易に治療するものではありません根治法としては身体及び精神の安靜を要するものですから入院治療が最も必要です然して少なくとも半ケ年以上の日子を要します。皮の剥けたる跡の變色せしものは日月を經れば自然脱色します御心配には及びません。

○如何すれば　妾は生付色黑の上、大變日に燒け安い性ですが、如何すれば白くなりますか。（福岡色黑女）

『答』　牛乳を一日三合宛飲み又朝夕牛乳にて顔を御洗ひなされば比較的白くなりますが先天性に黑き人は余り極立つ程白くはなりません。

○腦病　妾の夫は四五年以前より腦が惡るいと言つていますが、それでも躰は非常に肥滿してゐて、時々便所で立ぐらみがします、それでも服藥もせずに居ります、どうも心配ですから療法をお敎へ下さい。（布哇、想夫女）

『答』　肥滿して腦が惡しき人は四十才を越ゆる年齡になれば腦溢血と云ふ病氣に罹る患へがあります現在に於て豫防法を御講じになるのが最も肝要です、先づ第一に精神の安養を計らんければなりません夫には精神を勞する事業にても從事し居らるゝなれば之を御癈めになり家庭に居ては終始慰安を與へらるゝ様御注意なされ目下布哇に御在住なれば風土氣候の良き本國に御歸りになり家計の患へなき様想夫女たる妻君には專ら自營の道を計る事に御心懸けになるを御薦めします食養生としては余り腥きもの刺戟性の辛き「ヤクミ」類酒類濃き茶珈琲等を一切御禁じになり便通は毎日一回必ずある様若しなき時は下劑を用ひられ醫師には一週一回位診察を受けらる可し。

○股の染み　妾は子宮より内股へかけて薄黑く染みの如くなりて困つて居ります者ですが何卒お敎を。（淺草の愛子）

『答』　黑き浸みの出來居るは子宮より出づる分泌物の刺戟の爲めです依て先づ其分泌物の出でざる樣治療せんければなりません之には專門醫の診察を要します。

○薄あばた　私は十歲頃「トビヒ」とか言ふものが出來てから今日に到ると薄あばたがありますがこれは如何すればなをるものですかお敎へ下さい。（薄命女）

『答』　折の御望みですが薄アバタは如何なる法を用ゆるも到底癒る見込はありません御氣の毒ながら御諦めなさる可し。



讀友倶樂部

棹させど
底ひも知らぬ
わだつみの
ふかき心を
君に見る哉
　　貫之

開き封

○母が好き　皆さん私の母は大そう小説が好きですのそれて乳姉妹が讀みたいと申しますけれど山里の事故持つてる人が有りませんので困つてゐます皆さんの内でお持ちの方は暫時お貸し下さいませんか　お禮は屹度致しますから。（出雲國八束郡王陽村井山千代子）

○文藝倶樂部の口繪　私は刺繍の下繪に致したいのですが文藝倶樂部の毎號一枚づゝ付いて來る木版の彩色畫（桂舟氏年方氏清方氏などの手になれる）きりとつたのを何枚でもよろしう御座いますから御惠み下さる方は御座いませんてせうか御禮には刺繍のかあどか婦人界か御好みのものを差し上げます（越後高田清香園内阿部秀子）

○文壇百人一首　私は今度面白い企を初めましたの、誌友の姉様の中から一人一首づゝの和歌を募集して好い作て百人一首かるたを作らうと思ひます、どうか姉様がたよ、ふるつて御寄稿あらん事を願ひます、題は隨意他人の作はいけません、かるた出來次第御禮に差上ます（千葉縣印旛郡川上村上砂藤左衛門方山本きかど女）

○歌と音樂　皆様私は片田舎に一人自然の音樂を友に文學を愛して居るものです私と趣味を同じうして入らつしやる方が御ざいますならばどうか面白い唱歌や美しい土地の樣子を聞かせて下さいまし其御禮には當地の狀況や自分の知つて居るだけの歌は御目にかけますから、それからヴアイオリンお持の方で御かまひなくば相當の價でゆずつて下さいませんか私は二絃琴を持て居ります御入用の方はおつしやつて下さい御送り申します（滋賀縣甲賀郡佐山村岩田方磨志緒）

○通ふ千鳥　千鳥なく淡路島より御情深き姉上樣へお願ひ申ます何卒何卒永久に通ふ千鳥に美しき繪葉書ことづて給ひてよ妾一生の願ひてすお禮は屹度致します（淡路三原郡榎列村六八〇小泉さと子）

○二十一の方　おなつかしい誌友の姉上樣方よえはがき玉章の交換をねがひます妾はれからず上等ものてきつと御返事申上げます寫眞ならあみもの〻交換もよどし〳〵送つて下さいませ妾は二十一てすなるべく同年の御方にねがひます（信濃國東筑摩郡島立村字南栗四百七十一番地吉江すみれ女史）

○雜誌の小說　獨步、白鳥、青果、風葉、秋聲、漱石、葉舟、空穗、花袋、藤村の著述又は作物の載つて居る雜誌を、送つて下さい、同定價以上の小說又は文學雜誌をお返しいたします（備前御津郡島田村松本元子）

○編物と寫眞　懷かしい皆樣よ妾編物やお寫眞大好きなのよいろ〳〵珍しい編物やお寫眞の御交換をお願致します妾毎日編物や裁縫を致して居りますのよ皆樣の内に珍らしい編物や面白い御本お持ち遊しましたらお送り遊して頂戴な尙三錢切手二錢切手お送り下さいました方にはお恥かしいけれど妾の寫眞や、編物お送り致しますわ妾男子の方にてもお情けのある方ならよくてよ（常陸國眞壁郡河間村大字蒔田宮川樣内はな子）

○世界の郵便　妾は世界の郵便切手を集めて居ます四方の男女の方々よ御所持てしたらお望みの品と交換して下さい又妾と同趣味の方は何卒御交際下さい（東京本郷駒込曙十一平島すま）

○髮の結び方　なつかしき東京市中愛讀諸姉の内にて今流行の束髮「後より見ると丸く束ねた毛が中程より衿足まて一筋に來て居る結び方をくわしくお知らせの方には早速紀念繪葉書にて御禮申上ます（下野芳賀郡大内村原泉九大塚ゆり子）

○英米の切手　諸姉樣方私は米國、英國の切手を持つて居りますから御入用の御方は御自分の寫眞か小說なぞと御交換してくださいませんか（新潟縣三島郡塚山大橋とした）

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇 原稿用紙 秀才文壇

◉投稿家に必要なるもの!!!

●此の原稿用紙は秀才文壇、女子文壇編輯局の認可を受けて專賣して居りまする他に類のない完全な原稿用紙です。

●此の用紙の最も特色とする所は紙質が純白滑澤て筆の走りが能いのとペンても毛筆ても自由に綺麗に書けます。

●夫から本月印刷の分から改良致しまして女子文壇、秀才文壇は勿論其他のムラサキだとかハガキ文學、新文林、其他の懸賞文學募集雜誌へも用いらろゝ樣に御便宜を計つて印刷いたしました。

●夫れて直段は半紙と仝樣て左の通りです。

定價
▲二百枚に付 金四十五錢也 小包料共
▲四百枚に付 金八拾三錢也 仝

●此の原稿用紙を御用いに成れば投稿規定に背く事なく、安心して募集に應じられます。

●特に御注文の方へは秀才文壇編輯局某氏の撰定せられたる（斯の如き原稿の認め方は必ず失敗す）と題する『原稿認方十則』を一々添えて無料て御送呈いたします。

▲二百枚以下の御注文は御斷り申上ます。

▲御送金は必ず爲替に願ます（神田局）宛の事。

東京神田區東松下町四十七 愛文堂

九月號 又 ま た

女子文壇

發行期日前に申込めば缺號なく安心して讀まれます

發行忽ち本社賣切

女子文壇の誌友倶樂部欄内へ揭載

▼希望廣告を開設す▲

（文明の世、何人を問はず、此欄へ廣告すれば、便利多し、有効疑なし、速に試よ）

◉就業を望む方

一件（五號十六字詰）二行金貳拾錢

一件（仝 上）三行金三拾錢

◉人を求むる方

一件（五號十六字詰）二行金四拾錢

一件（仝 上）三行金九拾錢

右申込の際原稿と共に前記揭出料金送付ありたし。爲替は日本橋區本材木町局宛、郵劵代用は一割增。振替貯金の拂込は第一七二九番女子文壇社宛の事。

東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社廣告部

辯護士 特許代理業者

東京日本橋本石町一丁目三

頓宮雄藏

（電話本局二八八三番）

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

ものはへる藥

多年實驗の生毛として特効驚くべき奇藥

一圓◎一圓半◎濃厚二圓半◎三圓半送料十錢

美容散 やせる藥

◎血ぶとり、あぶらふとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總の肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

◎定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓廿錢送費十錢



にせ物御注意

皮膚病專門藥

あせも　いんきん　たむし
あか鼻　ざくろ鼻　あざ
ぜにがさ　ひぜん　わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶に全治保證又おかいこむの憂なし

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

專賣本舗 東京本郷區本郷三丁目 電話下谷二二一九番 新宮藥舘

聲惡しき人又は聲出ぬ方

仰稱音聲惡しき方

聲の出ぬ人にても直に全治美音となる藥物あり郵劵封入申込あれ詳報す

東京四谷西信濃町十 岩佐香

色黑 にきび 吹出好 評嘖々

たるクヴルーの最新療法にて全治せし故同病困難者へ敎ゆ郵劵三錢送れば誓て全治美人の幸福を與へます

東京下谷區初音町四の十四女子美術學校前 長田

洋畫講義錄

執筆 三宅克己先生 岡田三郎助先生 大下藤次郎先生 中澤弘光先生 書伯外大家十數名

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油畫木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す每號美麗なる挿畫數多あり、每月一回發行、一年卒業、會費月廿六錢、詳細規則無料進呈

【新學期開始】東京市麻布飯倉四丁目 大日本繪畫講習會

繪畫講習錄

執筆 川端玉章先生 荒木寛畝先生 寺崎廣業先生 梶田半古先生 書伯外大家十數名

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に敎授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ每號美麗なる繪畫數葉を挿入す、每月二回發行一年卒業會費月廿六錢 詳細規則無料進呈

(巳の三)

諸孃と記者

○虫のこゑおもしろく聞く頃となりましたが記者樣方には お變りも御座いませんか私はいつも學校の事や家事の事でずいぶん忙がしゆう御座いますが其暇にいろいろおもしろい事や感じた事を記してありますが今までどこの雜誌にもあまり恥しいので出しませんでしたが此度思ひ切つて記者樣に 御目にかけますから拙い筆でおよみにくいでせうけれど御覽なすつて下さいまし先は御挨拶まで（大阪奚都子）（記者曰、御丁重なる挨拶に且驚めて、よそゆきの文章を私方に下さいまして何よりよろこばしく存じます）○記者樣にお尋ね申します 小說や凡ての原稿は始めの題の下には號丈け記してをいて住所姓名は別に卷終に記してをいても差支へは 有ませんかお答へ下さい（とみ子）（記者曰、差支なし）○原つれを君のお言葉は 記者も諒とします、紙面限りあり全部を揭げかねます、悪しからず（記者）○記者樣が 羨ましい。 妾は誌友倶樂部が一番好きですよ繰り返し／＼讀んで實に何とも云はれぬ樂しい心持がします。それにつけてもこの樂しい國に、數多の誌友に母の如くに慕はれ給ふ記者樣の境遇が妾ほんとに 羨しいわ（三河東加茂郡足助學校鈴木まゆみ）（記者曰、忙しい時には代つて頂きたいものです）○記者樣私はほんの田舍者で何もわかりませんがあの 皆樣と交際するには葉書でしようか 又手紙でしよか又宛名はたゞ女子文壇社御中でよいでしようか 一寸御知らせ下さい（越後白百合）（記者曰、ハガキでも半紙でもよろしく、 本社に宛てゝ下さい、 但し誌友倶樂部原稿と 云ふ文字を落さないやうに）

○まよひ子さんに、 餘りぱつとした お尋ねで答お出來かねます○二少女さんに、いつからでも○十五才少女さんに、原稿は郵便で送り下さい、宛名は女子文壇社○今村さんに、 繪葉書では口繪に出しません○しげ子さんに、成程四國の半紙は内地のより大きいやうです、其ままでも差支ありません、天地左右一寸づつ切つて下さらばなほよろしい○露の玉さんに、増刊のあるなしに拘はらず〆切の翌々月發表になります○内田さんに、ペンでもよろしい○出雲嶺子さんに、小羊の感謝はうれしく聞きました○辻本あい子さんに、前同斷は半紙のこと○よし子さんに、一等賞は何うですか○たか子さんに、姉さんと同封はかまひません○山中琴月さんに、京城からのおたよりおもしろく拜見しました○谷田峯子さんに、御卒業を御祝ひ申します遠くからでも何うか本誌の爲にも健在を祈ります○千葉、渡辺奈加子。越後、横山文枝子。豐前、白藻女史。神田、菊地研子。愛知、加藤わさ子。信子、。大阪春枝子。神戸、百合子。鹿児島、巽玉枝。たづ子。路見濟子。金井千代子。品川、蔡子。岐阜市、最上廉子。早川まさ子。廣島、古林敦子。岡山梨花。肥前、黒岩山人。鈴木ゆい子。しげ子。愛知、土居さち子。石狩、西部。高知、中平初子。佐賀、栗滴子。兵庫、きよ女。田舍の若葉生。以上の諸孃には一々お答をいたしませんが御尋ねの事は大抵よろしうございます、又いろ／＼の御あいさつは有難う（記者）○紙面の都合で文學顧問は今回だけ休みました（記者）○個人消息も休みました、何うか發表することがあるなら言て下さい、別に「問合せ」の欄を設けましたから御用事の方は原稿を送つて下さい、必ず出します（記者）○紹介欄も餘り申込がありませんから見合せました、京都府田舍娘と仰る方記者まで住所本名をお知らせにならないと出すわけには參りません○遠江、藤野濱子さん、陸前「阿部佐太郎さんに申します、私はあなた方に 書物の交換を申込んだこともなければ郵便を差上たこともありません、誰か名を偽つて悪戯をしたのでせう、私は本社と自宅の外から 郵便の往復をすることは滅多にありません、何うか御用心を願ひます（河井醉茗）

諸孃の交際

○何でも先着五名の御方には當佐世保の名所の繪葉書を上げますよ（佐世保市日宇福石免濱田宗一郎方河野蓮花）○お懷かしき皆樣過日は色々の品お送り下さいまして 有難う御座います。記者樣始め皆樣に深く／＼御禮申上げます （新潟縣三島郡深才村川崎貞枝子）○おなつかしき方々よ相變らず神聖の御交際の程御願ひ致します誌友の方で私と同性同名の方は是非とも御文給はり度（横濱市神奈川町石井芳子）○諸姉樣私は家事上暫らく退壇して居りましたがまた／＼、誌友のはしくれに加はりました相變らず御文交下さいませ必ず御返信仕ります（大分縣東國東郡西安岐村瀨戸田淨國寺の北近藤瑠璃子）○諸姉樣よ妾草深き山里に淋しく月日を送て居りますから何んの樂みもありませんただ諸姉の御便りを樂しみにいたして居るのみであります心ある皆樣何卒御不用の小說なりりぼんなり絹ハンカチなり繪葉書なり編物なり何んでも送て下さい御禮必らず致しますさよなら（千葉縣印旛郡

内郷村高座木山崎とよ）◎私は福岡縣下に生れ只今都合に依り肥前佐世保に住むように成りましたが此度初めて投書致しますから愛讀者の諸姉様方以後よろしく御交際御文通を願ひます（長崎縣佐世保市花園町榊原謙次郎方中村しずえ）○皆樣私は淺學なものですが信書の御交際遊して下さいませんか、私は智識見聞を博くするのが目的てすから（廣島縣賀茂郡仁方町手島まさ子）○親しき諸姉上樣姿も是れからは文壇に顏出す樣に成りました故宜しく御交際を亦た御玉章なり御寫眞の交換も御願ひ致します（岡山市内山下大手町三十五番地今東琴子）○誌友の諸嬢樣よ妾は霞が浦の北に淋しい日を送つてゐます御心ある方は古本か雜誌か寫眞か御惠み下さい私よりは霞が浦の產物か美しい美人繪葉書を以て御返禮致します（茨城縣新治郡歩渡村佐賀進子）○諸姉樣よ私は招鉢の底を見た樣な田舍にて月日を送つて居りますが何卒繪葉書玉章など御交換を願ひます（門司市外白野江字祥弁千代子）○其後は御無沙汰ばかり致しましておなつかしき諸姉樣よ妾は去月中旬信山曲川のほとりを去り品川裕投一室の地へまゐりました文壇の上てなりとレターの御惠みなりと御洩しを切に切に御願申ます（芝區出町七の十倉橋方村山文子）○記者樣私も文壇の御かけて皆樣から澤山御手紙を下されました。御手數有がたう御禮申ます中に文字が行書てお住所も不明のお方もありました、其の分には致方なく御返事いたしまず一寸申上て置きます。（みよ子）○御なつかしき本誌愛讀の諸嬢樣よ私は下記の如き極めて山間の地に生れまして日夜每に只一人にて淋しく暮す者てすから是非皆樣と繪葉書や玉章及び寫眞の交換を願ひます（群馬縣多野郡美土里村大字下大塚平柳登興志）○誌上の姉上樣よ私は京都に淋しく日を送して居る者てすが皆樣御交際を願升（京都市大黑町五條下る三丁目小野久子）○御なつかしき誌友の姉上樣よ妾は至つて玉章繪葉書の交換が好きなのよ何卒末長く御情けを以て御交際して頂戴な（靜岡縣盤田郡上阿多古村落合田口津多子）○戀しき誌友の諸嬢樣よ妾は金剛山麓の片田舍に住む不束ものですが目下府立高等女學校に通よつて居ります何卒末永く御交際を願ひます御玉章や美しい繪葉書寫眞あみものの交換を願ひます（大阪府下中河内郡堅下村大字法善寺東山口直子）○本誌愛讀の諸嬢樣方よ私は至つて不束者て御座いますが御情ある御方樣は何卒此後永久に御交際下さいまし尙繪葉書寫眞の御交換も御願ひ致します（水戸市厩前町七番地高島方深谷久子）○御姉上樣方どうぞ以後妹として交際して頂戴れたして姉さま方よお手紙頂戴御返事差上ます（深川區東仲町十五坪井ゆき）○私は先年無二の親友を亡き人にしましたから今は淋しく片田舍て悲んて居ります哀れな者てございますから失禮ながら記者樣から皆樣に御紹介下さいまし御依賴申上ます（山口縣周防國熊毛郡平生町、小野本貞子）○妾も愛讀者の一人と成つて居ますから何卒可愛がつて頂戴なそして繪葉書や玉章の交換もお願ひ致します（佐賀縣神崎郡西郷村尾崎八谷政宅、壺女）○誌友の姉樣〻妾は遠く此地に參つて甚だ淋しく暮らします何卒御交際を又妾は去る五月の汽車博覧會スタンプ付記念エハガキや臺灣第十三回始政スタンプ付紀念エハガキ其の外本島風景ハガキ土人の風俗寫眞いろ〱持つて居ます何卒姉樣方の御寫眞や古雜誌と交換して頂戴な（臺灣塗葛堀街村岡みどり）○私は田舍者て字は少も知りませんがカナてでも御返事は致しますから何卒皆樣御玉章て御交際下さい御願てす（北海道旭川町壹條通五丁目右壹號、山本たか子）○諸姉樣方妾は今年十八歳の無學の者てすが何とぞ本誌愛讀者の一人として御交際願ます（橫濱市神奈川青木桐畑反町四百七十二番地結田方倉持峰子）○誌友の諸姉樣私はほんとに何にも知らないのてすがどうか誌友倶樂部にれ―入れて頂戴よ（岡山縣岡山市上石井一七〇小林靜子）○何卒御交際俳句和歌寫眞繪はがき交換を願ひます（常陸新治郡安飾村岩坪金塚寅吉方大久保輝子）○私は淺間山の麓に淋しく日を送つて居る者てすが御見捨てなく御交際下さいネ（三河國八名郡山吉田村五反田鈴木吉太方同春子）○不肖なる妾をも捨て給はて數回と無く御親密下さいました諸姉樣に厚く御禮申ます尙相變り無く御願申ます（岡山縣玉島町二八五坪井小美榮）○ひろく繪葉書の交換を致したう存じます御禮は美しいのて（薩摩、入來村、浦之名、宍野自然）○友情あつきお姉樣方に寫眞御玉章の御惠送をねがひます（遠江濱松町連尺、六三、森下幾江）○妾は山高き信濃路に住む淺學者てすが繪葉書や玉章の御交際を願います御返事はきつと致しますよ御寫眞の交換もね。（長野縣小縣郡縣村本海野武井晴子）○私の父母の故郷は新潟です、新潟の方にお手紙や繪葉書の交換を懇請いたします。但しキリスト信者

てあつたら猶更よろしい、信者の方なら、何國の方とてもおつきあひ致します（岩代若松市七日町五ノ三十一、吉田きち）

○私は秋田縣の諸孃様と京都の御姉様とに御交際がしたい（日向國飫肥吾田村大字西辨分境みつを子）

○私七月末から八月中半迄遠方へ行つて居りました爲め御玉章下されし諸姉様への御返しもれが御座いましたか知れませんが何卒惡からずお許し下さいな。亦筆蹟の男子と思はれる方へは始めから御返事差上ませんでしたがこれも惡からず思召して下さいまし（武州秩父近藤とく子）

○妾は古里を後にして賑り都にいて〻何するともなく暮し居る少女故心ある方々よ折ふし毎にかりの玉章惠ませ給へ（東京赤坂區青山南町五丁目入十一番地伊藤清子）

○本誌愛讀者の諸姉様方よ何卒玉章の御交換して下さいれ返事は神に誓つて致しますよそれから書籍の交換もれ（筑前遠賀郡黒崎町雀部とみ子）

○レター や寫眞の交換を願ひます（靜岡縣志太郡廣幡村上當間臨済きく）

○諸姉上様よあまりわがまゝてすが皆様の内にハーモニカテツシンキン洋傘ハンドルカンいづれにても御不用の方は妾の女子文壇秀才文壇きさらぎ少女世界少年時代たちばな月いづれにても おのぞみのと御交換下さいませんか男子の方にてもかまひません（島根縣八束郡玉湯村井山千代子）

○お姉さん方お暑うなりました上田へ昨年から支那人が五十人程蠶の事を習ひに來て居りますの 春蠶の折などメリケン袋をさげて桑つみにゆく姿皆さんに お目にかけたいよう一時間に二十目か三十匁目の桑大きな袋の底に只すこし風が吹けば首にかけてある袋がまわつてゆきそう★、、、面白い事が澤山ありますのいづれまた（信濃上田二二五八、田村あい子）

○備後の方に告ぐ お志は有難うございますが去月二十三日着の郵便物雜誌と手紙と同封とのゆへて三種が一種になり始ての方にて住所を明記されてなく止むを得ず局へ届けましたご返事致さぬは以上の次第てすから……（德島、里子）

○本誌愛讀の皆々様一寸御願ひてすよ玉章の交換を永久に願ます亦御不用の雜誌シチリリホンハンカチーフ綴物繪葉書など御恵み下されたる御方には妾の見苦しき御寫眞に日光其他名所ゑはがき亦小說雜誌皆々様の望のを添へて必づ返送致します（栃木縣河内郡姿川村字下欠下佐藤きよ子）

○皆様お初にお目にかかり升私は高等女學校の三年て愚な者てすが永遠に妹にして下さる方はありませんか私は皆さんの交際が一時的なのを悲んてゐます何卒どなたても御手紙下さい必ず〱返信します（熊本市井川淵五十番猪本とめ）

○なるべく東京地方のお方て月に五回位まて通文して親しく末長くお交り下さる方はありますまいか五人もあれば此上もないと存じます誠にまづしい家の一少女て御ざいますから御承知の上て故あつて所を申事ができません、お心あります方は紙上て御知らせ下さいませ（神戸撫子）

○肉筆の寫生の交換を願ひます實にへたてすけれど（大阪市東區空堀通二丁目四百五十番高岸紅女）

○誌上の皆様どふか御交際して下さいませ私の様な不束者てすが御文通又は御寫眞も御送り下さい私も御送りいたしますから女學校に通つてゐますのよさよなら（石川縣七尾町鹿江撫子）

○繪葉書や玉章の御交換を願ます又御寫眞もれ私からはすぐ返信致しますよ（宮城縣柴田郡舩ヶ瀨村山家慶子）

○誌友の諸姉様玉章繪葉書にて眞面目に趣味ある交際をれがひます（島根縣石見國濱田町聚島中村富江）

○心ある人には永久交際を乞ふ（茨城縣新治郡藤澤郵便局區内須永郁代）

○遠くともしや諸孃が妾にまてもエハガキ玉章末長に交際し給ふならすぐ様御めぐみ下さい、御返事はつきしだいきつと致しますよ（長野縣小縣郡縣村本海野柳津みずの）

○全國の愛讀諸姉様方よ、私は小松と云ふ田舎にすんて居る不束者て御座います、何卒これから繪葉書や玉章の御交換を願ひ上げます（山形縣東置賜郡小松町高橋たか子）

○誌上の姉上様よ私一人淋しく日を過して居ります淺學な者てすが此後は文壇の御世話に成りますからよろしく御交際を願ひ升（京都市千本通三條上ル、赤松清子）

圖書換讀

○記者はじめ滿天下の諸姉様よ以後は何卒御訓導を願ひます、そして妾は小說大好きよ姉様方讀みさしの古いのても宜いいてすから御恵み下さいな、御讀は乾度致してよ、又寫眞の御交換も願ひます（佐賀縣御崎郡内郷村尾崎字須原八谷葦子）

○皆さん中に本誌內登九號を不用の方はありませんか讓り受けたいと思ひますが。寫眞の交換と繪はがきの交際を願ひます（攝津國豐能郡麻田村祝藤方梲綾子）

○皆様の中御不用書Aあらば B と交換を願ひます但し表紙あまり汚損せぬこと。（A）女學生、小猫、懸賞文集、弱薇、歌集あけぼの、觀音堂、あらびあんないと、ふろ郷、（B）朝ぱれ、思出の記、銀子、女學生訓、

自然と人生、破戒、下如歸、不如歸の歌、夏子等、右の中一部にても宜し、後者の方へは繪端書添へて暫つて返送す、（廣島縣雙三郡吉舍福中繁方多部竹子）○妾の手許に金色夜叉（合本）、多情多恨、亂れ髮、伯爵夫人、他に謠曲二三及び文學雜誌澤山あります、姉樣の內て寬風戀風（三冊）、か不如歸と交換願いたいのれ――（山城國相樂郡高山村松田英繁方松田綾子）○私の手許に四大家著小說作法と云ふ書物が不用になつて居りますから女子懸賞文集をお持ち合せの方は交換して下さいませんか尙文章講義錄が第一號より第八號迄不用に成つて居ります但し照會は直接に（京都硝町五條南入 井上初職方とみ子）○諸姉樣の內て鏈照大觀、御持合せの方は御送り下さいな、先着者には私の見苦しき寫眞を添て御禮致します（周防國熊毛郡田布施村藤井惣助內君子）○皆樣の許に乳姉妹（後篇）、其面影、白羊氏の靖ふじ、乙女の操、小女の戀、ふる郷、野の花、呪はれたる女、社會百面相、忘れかたみ、千山萬水、（上下）洋行土產（上下）、御不用なれば私の男女と天才、沙翁物語、肉彈、幻影、新不如歸、不如歸の歌、美文花園、伯爵夫人、名家短篇傑作集、所世訓、と交換下さいませ（長門豐浦郡田耕村伊藤はな子）○手許に女子文壇二卷一號から只今までのと玉幽、朝晴、半生の文章、婦人世界五冊、懸賞文集第一とございます皆樣の何本とてもようございますから御交換下さいまし、御希望の方は紙上て御名を、私の方から御伺ひします（野の花）○皆樣の御手許に金色夜叉、靑春、寬風戀風、コブシ、吾輩は猫てある、己が罪、乳姉妹、橫戀慕、等がありましたならば御惠み下さい、御禮としては慘風悲雨、世路日記、平家物語、徒然草、講義、短編小說集、太平記、國語辭林、大全漢語字書、くたわらび、露草、若草、新手腕、女夫波歌、俳文集、新派和歌評論、黃菊白菊、殘花集等何れにても二部づゝ上げます、（上野國藤岡町濱田文雅堂內飯島きよ子）○妾の手元に婦人世界、其他女子の雜誌が不用になつてゐますから、皆樣の文庫、華族畫報、史學界、地學雜誌、風俗畫報などゝ交換して下さいませ（新潟縣佐渡郡畑野村栗野江谷川かつら）○妾の手許に女學世界、少女の友、女子文壇、日本少年其他不用の雜誌が澤山ありますから諸姉さまの內て草書の手本を御所持の御方は幾冊とてもよいから御交換下さい是非お願いたします（福岡縣木屋瀨の眾手毘愛子）○皆樣の內にて良人の自白（全四冊）御不用てしたら妾の四季物語、詞の緖、（上下）附付絹渠にホトヽギス一冊添ます故お交換下さいませんか（埼玉縣北足立郡草加在瀨崎榛澤方しづ）○私の處に美妙遺蹟、女子文壇十冊（近號）、婦人世界五冊（近號）、田舍源氏十冊、婦人畫報四冊（先月迄）、京都名所寫眞、不如歸、浦島、其の外近號雜誌御座いますから皆樣の中露子、（想夫憐）女かんく、其の外の面白き小說と御交換を御願ひ致します。（仙臺北六番丁六十一橋本說子）○皆さん妾と弟の本箱中に文藝俱樂部、其他種々の本がありますから皆樣の御不用書と御交換下さいませんか（大阪市南區敷津町岩井楓）○突然ながら諸姉樣方よ妾事此頃故ありて潮の名のつく小說を集めて居るのてす。それて近所を探してやつと潮騷一冊手に入りました、皆樣の中に初潮、朝潮、春潮等御持の方が有りますなら、妾の母の心、月に立つ影（前後）、食道樂（夏の卷）、千年後の世界、姉妹の秘密、春雨、戀の旅、二人娘とお換へて下さいませんか又いひなづけ、我輩は猫てある等も讀みたいのよ（福岡縣八女郡水田村一九七潮上園）○懐かしき誌友の皆樣ㇾ妾は本やエハガキが大好きよ、皆樣の內に（女子作文作歌辭典）（ことばの泉）（詠歌辭典）（女性觀）（日本女禮式）（讃美歌）（國語漢文中辭林）（女子用文）（蕭齋作文辭典）（日本文典）（煩悶）（熟語辭典）（不如歸）（乳姉妹）（伯爵夫人）（靑春）（己が罪）（金色夜叉）（維子）（夏子）（秋の下露）などお持ち遊ばす方は送つて頂戴な、お禮としては手製の花形シホリ、寫眞掛、カード、覺突などお送り致します（茨城縣眞壁郡河間村大字蒔田宮川樣內いわ子）○不如歸、女の信仰、後の不如歸、野分、作文活法等が不用になつてゐますから、思出の記、三人蠶書、藤村詩集、等と何卒交換して頂戴な。（肥後上益城郡 瀧川村 大字泌田見 七八七 下田よしほ）○文壇の諸姉上樣方よ私の手許に三十七年の一五月分のと今年の七八月の女學世界、婦人世界一冊、二三年前の少女界四冊、昨年の文章世界一冊等ございますから皆樣の女子美文作法、女子新體詩作法其の他の雜誌小說類と御交換下さいな、而し男子の御方とは御斷り申上ます（周防國熊毛郡平生町小野本貞子）○皆樣の內て家庭小說其他如何なる小說本にても御不用の小說が御有りならば左記の書籍と御交換下さい、天うつ波、小猫、肉だん、蓮子、綠不綠、女夫波（前後）後の不如歸、食道樂、平家物語、

乳兄弟、寒菊、野の花、女學生、己が罪、二た昔、夏子、人の兄、戀、貴族の戀、クレオパトラ、モデル姫、未來の妻、處女の秘密、ハイカラ夫婦、女心、其他申込順に御郵送いたします（靜岡市大里村下島淵杉山潤）○下の不用書あり、女夫波の歌、淑女妙文集、明治才媛文集、東京遊覽案內。一葉全集、御交換を乞ふ（羽後酒田寺町菊池りう子）○親愛なる姉樣方の處に小野先生書女子消息文の手ほどき御不用なれば、私の獸醫譚話、村井先生和洋料理道樂、その外色々の古雜誌が御座いますから美くしき花の畵葉書て御申込み下されば直に御送り致します、（京橋區長崎町二ノ一小林喜代子）○皆樣の中で小說「不如歸」「夏子」を御惠み下さる方には私不用の「少女界十册」「女子文壇五册」文藝倶樂部、女學世界、增刊等の內御指名のを送ります（京都市小川通り二條上ル淸水たみ子）○心中舟、富と愛（下）、母ノ紀念（下）、奈落、二筋道（上）、世間（下）、濤聲、思ひさめ、不知火、破戒、火ノ柱、男ノ聲、妙な男、花賣娘、影法師、夫さだめ（上）、竹影集、小さなハート、黑潮、新空氣、雲がくれ、海賊ノ子、血汗、子供心、濱子、嗚呼無情、十五ノ小年、小野鵞堂の習字手本、秀才文壇第八卷三號から、仝十五號迄、妾の本箱にありますが、皆さんの內で、紅葉全集第一卷、一葉全集、二十八人集、戀に戀、思出ノ記、夏小袖、女浪人、いゝなづけ、コブシ（三）、新生涯、などお持ちの方は小說指名の上、お送り下さい、（橫濱市千歲町一丁目十二番地宮部捨三郎方宮部道子）○皆さんの中に「金色夜叉」「不如歸」、「思出の記」、「靑春」、「魔風戀風」、「筆子」「肉彈」、「女夫波」、「徒然草」「乳姉妹」「己が罪」、等何れにてもお持の方は妾の「雅語譯大成」「國語漢文新辭典」「小笠原諸禮式」「俳諧歲事記栞草」「新撰一萬句」「小羊」何れとでも交換して下さいませ、それから雜誌ならば大抵なのは有りますから申込んで下されば何程でも添えて進呈致します（尾張國東春日井郡鷹來村大字田樂鈴木秀子）○私の婦人界十部と婦人世界第一卷全部及び第二卷三號と御交換下さいませんか（越後高田町淸香園樓內阿部秀子）○妾は只今、婦人世界、其他の婦人の雜誌見て居りますが皆樣の面白い雜誌と御交換を願ひます、（京都府相樂郡高山村大字田山森西松野子）○誌友の皆樣よ私女學講義、若夫婦、好男子、妻と妾、しまだ、乳姉妹、夏子、其他東京の兄さんが送て下さつた雜誌がありますから面白い小說で申込みなされば私の寫眞をそへて送ります（岡山縣川上郡目黑村大字黑忠家本辰乃）○本誌愛讀の諸姉樣！皆樣の內で懸賞文集の第一でも第二でも宜しいから不用の方はお送り下さい必ず御禮を致しますから。（大阪府三島郡茨木西外榎浪春枝）○皆樣のうちに不如歸の歌、御持ちの方は御送り下されませんか（福島縣石川郡添田松子）○妾の許に三十九年の文藝倶樂部三冊、女學世界三册、昨年の成功少年一月より七月迄、幽靈船、冒險奇旅行、若き妻、等あります筆子、琵琶歌、後不如歸、等と御交換を願ひます。（島根縣石見國安濃郡大田町桝野咲子）○私は世にも便りない孤兒で御在ます、お情け深い姉樣や兄樣、御不用の小說詩集如何に古くても宜敷うございますから、御惠送下さいませんか、先着十八名には醜くい私の寫眞に、白菊と云ふ雜誌か、又は姫百合と云ふ雜誌を添へてお禮致します、（神戶八雲通三ノ二平林方星川松子）○良か不良か。女心。御持ちの方あれば以下の書と御交換下さい、母の罪。寬の池。戀の罪。かくれ笠。女天一坊。少女の戀。立志兄弟（前後）。と御交換下さいきつと御返禮いたし升（高知縣高知市升形三入山內志津子）○私の手元に經國美談、普通物理學、新撰地文學、萬國地理、簿記教科書などの不用書がありますが皆樣方の中に加茂眞淵全集、透谷全集、鳩翁百話、駿臺雜話註釋等の書物がありましたら何卒送つて下さい着次第に私の寫眞一枚添へて差上ます（新潟縣佐渡郡畑野村栗野江谷川桂月子）○皆樣のもとに小說不如歸、新ホトヽギス、澄子、伯爵夫人、其の他のものがありましたら御送り下さい不用の雜誌または寫眞でキット御返しいたしま

す。（靜岡縣濱名郡篠原村鈴木貞子）○誌友の皆様、私の許に教育小説「棄石」「身心修養長命術」。「成功と體育」。「我家の憲法」。「名門豪傑の家庭」。「風采と審美學」。「古今俗曲全集」杯ありますから「ヴアイオリン教科書」。「オルガン教科書」。「ヴアイオリン唱歌獨奏」。「英語唱歌」其他有益な書物と交換を願ひます。（徳島縣美馬郡岩倉小學校内はまだ）○妾の手許に少し古いのですけれど左の書物がありますから皆様の中で御入用の御方がありましたら女子として參考となるべき書物と交換して頂戴な、御禮として日野公園繪葉書一枚づつ御添へ申ます女子文範、品性論、名士の演説振、あめりか物語、露、偉人に及ぼせる婦人の感化、育兒法等。（滋賀縣蒲生郡日野町増治ゆり子）○皆様の許に青春全部、露子夫人、婦系圖、其の面影、緣不緣、澄子、天うつ浪全部、紅葉全集第一、ふるさと、花守日記、銀山王、藤村詩集其外譯詩等合せて二十四部不用になつて居ますから文學雜誌三部以上と御交換下さい但皆新本同様にて少しも破損はありません（山口縣佐波郡三田尻本町西法寺前藤井よし子）○なつかしき誌友の姉上様御願ひてすから本誌の一卷の一號より十六號までと二卷の五號より十六號までとをかして頂きたく御座います御禮はリボン名所ゑはがきて致します御聞入下さる御方が御座いましたら一寸御知らせ下さいそして永久に御交りのほど御願ひ申ます（播州飾磨郡東山村橋詰てい子）○親愛なる諸姉上様よ妾の手許に女子文壇秀才文壇はがき文學文藝倶樂部とがありますから皆様の不用な雜誌と御交換下さいなどうぞ御願ひよ又大阪市鐵電鐵開通記念の、スタンプ付のはがき持て居りますからどうか此も御交換下さい（大阪市東區高麗橋詰丁四五西田方岡部紫星）○誌友の皆様私の所に左記の不用書がありますから金色夜叉、少女の煩悶、藤村詩集、にせ紫、思出の記、コブシ、青春、朝晴、吾輩は猫である、新曲浦島のいづれとても御交換してください、實用鑛物岩石鑑定吹管分拆及地質表、大日本普通植物誌、片われ月、敍景詩、Xy合本、絕島奇談、中等教育算術敎科書、中學理科示敎、ひとりぼつち、愁人、化學問答、地質學問答、はつしほ、學生の苦心、中學記事文範、英和女子書簡文、虛心談、二十世紀、日英會話、學窓茶談、品性陶冶論、戀の行末等（新潟縣三島郡塚山大橋としを）○誌友の姉上様よ御許に不如歸家庭料理法美文集の如き何なりとよろしくありますから妾の女學生訓、詩集、紅葉全集、金色夜叉、緣不緣、寬風戀風、思出の記、土佐日記と交換して頂戴な其他雜誌は何でもあります（靜岡縣駿東郡北郷村天野英子）○お姉さん方の中で本年八月號の「新聲」か「新潮」かどちらでも送つて下された方には妾秘藏の小說の一冊送ります文學書類は大抵あるつもりですがお望みの書を書きつられて申込んで下さい又私には「青果集」獨歩さんの著書「花袋集」など自然派の小說は一冊もありませんから新派の詩集か小說か御申込の上御送本願ひます早速送ります（羽前國新庄町北本町四六高橋とし子）○私の手許に「獨歩集」の一二、「文學全書十迄「花のゑみ」のよごれないのがあります、此中どれても「ハイネの詩」「テニソンの詩」「ゲーテの詩」「キイツの詩」「夢見草」とおとりかへ下さい、又私の許に「自然と人生」もあります（日本橋區中洲十八新居つね）○皆様の中に不如歸、金色夜叉、藤村詩集、お持の方は御送り下さい、有益の雜誌又は名所エハガキにて相當の御禮申上ます（栃木縣足利町榮丁柳田幸吉方白露）○萬天下の女子文壇愛讀諸孃よ！吾れは切に全國各地の高等女學校の眞景寫眞（繪葉書にても宜し）及び同窓會報告書等の寄贈若しくは借覽を望む郵税は當方にて負擔す（福島縣伊達郡藤田鍋町武田茂登子）○諸孃様の中に。不如歸。朝ばれ。英語世界。婦人世界。千草の錦。化粧かゞみ。家庭小說。女學世界。朝顏日記。其他種々小說本や雜誌御持の御方は私の。ふところ日記。舊約聖書創世記。茶の湯生花。磨の池。弓張月。松虫塚。中外古今英雄軍談。キッス詩文などと交換してくださいませんか（千葉縣山武郡白里村四天木中里村内山やす子）○九月號の早稲田文學、趣味、中央公論、新聲、婦人世界の何れかをお持ちのお方は私の女學世界、文藝倶樂部、ハガキ文學の何れかとおとり換へ下さいまし、（千葉夷隅郡國吉村刈谷今井なをし）○敬愛なる諸孃に御願ひ申し上げます「塔影」「ハイネの詩」「思ひ出の記」「美文作文」「新體詩作法」「白羊宮」「靜夜」等お持ちの方は私の「少女界」「ムラサキ」「寬風戀風」「花守」「みだれ髪」「毒草」等と御交換を願ひます（大阪市北區河内町筋寺町南河本千代子、○皆様妾の手許に二十八人集。伯爵夫人（前後愁人。天才。夢の花、自然と人生。などの不用書が有ます、手風琴、亦は洋琴と御交換成すつて下さいませぬか御認に依り三冊づつ差上ま

す（きみ子）○貴樣の內に、金色夜叉、伯爵夫人、笹子、己ヶ罪、御持ちのかたは、私の、假行の賊、風月萬象、少女界、少年世界、婦人世界、其の外古き雜誌と御交換下さい（陸前志太郡古川淸水部女）○近江の上田波瀾子さん御中の山中松枝樣備後の笠岡くみ子樣 御望の小說送りましたが着きましたか御ほ永久の御交際を願います、さて皆樣私は まだ『金色夜叉合本』『紅葉全集第二卷』『青春』『魔風戀風』『思出の記』『笹子』『自然主義』『英雄小說雜誌』澤山御座いますから『風葉集』『紅葉全集』（二卷六卷を除く）『英文不如歸』『伯爵夫人』『奇妙な男』御持の方は交換して下さいれ（岡山市內山下七二平井みどり）○何とぞ玉章、絵端書。寫眞の御交換を爲て頂戴、何か縮緬製のヒワッキなば御惠下された方數名に寫眞に戀と人生。未來の妻。戀衣。亂れ髮。己が罪。我が思いの內御望の二雜誌を添へて御返禮申（日本橋區本銀町一丁目竹砂山しげ子）○誌友の姉上樣方!!!「虞美人草」「夏子」（前後）「己が罪」（揃）「乳姉妹」（揃）「新夫婦」（揃）「言葉」右之內御不要の御持合せなら妾所持の左の内御望み 通り何所でも差上升から一應照會を願ます「濱子」「いさゝ川」「夏小袖」「櫻の御所」「花袋集」「對外歷史」「理科教科書」「獨習自在レース系編物」「從三輪」「鶯宮文の手ほどき」「日本外史新譯四冊」「乞食旅行」外に雜誌數多あります（秋田縣湯澤町泉川けん子）

問合せ

○井田禮子　越後高田か直江津の諸嬢樣の中で今年十六歳になられる井田禮子樣と仰る方を御存知てすなら お知らせ下さい私は五年前に我賀で親友になつたものです、何うか紙上て（京都、喜久子）

○西村菊千代　越後の竹生にいらしし西村菊千代樣――十七八歳――と申す方を御存知なら下名へ（福井縣竹生町池上小芳）

○大富克己　山形縣の御方に申します同縣東置賜郡樣乃目村字高江村の大富克己樣は只今何處に居られますか不明て困つてゐます御存知の方がありましたら郵稅先拂にても宜敷是非御知らせ下さいお手數ながら（京都府相樂郡木津町小寺町平島方松子）

○上田文子　本誌上で見ました京都の上田文子樣と申すのは北海道札幌に入らした方ならお識しう存じます その方なら私の名も御存知とおもいます 若し人違であつたら御免下さい（佐々城よしゑ子）

記者曰、　此欄は人を探す方の便宜に設けました、御用事のある方は 遠慮なく御出しなさい

剽窃詩文の注意

○第十三號の分　福井縣、吉田梅子、新體詩秀逸「窓の戸」は新文林五卷二號より。

○第十二號の分　千葉縣、吉田たけ子、新歌壇秀逸、「君の玉章」は本年四月六日の萬朝報俳壇欄より。

右、何れも剽窃とみとむ。

▲今回注意を與へられたる諸嬢は○三河。すみれ女○臺灣。野草庵一水子。

寫眞を求む

誌友諸嬢の寫眞

本誌讀者諸嬢の御寫眞は每號掲出して居りますが猶ほ盛んにお送りを願ひます

家族の寫眞

誌友諸嬢の家族皆樣とお撮りになつた寫眞、或はお子樣方の寫眞、何かの紀念にお寫しになつた寫眞などを歡迎いたします

風景の寫眞

諸國の風景「或は風俗、山岳、河流、市街、野外など餘り有り觸れないのをお送り下さい

小集の寫眞

僅へ二三人でも又は多人數でも誌友小集などを催ふされた時の寫眞は必ず掲載いたしますから御寄送下さい

返送と報酬

寫眞は御希望に依り用濟次第に御返しいたします、又寫眞に依りまして本社て是は好いと認めた場合には相當の報酬を差上ますから右記載の寫眞を試みにお送り下さい、並に改めてお勸めいたします

文壇餘興 新聞談（新課題）

新聞談とは新聞のお話をすることです、何んなことを話したらいゝでせうか。

▲先づ自分が何新聞を讀んでゐるか、と云ふことをお話しなさい▲それから新聞の記事の中では何が好きか、何を最も先きに見るか、續き物か、論説か、二面か、三面か▲續き物は何んなのを愛するか▲新聞記事の可否▲新聞と家庭▲地方新聞のこと▲都會の新聞のこと▲挿繪のこと▲新聞と文學▲新聞を切抜くことに就いて▲新聞の配達される時間▲新聞を讀む時間▲古新聞の始末▲古新聞を藏するや否や▲新消て得た利益又は不利益▲新聞の讀み初めのこと▲新聞賣のこと▲新聞と我が記聴又は聯想▲或る記事に就いての惑▲以上の内の一つでも又は以上にないことでも新聞に就てのお話なら何でもよろしい▲原稿には文壇餘興新聞談と書添へること▲十六字詰十行内外▲懸賞は一等より五等まで例の通り

▲締切は本月二十日

雜報

○文壇の光

臨時增刊『文壇の光』の出るのはもう十五日です小説詩歌の類に傑作の多いことは申すまでもなく、美文の如きは無慮千有餘篇集つたので係りの記者は夜を日に繼いで好い作を選拔しました、發行の曉は全國諸孃の胸を躍らすでせう、一刻も早く御注文を忘れないやうに。

○豐年

今年は十年此のかたに無い豐作らしく豫想されます、二百十日も無事、二百二十日も無事、一時の冷氣は直ちに恢復して秋高く雲は綠に稻は黄に穰々たる田園の豐かさには自ら喜びを禁じ得ないのです

○十五名の女優

川上貞奴の募集した女優志願者のうち及第したものは十五名、皆相當の教育ある女子ばかりです俳優が藝術家として世に敬せられるやうになるのはいつか知りませんが此等の女子は虚榮の爲てなく好奇心てなく眞面目に藝術家として立つだけの決心を持たねばなるまいと思ひます

定價

女子文壇　毎月一日發行　其外　定期增刊（二、五、七、十一月十五日）四回發行　臨時增刊（四月十月）貳回發行（例號二倍）

冊數	前金	郵税共
一冊（定期百廿頁）	前金拾錢	郵税共　計金拾壹錢
九冊（増刊トモ半ケ年分）	前金九拾五錢	同　計金壹圓〇五錢
十八冊（増刊トモ一ケ年分）	前金壹圓八拾錢	同　計金貳圓
六冊（増刊ナシ半ケ年分）	前金五拾七錢	同　計金六拾三錢
十二冊（増刊ナシ一ケ年分）	前金壹圓〇八錢	同　計金壹圓貳拾錢

〔備考〕○定期及增刊は各拾錢郵税壹錢　○臨時增刊は金貳拾錢郵税貳錢

振替貯金の拂込は登記料貳錢增すこと
郵便切手代用壹割增○收入印紙謝絶

▲女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番

明治四十一年九月廿八日印刷
明治四十一年十月一日發行

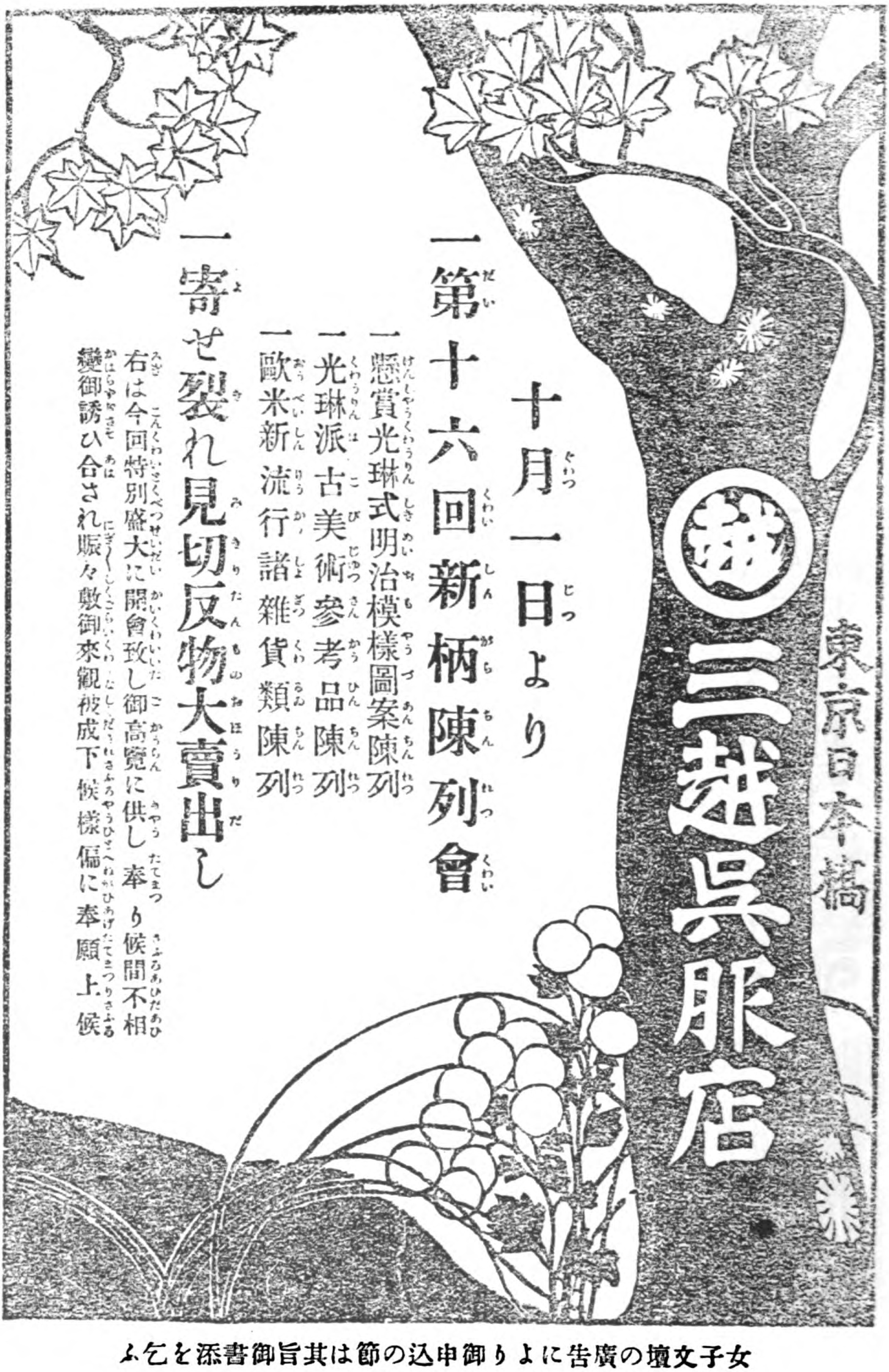
定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社 秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話［本局六〇七番］　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂


東京日本橋
三越呉服店
十月一日より
一第十六回新柄陳列會
一懸賞光琳式明治模樣圖案陳列
一光琳派古美術參考品陳列
一歐米新流行諸雜貨類陳列
一寄せ裂れ見切反物大賣出し
右は今回特別盛大に開會致し御高覧に供し奉り候間不相
變御誘ひ合され賑々敷御來觀被成下候樣偏に奉願上候

(服部製本)

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇　定價　無比　金拾錢　郵税壹錢

【東京秀英舍印刷】